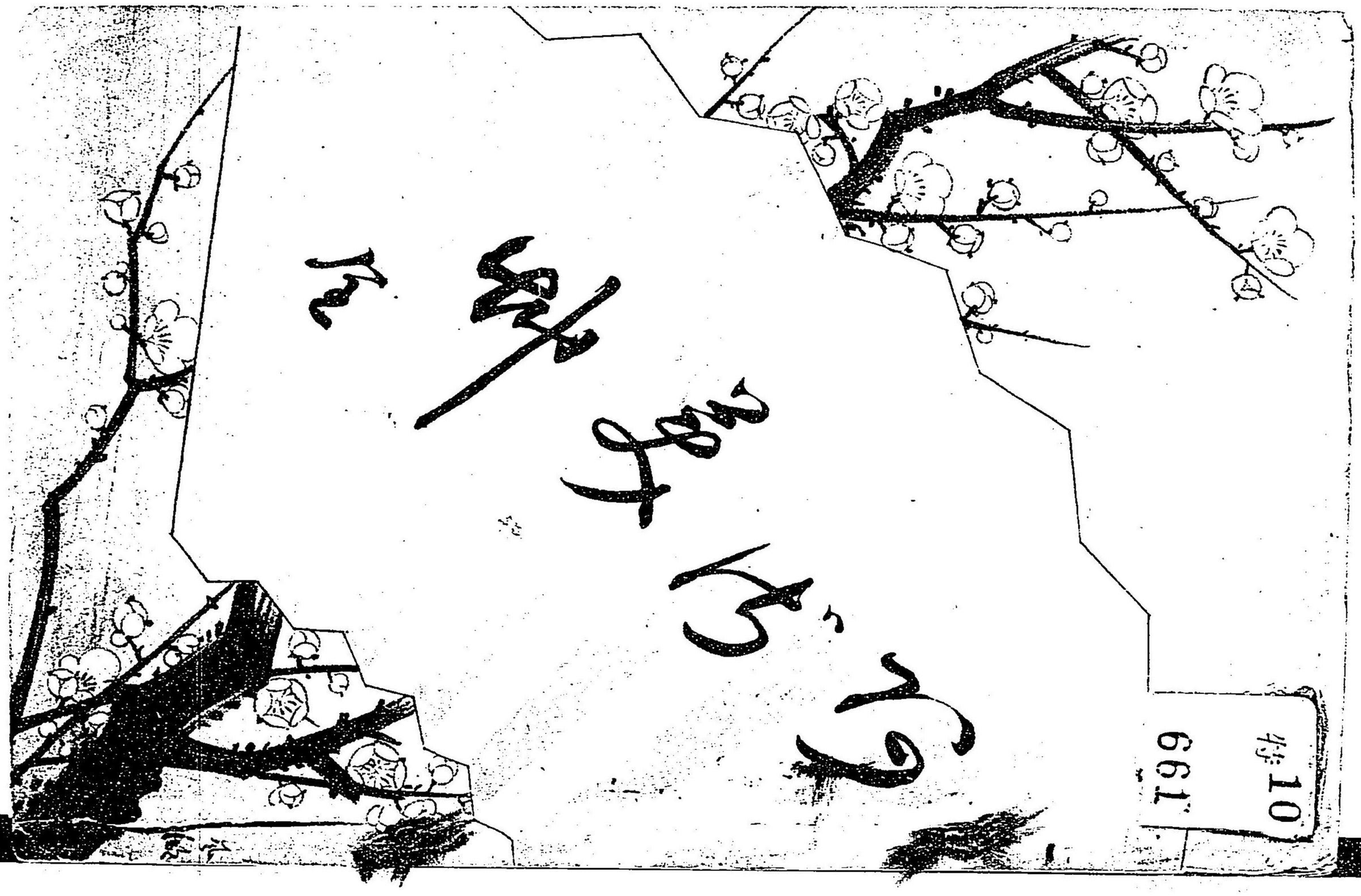


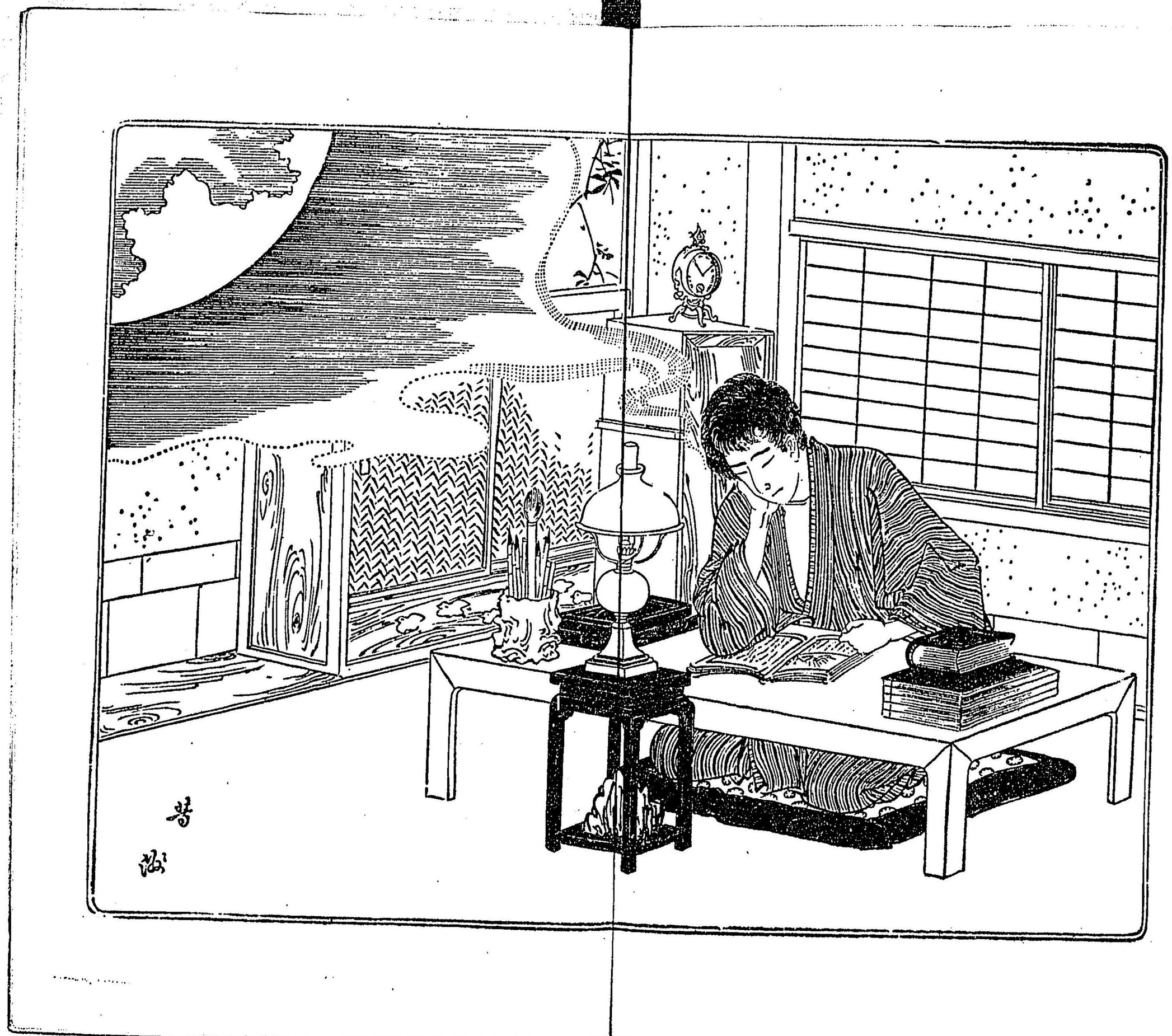
#10
661.199

特10
661

所等教人苦

文學會

鐘美堂發兌



あさみ草

序引

東の大和の國吉野郡なる僻村里の道傍に一軒の茶店あり丸木の柱茅葺屋根の牀几と[illegible]の[illegible]して其脚を托せ。一尺の曲突と頑ちよ地を掘て成る。立昇る烟の松を掠る景色[illegible]たる眺にと見かへることさへおらず顔打しかめ沸れる鐺より。番茶を無雜[illegible]れ[illegible]客の來るを待つと是なん此店の主翁なり垢づける袷衣に尻斷草履。其身の[illegible]成ちもいと客貌醜遇ひの何とやら尋常ならぬ處あると。昔は某の藩士と言れし人の。[illegible]時代の[illegible]風雅でも酒落でもあくしやうことなしの食詰藥。年紀の程は已に早。五[illegible]の[illegible]を[illegible]客の旅客を目的として果敢なく餘命を繋ぐなるべし。頃しも秋の尾冬の頭の天定めなく颯ぐ降濺ぐ一村雨を此茶店に避け或と澁黑き番茶啜りて主人を敵手よ打語ひ或ひと濡たる衣裳を火に爛り或ひと行李を捆みかゆる抔。六個七個の客人あり其中に首座を占めたる近き傍りの村會議員か或ひと戸長ならんと見ゆる人物。今迄の談の端を改めて茶紬の羽織に小倉の袴を穿き懷に時後れたる數葉の新聞紙をいれたる年若き教員

らしき人を見やりて　畑尾「時よ先生近頃何か珍談は御座らぬか　山田「イヤ畑尾君別に是と云ふ事も承りませんが例の長崎より初まれる馴病の追〻東漸して終には大坂迄打寄せ参りしは何より以て悲心千萬。併し時候も追〻寒さに向へば此上大事よも至り升まい。新聞紙の報ずる所にても　畑尾「左様日〻よ先づ減少の統計が見るが何より結構。少しは安心で御座ると吸かけし烟管の莨をもたき更わ一服を吸つけて　畑「君が讀み玉ふと何新聞か存せぬが近來と續物語の流行し何の新聞紙わも出し升ナ　山「傍訓新聞よと無てならぬ様よありました　畑「然とも古い話を長々と書綴るは新聞と云ふ字面より見てもチト如何のもので御座らうか　山「怎は曰ふ所なれと其議論こそ今日にては早事古りたる問題と云ふべけれ。畢竟するよ斯る新聞紙を好する世情にして斯る新聞紙の行とる〻譯なれば。假令世界に其類と少なく名義に於ては不都合わらんとも。只之のみに拘はりてと新聞紙の効用を廣く世間に及ぼすことを　畑「成程得られぬ場合もあるで御座らう　山「但夫の筆を舞弄して猥褻淫靡に騁する如きと。固より之を削らんのみ　畑「然らばサ例の續き物も随分讀んでと面白き節もあきにあらずぢや　山「舊聞新識故きを温ねて今日の俗に合す。這箇の譯多少の妙匁方便の存することをおくんはあらず。到底是亦一箇の新聞たるに相違とあり升すまいと畑〻山が得意の新聞論。折しも曲突の炎氣に昏々と睡氣を萌せる店主翁眠を擦りつ〻道面に捻向き。開けば君翁と新聞嗜其新聞にて思ひ出せる事こそあれソレ見玉へと遥かよ外の方指さして「アレアレ向ふの草の庵近頃其處に移り住ひ一個の尼が身の上には恐ろしくも亦奇らしき様々の話ありと云ひながら鼎儿の端に臀打掛け倚降止まぬ空を眺め草鞋の紐を横り居る農夫らしき男を見て「喃籾助どのと孫に近處の事あれば定めて聞て居らる〻ならんが人の行末と水の流とは分らぬといふことあれど人の過來かたも亦知れぬもの今見るまゝでは宛ながら佛の様な人なれども　籾「イヤ誠に然ぢや容易よ何とも分らぬものと云ふをば聞て両個と坐ろに座を進め怎と實に奇談新聞ならん我們も兼て彼の尼が。風説聞かぬにあらねども委しい事は未だ知らず。天の霹るゝは尚時間あらん。姑げあくば店主の翁よ。爭で話て聞せよと。請求れるまゝ主翁は左迄辞ひもせず。茶碗棚の傍りより綿脚臺取出し臀を据ゑ然らば是より一通りお話し申さんに事長くとも所き玉へと。手酌の微温湯を啜飲み。咳一つ二つして扨とはかりにいかめしく物語をぞ初めける。

第壹回

話説も此わ大政維新よりと猶幾十年のその昔大阪の市街を距ること程遠からぬ三軒屋と酉

ぶ村里に居邸立派よ建設け許多の田畑を有つゝ尚かたはら主管に典舗さへ開かして最上富裕に過活し居る若倉屋重右衛門と云ふ人ありしが天道は貧に盈るを厭くものなるか其年齢五十におらぬ中早く女房お死別ゐ斯る家には出入る人の多ければ後妻を娶れと勧ることの屢〳〵ありしも重右衛門と思ふ仔細やありけん皆好き様よ謝絶て只亡女房に生せたる獨り女のお勝(當時十二三)をば蝶よ花よと護育て年頃ともなりたらば好き婿取りて世を譲り自分と氣楽に餘生を送らん早く成長せよかしと。待兼もしつゝた之を樂しみとして居たりしが元此重右衛門は温厚の長者にして仁慈の心頗る深く是迄貧を潔ひ賑せること度々あり。然れども平生と固く倹約を守りて敢て奢らず去迎禮節に係る費目おどと更に吝むことなく酬分其儀を盛んおする性質おれば闔村の氣受けと勿論近き邊りにて重右衛門の名と其德とを知らぬものなく名望頗る高かりける恁て或年の事おるが霜月中の五日は重右衛門が誕生の日に當れば朝未明より汁に膾と交せかへす物匆忙しき臺所椀家具屏風を土蔵より運ぶ小僕の脚元に酒瓶り肴飛ぶ。粗相も今日は縦されて。塗と碟には花緒なし。浪草よ履おの。險なしと氣をつけらるゝ舌の根も。拭て乾かぬ廻様。出會頭お掃除方。塵に汚れた脚なから。這裡を履ひとと。不埒千萬。翌と主管の權柄脳し。勝手方とは譯が違ふと頭掻く手も遑

く。はき手掃ひ手手分けして。稍や客待の供張け。準備了へば正午も過ぎ。未の歩み夫おらで早徐々と入來る。親類中の五兵衛六右衛門。續て日頃別懇なる甲乙を初めとし。當て出入の小農夫。十幾個を一群に。各々案内を辱おし。愛たう御座ると謝しつ祝しつ。人大方よ打そろへば主人は頻て眺望し好き。二階を撰んで請ひ上し。座着の吸物塗盃。初の程は慇懃に。互お張肱切り口上。先々召れの挨拶も。何時しか亂れて高笑ひ。果ては座中の老分が。娘御のお琴を一曲拝聴と。云ふに緒解け初て。裁縫婆のお縫が何處よりか三味線取來て彈出せば。勝手廻りの平助男。這裡を晴ぞと舞踊る。手振り抽き隠し蕩も時に取ての大當り皆々笑壺に入あひの。鐘も聞ゑず喧々と。歌つ舞つ已にはや。夜は二更近くおりたれども酒宴は愈〳〵冴が來て何時果つべしとも見ゑざりける浩る折柄下家には年倘十二の子供おがら多き雇人の其中よも漏て才物の聞ある小厠〻吉が。今しも背戸の便所よ登んとて。照る月影に。意はず向ふを眺ひれば。建連ねたる土蔵の傍ら。葉は落散ても枝繁き。鴨脚の樹の下お何やら怪しき物影の仄見ゆるにぞ〻吉は何心なく誰ぢや何者ぢやと言ひながら二足三足進む中に端なく月は雲に入り木立隙なく草深き田舎家のことなれば四邊一體暗くなり那の物影も見ゑ分かねど心刺きたる〻吉おれば徐かに歩みて近づきつゝ只見れば果して一個の曲者あり今〻吉

が前に立ちはだかるを。傑遊して遁んとする幾。遊らく消し去敬りて。忽ち照らす月影よ白快く読む曲者の。面と包めど衣類骨相。正しく此家の夜廻り番人。正直淺平と云へる〳〵男。〆吉は大聲挙げコレ淺平何しよ此處へと言ふ間もあらせず夫の曲者背後に隠せる一刀引抜き撥き走る〆吉の肩先一撃斬つけつアッと一聲高く叫ぶを。猶も斬らんと振上る刃の下にも〆吉と砂を掴んで早速の眼潰し一入聲を振絞り賊わり〳〵と喚はれば家裡よと斯くと聞くよりも皆〳〵驚き駈來る。様子を覺りて。曲者は忽ち〆吉を打棄て、。兼て其逃路に開け置しか後の園の小門より何地ともなく逃失たるが跡にて主人の亘右衛門家内の者們と更にも言はず今日の客人さへ立出で〳〵先血に染りたる〆吉を母屋よ入れて介抱し扨心掛りは土蔵なりと亘右衛門は自から吊燈手よ引提げ小厠們よと捍棒薙竿思ひ〳〵の得物を持せ多くの倉庫を片端より一〳〵検先行く中に奥座敷より通ひの金庫。壁に斫破りたる孔あればスワ変ありと慌り動揺き。當の賊は逃げたれども。敵の情態倘測られずと。棒ちきりのみ厳めしく。何れも人の背後に廻り。吾先陣を試みて。裡面の様子を査べんと。云ふもの容易よあらざりけり

第二回

幾基か盗据たる燭竈の光輝と庭の隅ませども。隈なく照せど。夫の明り吾身の嫌疑。言解く術

て泣くばかり。淺平の女房お石が主家の便室の出入口遥か這方に既ようき。傍お五歳と三歳になる。兩個の女子を坐らせて。又懐よと當歳らしき嬰兒抱き。せき來る涙拭ひも敢ず。片手を突て主人に向ひ旦那さま夜中と云ひ殊よと速急なるお喚立何事あらんと驚きつ、急ぎ参れば此変事。仰しやる所を承はり升れば成程〆吉どのが姿を読め。其上是此手拭と本年の盂蘭盆の御祝義よ。慰き申して淺平が。日頃拵ちたる白地に稲穂。而かもお家の紀號ある分銅さへも染てあり。之が逃げたる其跡お。遺してありし上からと。今宵三百兩を盗取り。剰さへ〆吉どのに傷を負せたる盗賊は。淺平なりとのお嫌疑。さら〳〵御無理はおい譯あがら我夫に限り。決して左様な恐ろしき根性のある者ではなく況して御存じの病勝ち。其病の平癒を祈らんとて現に四五日以前より。平生信仰のお大師さま。高野詣りで今は旅行。夫も初めより云々と打明しなば。扯留るのが五月蠅故か。賤人の留守お出立して。後から大坂より飛脚便り。其由知らせの此書状。渇筆にて見悪う御座りますが正しく夫が筆の跡。是にて嫌疑お霧し下さりませと云ふを主人は聞入れずコリヤお石夫は亦何を。云のぢや其淺平が家裡よ居ぬと兼て小厠們よりも聞たるが。是が何しに盗賊でない證據とならうや。却て夫ぞ不審の第一。又彼が忠實めしき心立と。乃公も疾くより見抜ばこそ。正直淺平と云ふ綽名さ

へつけ。一方ならず憐憫もかけたるなれ。今更言ふも無益しけれど彼が十九の其年に。生國備前の岡山在より。當地へ稼ぎに出て來た時より。偶とした縁で我家に使役ふて其氣立なり働き振を試めして見るに。正直にして偽らず。日々の操作よと精を出し。陰陽なき勤め人。算さへも達者なれば未熟母しく引立て〳〵終ひには彼が二十二の年。次主管迄に昇任させ是より後は一層忠勤の効も見え。乃公も鈎かに眼力の違はざりしを喜びて。一年あまり暮す中。何が若い者の習ひとて。數ふれば八年以前お石と惜か貫様と同い年。如何いふ端から出來たか知らぬが。彼と怪しき交とあり。見るよ眼だるき素振もあれば。一旦と不埒ナ奴と腹立しが。思へば彼が忠勤のみならず。貫様も尋常の下婢と違ひ。實直にして精悍しく。何れ其中好い先へ。嫁入りさする心計畫もあること故。此に思案を立換て。寧のこと、。彼と貫様を夫婦とおし。幸ひ空いたる貸家もあれば。其處よ兩個を住せしが。去年とおりて彼が重病。命ばかりと助りしも夫より後と兎に角に。病煩ふこと多くして。是迄通り我家よ通ひ。勤すると出來されども。其日々々の賄ひ料。先餞凍ゐのあき様お。仕送りやりし恩に感じ。今尚身體は充分あらず。緻密い尋ふ手荒い業。何れも遂てと難かしけれど。病氣の加減で察かぬる。夜の篝め火の用心。責ては之を思報じよと。自から當る夜巡り番。實に殊勝ある事と感〳〵不

思ひしと。今となりて之恩にも亦腹立しき極みあり。コリヤお石よ。人の心は分らぬものぢや。彼に限りて左様な根性が。ないとばかりの言分けでは。甚だ暗い明りが立たぬ。連添ふ夫のことあれば。淺平奴か逃行く先と。必らず知て居るあらん。イヤ知らぬと言はさぬぞよ。全体熟々思ふても見よ。實に貫様か言ふ通り。淺平奴か高野參りを。其書狀にて初めて知た譯あれば。今迄にと何とか言ふても來べき筈。然るに其事なきは如何ぞや。ナニ夫ゐと據ろあい障りがありしとか。然言へば愈よ胡亂あり。優しく問へば兎や斯と。陳ずる心の小悪さよ。イザ眞直に白狀せよ。言はぬとならば。夫丈けの方法とあるぞ。如何にや如何よと。日頃の柔和よ打て變り。聲あら〻かに詰問は。お石が當惑心の中は。悲かへる迄悲しくて。熟き涙よ膝をひたし。斯る折にも頑是おく睦びて迄べる子供等を。物は得言で靜かに引寄せ。只しめ泣よ泣居る折柄。勝手の方より揉手して恐る〳〵入り來るものあり。是卽ち別人おらず。今宵盗賊よ傷を負はされし。小厮〆吉が父親おりける紀の國屋淸藏と云ふものにて。頭てお石の傍に坐し。主人に向ふて一禮し。モシ旦那さま下奴も兼々御蔭を受け。同じ村お て裘賣の衣食。先不自由おく渡世を致す。其御高恩あるお家の盗難。且と又。其折悴れが不運の怪我。只今お報せゐて吃驚問章。今日は劇より感冒の氣味ゐて。お客の手傳よる。得參らず

打臥してのみ居りましたれど。棄て置かれぬ一大事。直ちに駈つけ承はれば。賊は正しく淺平主。夫は段々證據もあれど。形の如きの律義人。正直淺平と迄名けられし。彼の人にして此事ありとは。如何考へても思はれず。怎は兎も角も措おきて少し出過ぎた樣には思召さんが此穿鑿は暫らく下奴へお任せ下されませ。幸ひ豚兒の疵とても。畢竟偶かにかすり傷なれば。醫者に掛るまも及ばぬこと。兎角村には事なかれ。公衙沙汰より成るべくは內々濟せる手段もあらば。是に上越すことはなし。殊よお石どの、言はる、所では淺平主は高野詣り。然らば證識は凡その目的あり。其行先を尋ぬるが差當りての急務ならんか。併し何夫迄も少し聞きたい次第も御座れば今夜の處は取あへずお石どのをばこの勘藏にお預けなされて下さりませと言われて見れば。重右衛門も淺平を。信ずることの深ければ。心のうちは猶かならず彼れが業とも思はれず。又勘藏の云ふところも一理なきにあらざればやう〳〵色を和らげて然らば勘藏。如何にも今宵のところは貴樣に任さん。お石は確と預けたぞと。云ひさまッと坐を立ちて。奥の間さしてぞ入りにける

第三回

勘藏は若倉屋の主人よりお石を保管り。負傷の吉をば扶引き。急ぎ同家を立出で、お石には途次ら左に右く撫恤り言ひ慰め。何かの話は翌の事とて其儘彼を自宅へ戻し已れ吉引連れて我家を指て歸りしが夫より小一晌も過ぎたる頃何思ひけん勘藏は張慌し氣に家を出で何處か知らず走行けり」夜は早丑滿も打過ぎて。西に傾ぶく月諸共に。消て行く身と白雪の。冬の夜寒の川風に。泣く嬰兒を敵つけ。三歲ばかりなる兒を背負ひ。咽がる姉兒の手を引て覺束なくも辿り行く一個の婦人が伴行なる男を呼かけて勘藏どの這裡は確かに尻無川。橋堤と思はれますが。方繼貴郎がお出で、。宵の一件で大變あり兎も角來いと。急ぎ煽いたるお辞もろ是迄參ヒた譯なが一体如何した仔細があつて亦何處まで行くことかと問れて男は其處お立止り。成程就裡を言とねば不審は道理。オイお石どの最前汝と分れてから家裡へ歸りて愛時すると若倉屋から。門戸敲いて火急の使ひ。何事ならんと飛んで行き。旦那に會て樣子を聞けば何處から如何して漏泄たやら。今夜の一件快くも官吏の耳に入り。貴樣が歸ると其跡へ西洋番所の盜賊方何野某と云ふお人が巡邏の序とかにて不意お出張り。斯程の騷擾を屆けもせず。內々みさし置くとと以の外なる不埒の仕方。就てと嫌疑ある淺平とやらが女房子は。最と大切ナ吟味の種。差當りて召捕り歸ると嚴しい命令。然るに有難いは旦那のお情。登下お役人へ程好く言ひ取り。正堂へ請延して酒肴を侑め。時刻を遷す其

間よ俺を窃かに喚れたことで扨旦那が言はゐ、よは我が事の情を考ふれば愈よ今夜の盗賊を初め大勢の。子供們迄が霎時でも暗い所へ行く様ナ。事になりてと不憫の至り。夫故乃公が思ふくでは跡の處は地獄の沙汰も何とやら其處と都合のゐるべき事如何か彼をば助ける工夫は無い事かと慈愛に餘る御相談。俺も固り同じ量見。委細承知と云ふ間さへ。萬事心を奥の室よ眼づかれては甲斐ゐしと横筋違に汝の家裡。忙しい中にも早速の思案。幸ひ此頃俺が生國廣島より見知りの船が這地へ來て此川筋に泊つて居て今夜の明方出るとのこと。是よ頼んで俺の兄勘兵衛方へ落さんため今斯う這處へ連て來たのぢや例し餘りの火急で定めて驚ろきもし惑ひもせんが斯く云ふ中も背後が見らるゝ、恰ど尼ふゐ捨小舟迂濶に此を歩行て居ては意外の追手ゐ逢ても知れず夫の廣島船の居る處まで彼船を解に乗て行かんと。聞て駭くお石の心中餘の事で泣にも泣かれず。況て思案回らす隙のなければ最前よりして勘藏が日頃と變つた深切振り合点の行かぬ處もあれど言とる、儘に宜しくと應へもするや せぬ中よ勘藏と早堤を斜めに下り。脚場見定先下より手を擧げ。姉のおみきと負ふてやらん次女のおてると懐てやらんと頼て兩個を船に乗せ繋綱を止し竹棹引抜きイザとばかりゐ指

出し。お石を之に縋らせて草葉の霜よ脚辷らすゐと云ひつゝ下り來る機合を見て勘藏忍ち力を出し。曳やと一引竹棹引けばお石と脆く脚取れ川へザンブと眞逆さま。沈む所を棹取直し尚其上より。思ふ存分突込みたれば憐むべしゐ石と男兒懐しま、此よ溺れて失にけり。跡に勘藏は水のかゝりし裾袂捩ひながらに冷笑ひ。思ふたよりは箱句で濟んだ。全体乃公が貴様の色香に迷ひ。思を懸けしは久しいこと是迄度々當つて見ても何時も素氣ゐき待遇のみ然れども思ひは愈々まさり止むに止まれぬ所より終には巧んだ荒計畫。餘病夫をば旨く騙欺り人ゐき所へ誘き出し結果して了ふたその跡と高野聖りの捏造手段。親のお蔭でにしり書出來るを幸ひ偽書狀さへ程好く遣り。扨改めて口説の算段大昨日の夜と覺悟を極め是非本望を遂んとせしに執拗くも又惡らしくも只淺中の事のみ云ふていッかな承知をせぬ所より。俄かよ變る胸算用。其場は却て貞實に。感じた振りゐ慚愧後悔。世界は何も錢づくなれば。丸い者さへあるときは。婦人は撰取り。靈を探つて物を取る。其靈より肥すが好しと色より慾に思ひ變へ。年は行かぬも流石乃公の見〆吉と。所し合はして苦肉の計略。造化高妙も三百兩。煖々占めた宵の福得。罪をスッカリ淺中奴よ。嫁りならで。死出の旅。コリヤお石よ早く淺中に追ッ着て。冥世の何處かで。世帯せよ。ア、斯して置けは跡腹痛む氣遣ひな

し。イヤ〳〵此に尙二個。此孩兒們とて油斷はならぬと只うろ〳〵と啼て居る子供を捕へて川中へ押沈めんと手を出す折しも思ひ掛なく極壁して我方近く來る船あるにぞ。擂見られては大變と。心慌て、其儘岸に飛上れば。機に船とゆら〳〵と啼く兒を賊せて川下へ流れてこそは行きにけり

第四齣

此ゝ說出す所之前の回にて紀の國屋陽藏が夫の尻無川にて淺平の女房お石を無殘にも溺死させたる時よりは十三年を經て慶應二年の事ゝ渉れば讀む人其心して看玉へかし

頃は彌生の櫻時花見る人の東邊西邊と浮れ歩行ゝ名ある區や勝れし土地は云ふも更おり只尋常の神社佛閣、樹も花もなき處さへ最揩はしき其中にも生國魂の御社と眺望涼速に第一と稱へ花木にも亦乏しからねばいとゞ賑ふ境內を我身の上にと春おしと。かこち顏にも見すぼらしき一個の婆々が其衣服こそ見惡くけれ容顏絕れて艶かお處女を引連れ來かゝりしが其樣を類へんお今咲出し櫻花も之と立並ば、色を失ふべく而も梨花の一瓣風裡に舞ひ梅蕾の半輪雪中ゝ紐ぶ如き姿態と神韻を兼ねたれば往來の人は之を看て俗語花とは實に斯る女をや云ふならん我々は只花を看るのみ那の婆々は却て春を拉へたりと行過ぎ樣の捨品詞

恁る折柄醉壞れたる武家の仲間脚下千鳥に歩來て拾と老婆に撞着り己が提げたる白鳥壜。撲地とばかりに拋落し微塵となりしを見向もやらず矢庭に婆女の前お立塞りコリヤ、イ己等は何奴なるぞ城代方のお仲間此市助さまお無禮の段々。殊ゝは主公の命を受けたる御用先。其大切ない御用の品を。己破ッたナ。濟おいぞ濟おいぞ是から邸へ連歸り屹度分疏さゝなきやおかぬ老耄はすッ込おれ。用のあるのは此娘サア斯う來いと袂を取て引つ立行かんとする手を拂ひ容貌お似合ぬ氣丈な娘惡びれもせず沉著てモシお仲間さまとやら夫と貴鳧が大きお無理「何無理とナ「妾と世さんが避て居るのを貴郎の方から行當り。夫で壜を破りおがら「ヤイ、、皷舌ない畜生女奴。來るのが嫌おら仕方が無い破た壜と其中の御用の品との償ひ代。金一兩と云ふ財を。サア此で出せ。夫とも出來ずば汝を抵當。乃公の屋部をば人質庫。殺さうと活さうとイヤ臥さうと起さうと思ひのまゝ。サア來い來れと無法の擧動見る人々之惱ざしりして惡しと思へど關係ふては疫病神。如何なる煩ひあらんも知れずと恐れて近傍へも得進まで皆遠々地より見物せり。時お此境內ある一軒の茶店お休らひ。前刻よりの分明を遙かゝ看居たる尙年若き武士ありしが扇開いて壁を遮り跟隨に拉たる若黨ゝ何事か打囁き聽て夾紙袋搔探りつゝ何分相手が相手故。藤三郎汝が早く行てやれと幾許かの金取

出して手に交付せば藤三と直ちに其處を走出で、那の仲間が圖に乘て金が出來ずばエ、來せおれと力壓制お引立行んとする背後より望の金を取らせて呉ん女と侮り無法を働く不埒な奴と言はれて吃驚り仲間が。後振向けば那の藤三が二歩金二顆を手に載せて若も是ゐて不の字を言はゝ主人と誰でも用捨とせぬぞ疾く受收めて疾く去けと勢ひ鋭き面相に呑れて忽ち蛭ゐ蟹。今迄張し肱締め奪ふが如く金受取り多くの看人押分け〳〵何地ともなく馳去るを爰時目送る藤三の容貌。婆女は熟ゑ眺むるに年紀は二十の上を二つ三つより過きず色白うして眉秀で身材は低くからず又高からで物の言ひ樣凛として實に是一個の好男子なれば女と意とず面打紅めさし俯つゝも流し目ゐ想ひを含める戀風の吹くとも知らず。藤三郎散り來て襟に貼く花の一瓣掃ひながら婆〻と娘に打向ひ此場は是で濟みたれども這裡ゐ彷徨して居るは甚だ以て宜しうおい歸途の程も氣遣あらん只速かに家裡に歸れと鮮少おに言捨て〻行んとするを婆と娘が袂控へてコレ若しお侍樣急場の難儀をお救ひ下された御恩と山〻今這裡で口にも餬お盤し難し妾們は是より程遠からぬ野堂町にて丹波屋作兵衛の借家住居高島屋ぢうと其女おさと申す者で御座り升貧しう暮らす身の哀しさは只今お立換下されたお金を直に調達の目的は是諧次座りませぬが先兎も角も破屋ながらお供いたして緩つくりお禮も申上げ貰ては溢茶の一つでも差上げたう侍座り升れば情願一緒ゐお出で下されませと婆女交るゞ〻切に請へ共藤三と更に頓着せずナニ夫おは決して及ばぬこと〻袖振切つて行んとするにぞ婆女は止に止難て然ばお住所お名前だけでも仰しやつて下されざせと云ふ折しも傍の拜殿に神樂を奏する笛太鼓。音に紛れて今の金とて我物あらず主人早邊伊五郎さまの吩咐で救ふた譯ぢやと藤三が言ふを熟も聞取れずや女が後より追縋りて情願是非お姓名だけでも仰つしやつて下されませと再び問ふを面倒なりと思ふてや早邊伊五郎とのみ云ひ捨て〻早湊籏ふ人群の中。姿と見ゑずありたれば婆はさらあり女と殊に本意なげに暫らく其處に佇立しが何時迄斯てあるべきならねば機かに那の人の名前を聞しを心淋せゐ婆女と悄〻野堂町投して歸り行く

第五回

這裡は野堂町の裏長屋其中程の家の裡骨蹠らある障子の那邊に打臥せる老婆あり近頃甚く物に驚きしことありて只さへ詫しき貧の疾ゐ取添て持病の癪の發立ち煎じ詰めたる藥鍋一貼二分の買藥も昨日今日と己ゐ其代も竭き果て、機かに調せし水粥も母は女に讓らんとてかコレお秋咱と胸が痞へて今一碗と食られず汝は晝夜の介抱立働き。左ぞ疲れもし空腹

うもあらう程に遠慮なく細て了やと。口よと然り氣なく云ふものゝ。心の中でと頃日は咱が病に手を拏され食き利益の貧裁縫さへ思ふ樣に出來ぬ仕誼。翌日焚く糧の何であらう。老たる我身は如何あもあれ今を盛りの那兒が上花の貌はもちながら深山櫻の世に知らるゝことは嘆きのみ打續くかる薄命。斯ては終に那兒が名の。自性を引て。一度の春にも逢で。悲しき秋よ身を果す。前兆よてはあらざるかと病苦と貧苦に迫られては愚痴なる涙も溢すあるべし斯る處へ表の方俄かに人聲喧しく米商を前頭よ薪商菜買鹽物賣の爺なぞ打連立て動搖々々と斜にありて闘澁滯む鎧戸押あけて入來り皆口々に除賣の催促。女と夫と見るより上り小口あ飛で出で兩手をつかへて徐やかに「毎度の事でお氣の毒今は何ともお分既の辭も御座りませぬが何を云ふも那の通り母の病氣で難義の上に難義を重ね如何よも致し方が米商「無いかあるかは其方の事此ッ方は最早拗辨も用捨も已に做盡した揚句の果が母の病氣。可愛さうなと言ひたけれど左樣して居てと我々が頸を吊さにやあらぬ譯「賣物で言でとなけれど此世智辛い世の鹽を蹈飽く迄に年老た白髮頭で重荷を拾ひ脂絞ッた貶の錢。難義〻〻を楯あして何時も旨〻做てやられてと溜ッた事では無いわいと南部の昆布の鍋破れ盤嗅き立るをお秋と押止め「モシ〳〵各位も少しお靜かに仰ッしやつて下さりませ母の病氣よ障り升と云ふをも聞かず薪商が辭も殊更鋭芒々々しく「此三月節季よも已に斯とは思ひしが此十四五日を待玉とらば必らずお還算申し升と段〻の頼なればあらぬ勘辨做て置たあ其約束日も疾く過て今日となりても埒明ねば斯う言合として出て來たのぢや然るからあと今日と決して素手では去ぬ「青物商「破土鍋よ塊れ膳那の百貫の質とする編笠さへも鍋に無い粥身代は取甲斐なきも是迄延々引延た其腹癒に家財の有限り尙夫のみか母女が身に着く着類蒲團まで持て歸る。夫とも此で相應あ眼鼻をつけるか如何ぢや〳〵と貴求れて女と愈〻當惑の片手で膽を按へおがら片手をついて頭を下げ「成程お怒りも尙無理はあい。仰ッしやる通り長しい借用。然りながら今と云ふてと。相濟ませぬが出來難ます故情願此上の御勘辨にて爺々さまが歸り升までお待あされて下さりませ若も今各位方よ着類迄お渡し申してと妾と兎も角母さまの命にも係り升と涙ながらに哀み請へども諸人少しも聽容ず中にも米商が進出て其爺々さまといふも行先知れた旅ならば猶可なれど。生國紀州で食詰た揚句に犯せし罪の有ッたあ夫が前頃より歸はれ懸りしとか。何でも一癖有ッて身を隱した其爺々さんの歸るを待てと。呆れて物が云れぬわい斯う惰落々々として居てと收局がつかぬサア片端より洗浚ひ。各位も共にと立かるハを裝に人あり聲高くヤア〳〵待ッた暫ら

く〳〵と喚止めながらに走せ入るを皆〻誰かと見返れば家主作兵衛滿面に笑を含んで上坐よ通り沈着拂ふて其處に坐を占めコレ〳〵皆の衆お前方の賠錢と云ふは一体何程宛の額で御座るか。ナニ米商さんが三兩一分と五百文薪商さんが一兩二分三朱次にと一〆文が塩魚干魚續いて一分一朱と八百廿四文の青物代オー好〻と懷より財布と奕紙袋取出して端數の錢まで取揃へ清楚よ夫〻還算て遣れば米商を初め討債們は夢かとばかりよ呆果て中には這奴爺兒迂散なり女を釣込む餌ではあいかと邪推を廻すもありたれど何れも前の擬勢に引換て畑の蛤意外の仕合最有り難し〳〵と破甍莚よ頭堀埋め又〻御用を承まはらんと帳面消て出で行きけり

第六回

家主作兵衛と坐り直して闘越しよ病る母親に打向ひ又女をも喚近け待てば甘露が降るとやらコレ母女とも悦ばしやれ今俺が斯う出拂て來て多くの討債們ゐ夫〻金を還算て遣つたは如何にも不審よ思はれうナニ夢見た樣な心持とか左樣とも〳〵併し此んなことばかり云ふて居ては譯が解るまいから徐〻本論よ掛るとせうか。實と俺も前刻から例の家賃の俺滯を飯水に來うとと思ひながらツイ家業が忙がしうてまで〳〵して居る其折柄門前に音あり武士三人。其中一人が言とる〻には我〻只今所用ゐりて這邊を通行致せしに或裏長屋の路次口にて三四人の商人們が落合ふて各々聲高ゐ語るを聞けば何でも賠償を討責りよ行くと見えしが其中圖らず高島屋と云ふことの耳に入り此屋號よと心に覺ゑし處もあれば若や夫かと邪商人們の後に跟き密かに其往く先を覗へば案の如く心當りのある家にて如何にも哀れな生活かた不憫でならねば直に其場で持合せたる金を惠投み救ふて遣らんとは思ひしが然しては妙あらぬ所もあれば家主の貴樣を尋ねて來た面倒ながら好い樣にとて交付されたるは三十兩。差當ては是は亦大層過たと訝りしが俺も氣早の作兵衛と人に知られたものあれば原來左樣かと貪意して委細承知と負担んだがとお秋の顔をチョイと見てナアおぢうどゆ實に女は性があうても玉の興。比喩よもある通りぢやと云ひつゝ殘れる金と錢數へ了て其處に並べ方纏還算ふた米商其外俺の方の房錢の額は一兩と二百文是も引去り其貼錢を小錢ふくづして持て來た次第夫是合して六兩二歩二朱と百二十四文其過剩が此よ二十三兩一歩一朱と貳百七十六文サア檢点て受取られよと陳る辭をお重と聞て同々不審の面色よてお話の端ゐて察しますれば其お侍が至らぬ娘を御執心な處よ這樣よ惠んで下されたよもせよ未だ妾們母女と一度もお目に懸つた事となし孫よ那兒は嘗て望の仔細ありて此年になるま

でも伺其人を定ませぬ仕誼なればと言ふを打消し作兵衛が否と其處にと脱漏は無い前刻俺が辭を迂回し下問ひ見れば那の武士が大數の金を出して汝們の難義を救とれたも全く今日お起つた事でとなく何でも是迄汝們が料らず途中で既護にあつたといふ樣な伏線が如何もありさうあと云ふお秋は我を忘れて「シテ其お侍の名とお聞あされましたか「聞たとも〳〵播州某の藩士で大坂の倉邸ゑ居らるゝ早邊何とか「伴五郎樣で御座りませぬか「オツト左樣ぢや確に左樣ぢや「誠に左樣なら是程嬉しいことは無いイエモシ母さま此間の御恩もあるに又今日は今日とて此お惠みといそ〳〵するを母は莞爾り打見遣り然言ふ譯でと何れの道這方より出向て行き厚くお禮を申さねばならず全体今日のお金は有難けれど無雜と受けても置かれぬ筋。とこいへ已に手の附たれば夫と且く後ゑ廻し姜の氣分も今と大分癒快ければ是から直に其お邸へ汝が一寸御禮迄にと云ふを作兵衛は聞も了らずイヤ夫ならばお邸迄には及ばぬ〳〵其伴五郎樣は俺が家祖を出られてから滑水の浮瀬樓へ往て御座る筈お秋どの獨りでも間が惡るさうな俺が一緒に連て行うと身打繕さへもそこ〳〵に愛に沈む淵あれば浮ひ瀬もある世の景狀有爲轉變の定めあく其行先と終あまた如何なる境にあふ阪や水に因める那の酒樓へ脚急がしく出て行く」床を後ろに樣を左に近くは木津川ゑ出入る

鄰遠くは武庫の海面淡路島山の面白き春景色を眺め奚娘に酌を取らせ傲然として上座を占めたるとは是なん今日高島屋おぢう母ゑに金を惠みし早邊伴五郎にて其右手に血び座したると同臭同藩の明友高品軍次青井佐久馬と喚るゝ武士酒宴も漸やく闌と話の聲も高調子軍次は程めに席を進め伴五郎に打向ひて時に早邊氏今の話は如何であらうチト時間が入過るでは御座らぬか併し餘斜魂魄を砕かれた此一條あれは必らず成就疑あからんかと云ふを聞て伴五郎と手に持つ盃グツト乾し打笑ながら。例の高品氏が性急さゑ兎角此道と氣根が肝腎我々們が遊興の相談なんとする如く手もなく話が纏るものではない拙者と眼の着け方が少し違ふて斯う話の長引くが却て旨味のある所思ふても見玉へ那の女が若も尋常の妾奉公するものゝ樣ならば金さへ見すれば言下に承諾と言ふ所を夫をせぬのが情味の厚い賞玩處古い文句を言ふ樣あれども色好き返事と今の間ならんと誇る鮮に取附て青井佐久馬が小膝を拍ての追從口流石はお留守居兵庫殿の御子息。艶道通鑑の大博士此道の敎主と崇め奉りて然るべし爭で那の娘の隨喜渇仰せざることやあると話し半へ家主作兵衛がお秋を勝ひ恐ゑとサモ當惑の面色ゐて遙か下坐ゐ手をつかへ辭も出さず低頭のみすれば軍次は伴五郎の言をも待ずコリヤ〳〵話しと如何結局たイヤ如何纏ッたかコレサ默ッて居てと解ら

ぬわいハ・ア然らば女が倘承知をしをらぬか是は又解らぬ奴ぢや我〻は當初の事と更に知らぬが先程貴様が彼を引連れ這浮瀬樓へ來てから後其姿貌をば熟〻に見るあつけ伴五殿あと兼て外妾を探索て居らるゝ容子是幸ひと此ある青井氏と共々に貴様ゑ萬事を含まして其媒介を頼んだ譯登下貴様と何と申したへイ〻夫は容易あこと〻左も呑込を申たでとないかも共に何ぞや今となりて埒の明ぬは白痴た次第已れ我々が顔を壞す所存ヨナ夫とも別に存細はしあることかと席扣て急怒立てば作兵衛は愈々畏縮れて首を下げ臀のみ高く擡けつゝ逡巡して閉口す是に引かへ娘のお秋今迄下し頭をあげ莞爾笑て從容やかに軍次が顔を打眺め「這ゑ高品様とやらキツイ御立腹御道理あとは申したいが仲人よりも此本人這で立ぬにお謝絶を申し升と未だ言ひ切らぬに佐久馬は傍坐より口を出し「コリヤ〻イ生玉以來今日と云ひ一方ならぬ恩人の伴五殿の事あるゑ「イエサ其恩人々々と金の威光を振立らるゝが妾ゑ第一氣に食ぬ最前からの容子でゑ此話しゑ今日お兩個の吹擧から起つた樣ゑ仰しやれと如何やら是れには初めより其意思が有つたらしい然して見れば御恩ゑ御恩に逆ひ無うて也結局を言へばお借り申した其金に利息を添へて返却しますれば夫で元々只お前ゑ是より三日の御猶豫をと云ひ捨て其場を突と立ち次の室さして出でゝけり

第七回

人間四の寶に數まへて男女一生の大禮たる洞房華燭の夜の設け其新郎新婦が時の到るを松屋町俄か長者と評判の呉服商重兵衛の正堂花の三月ゑ忌月と俗の端說に拘泥ひ今日卯月の朔日を女おとくと店の菊太郎が婚禮の佳辰と定め銀の銚子の雌蝶雄蝶は金屏風の牡丹花に戯るゝ如く島臺の鶴龜は此に幾千萬年の契を籠め萬事萬端媒介人の佐次平夫婦が指圖ゑ任せ三々九度の献酬も四海浪風穩かゑ儀式を了し今や新郎婦が衣裳脱着かへ摺金帳裏へと入らんとする。折しも怪しや主翁重兵衛大聲擧げて怒りつゝ泣つ何事か頻りゑ便室に這入りて騒動するにぞ如何なる珍事の起りしかと正堂の客も庖厨の者も亦菊太郎の聖親も媒介人酌人新郎新婦さへあ。皆打驚きて馳集ひ容子を見れば這ゑ如何ゑ主翁は袴踏したき脚摺しつゝ其前に錠前壞れし一つの抽斗抛出て是這手筥笥ゑ秘め置たる三百兩夫を今斯う盜みをつた思へば悔しや殘念や已大盜賊。記臆て居よ今ゑ穴繰り笠の寓飛して呉ん情なや日頃食ふもの着るものも思ふ儘にゑ食ゑず着ず脂を絞り血を吐く迄に心を勞し骨を折り夜も碌々寐も得せで爪先の火で仙臺錢稜を丸めて此迄に仕上げあんせた這身代。夫を温々掠取するとゑ微天大罪的如何して呉れうと無明の業火身を悶へ物狂しき迄に言罵る。光景最も遊ど

ければ皆々其處ゑ呆坐るのみ誰とて辞を出さでありしが主翁は漸々之に氣が付き血走る眼を丸うしつ番頭喜八に向ふて出抜けゑコリヤ、イ番頭今夜の賊と家裡の者們ゑ極まつた前刻も前刻とて此便室に這入た時には何一つ變つた事もなかしりに今來て見れば此仕合せ只儀盃の其間一寸眼光を闕たるまでぢや殊ゑ是が夜深けと云ふではなし何れ常々勝手を知つてる奴に相違ない斯う言ふ中も孩兒們が取隠しの隙を得んチッとも疾く家裡中の管店小奚と言ふに及ばす飯焚女水汲男ゑ至るまで頭を揃へて此へ呼べイヤ〳〵貴様が退席すが己ゑ氣遣ひ乃公が這裡から喚んでやると闕の傍より店の方庖厨の方とへ頭を出し一々其名を喚立て、。來るを遲しと引入れ〳〵片端よりして平押しに根を堀り葉をも飜へし莖のあるだけ延しつ手探つ跡なき跡を詰問ふて痛まぬ腹を探らる、迷惑顔の管店が怪しと。一際利害く穿鑿され餘りに事の長詮議で意はず居眠る小奚こそ甚だ胡亂ゑ奴ゑれと寐耳に水の一的吟味智慧の有りだけ絞り出し聲を渇して審べて見ても是と云ふべき手掛りなければ終には重兵衛涙ぐみ己們か盗たに違ひない三百兩を出して呉れ若し左もなくば生て居られぬア、斯うなっては甲乙なしに盗賊ぢや番所へ願ふて辛い目見せんと云ふを聞難ぬ女のゑとくが矢は亦餘りの御無理一徹ゑも程かある頃日ゑ世の中物騒で盗人の多い時節決して家裡の者の爲た事とも極られぬすまい今も家尊か御詮議最中若や外からまた跡形でもあらうかと偶と心付き這裡の障子の明た處より奥庭の方透し見ればアレ御覽ヒ那の通り家裏の切戸が開け放し。這邊をも能う御拵辨と言はれて重兵衛遽たゞしく有り合ふ手燭点しつけ切戸の處ゑ走り行き其處の様子を篤と見て冷笑ひつ、立戻り淺ゑかにも巧んだな。アレか何んで外から來をつた盗人ならん畢竟家裡の奴の做た細工如何でも斯うでも盗人は我家の裡ゑ極つたと云ひつ、前から行燈の蔭に坐りて默然たる菊太郎か父新助に打向ひモシ〳〵毛馬屋の新助様今夜は己に儀式も濟ましたれど女とゑ身の御子息との此婚禮ゑ暫らく破談にして下されと思はぬ辞に新助は事變の挨拶言ひも敢ず怎は亦如何なる仔細かあつてと急込み問ふゑ重兵衛は然ればの事御覽の通りの此騒動全體今度の縁談は菊太どのか兼てより我等の店へ見習ひ半分手傳旁々來て居られてより起つた話し夫も此重兵衛ゑ餘り好まぬことなから段々ゑ身よりの申入れ今宵の入賓萬端も渾て婿方で辨へらる、相談までに及びたれば扨愈々ゑ婚禮の盃までは爲せたれど何分此ゑ三百兩盗取れた其金の出て來る迄は胸三寸が掻亂れ生てる心地ゑ無い其上ゑ若も此金が出て來ぬ様な不幸がある時若夫夫が可笑しく兒でも拵へる心得違が有ッたゑら沒財ばかりで失墜倒れ此重兵衛が何處で立つ失故婚禮ゑ是が

非でも暫らく破談と言張りて新助か押返しての相談も頁よ耳朶よは留ずして斯なる上は卒行所へ此事屆けて吟味を願ふ其外に仕方はないと己が言ひたいことをのみ喚き立てつゝ其手配ゐ罵ふたり

第八回

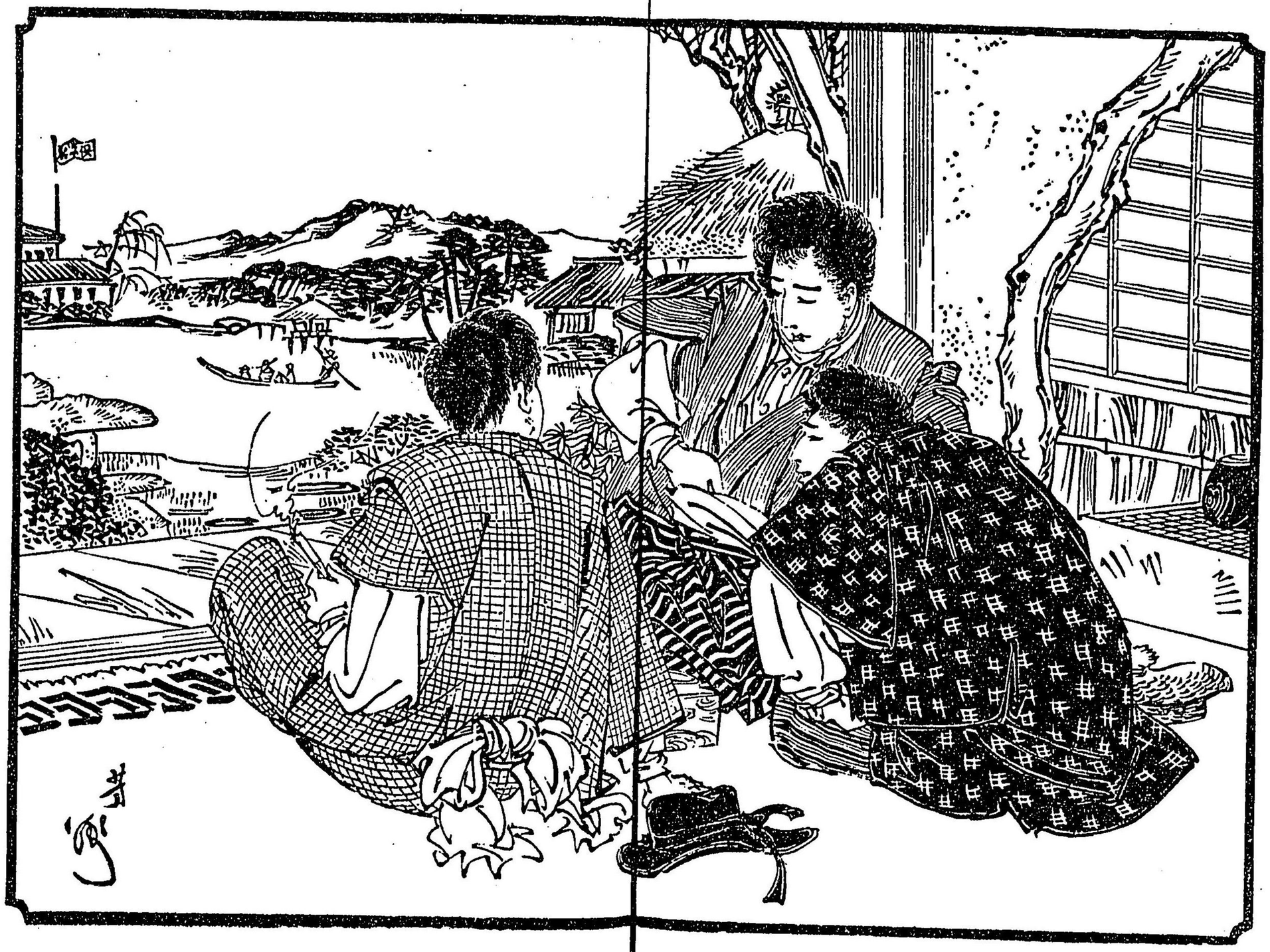
昨日お春に今日お夏卯月の天の日の長町。昆沙門前に住居して親のためやら夫の爲めうさ川竹に身を窶ぐ其口入を業とする森田屋の平六が切迫つまりし金のため身賣の相談何や彼や苦勞ある身と日短かに心を熬ち眉を鎖せ打萎れ居る一個の處女に向ひ坐しコレお秋どの汝が話しは強ち無理とも思はねど此に倚頼を諾矣可矣とチト言ひ難き一箇の緣故と外に二箇の問ふべき緒あり扨其緣故とは外でもない汝が母親さんに知らさずお勸かゞ做たいと云ニ條是は如何も口入の掟が有ッて出來惡い縱又夫は出來るとも全体俺は母親さんと兼て親しうする中なれば何分沙汰なしでは濟ぬ譚又問たいと大昨日の事あるが衣食用で出た便次汝の家理へ立寄ば恰度汝が家主の作兵衛どのと拉立ッて浮瀨へ往た直跡よて其時おぢうさんから聞たには早邊伴五郎とか云ふお人に生玉でと言ひ其日と言ひ段々厚い惠を受けられた由なるよ今斯う急に身賣をせんとは一休道理が解らぬ樣ぢやと言ふゐお秋と打点頭き「然ればの事で御座り升今更思へば合点の行かぬ次第よて最お恥かしい事あがら那の生玉の社ゐて不意の難儀を救ふて下されしと標致あり仁慈なり殊には淡泊としてなまめかぬ誠に凛々しき男振り。日頃よりして所天を定めば斯ういふ人と我と吾皆ひし心意にあひ見ての後と漫ろに忘れ難く床しく懇しと怪しき迄に慕はしく思ひ亂るゝ其お人は立別れたる折からに奏る神樂の音よ紛れお住居あどは聞取れざりしも確かよ早邊伴五郎樣シテ又大昨日多くの金を惠れしも又同じ早邊の伴五郎樣と仰ッしゃる方然るに夫より浮瀨樓へ往てお目に掛れば雪と墨腹黑らしく嫌らしく一目見るさへ厭とし思ひも寄らぬ人違ひ伺夫のみか其所爲あり言草なり全くお金の力を藉て鄙女を無理よ妾とゐさん手段なれば抑も此間違は如何して出來たか其邊と何共分り難けれど到底納得の出來ぬ事もゐ其場で斷然謝絶ましたが夫よ就ては現在其日の三十兩と家主さんが那の人より受取れたに相違なければ之を返さんその爲めに終に老伯に身賣のお周全を斯うお願み申すので御座り升平六「成程夫は夫にて曾得が行たが是もおぢさんより聞た事ぢやが今汝の言ひゐさる其三十兩も手の附たと僅かに六兩賜りのことあれば外に何とか工面もあらうに身賣するとと大驚ゐ縱ひ身賣をせねば出來ぬとも望の金が五拾兩とはチト多額いやうな秋「其御不審は徇道理ゐがら其處には嶽よ入組

んだ哀しい話が御座り升是は大昨日老伯がお歸りなされた後鄙女は浮瀬樓へ往て母親獨り留守して居ました申牌過隣町なる金の口入者山田屋と云ふ酷たらしい人が參りまして其對門の米商より話を聞けば今の前高島屋で斯々した次第あて程好く賒金が取れたとの事就ては俺から貸した金是迄脚を度々運んで百度詣をする樣に催促しても督促しても一向埒をあけざれば今も今迎其金方の呉服屋重兵衛殿が今日翌よ家裡よ愛たい事があるとかで忙しい中ながら態々出掛て來ての大立腹如何したものと心配最中右の話しを是幸ひと實と重兵衛殿も連れて來たと是より病る母親を情用捨もあらけなく手足を捻ぢらんばかりあして責つ督促つ無理道りに元と僅かの額乍ら利よ利を加へて十五兩幾許と云ふものを夫の家主さんより交付された三十兩の殘りの金から取ッて歸られ非道無殘と言ひなから全体借つた覺なのある金又一つよと之あ渡した其金は尚中浮けの樣なから鄙女の思ふお人にてお情深い伴五郎樣より出たものあれば母親の心では之と亦如何ともあらんと一方の急に臨んで據ろなく腹の虫をば殺しつゝッイ手放された事と思ひ升何分斯樣あ始末故迎も女の力では外に工面の仕方なく如何でも身賣をせねばならぬ仕誼然れども常から慈愛深く物堅い母親なれば初めよりして明白に此事を知らせてと迎も承知はして下さるまじ是が母親へ知らせずよお願全を願ふ仔細にて又金額を三十兩の其上に多く欲いと申し升と愈よ身賣を做た跡で母親の病氣養生又一つあは其日の生活の準備にもせん鄙女の寸志。實際斯ういふ切ない義理合情願老伯のお骨折にて宜しうお周全を願ひますと細々聞て平六は幾々感じ入りつゝも夫と誠に氣の毒あ事ながら俺よと又前よも言ふ通り口入仲間の掟もあり汝の母親に義理もあれと假令外ながらでも一應と何とか耳に入れねと濟ぬ譯合。コリヤ是如何したら宜ちうとさし俯向て手を組めはお秋も共よ頂垂てつかぬ思案に暮の鐘聞て吃驚り早日が沒るかサゾ母親が氣遣ひ玉はん一度此とお暇ゆし思案定めて後程再び參じますから老伯も亦熟うお考へ下されませと多忙出でゝ一町許り歩む脚下何かは知らず確と爪づく物あれは意とず巡査りて取上げ視れと持手重氣あ金財布是ととかり驚きて暫く其處よ茫然と佇立てぞ居たりける

第九回

殿しく建構へたる長屋門武者窓は黑くして海鼠塗の壁は白く朝霧よ百萬石の夫ならで烟の籠れる河岸の柳裾安ふ下よも百石千石の遺穂ある大名業出船千艘入る船も。千百萬の米俵。たゝ一日に集り散る。實に大阪と日本の庖廚との諺を。此に表はす中の島多く並列し倉邸の其中に播州某家の一邸裡留守居と三百石の俸祿を食る早逸兵庫と喚るゝ人世才に長じて忠

直なれば前年よりして當職を拔擢でられ家族を拉て任に就き公用萬事滯りなく勤むる父お似ぬ兒子長男伴五郎と衙部屋住の閑暇多ければ父親の敎訓と馬耳東風兎角放蕩お染り込み夫の色といふ曲者に其身を役され心を苦むることありてや今日しも朝より豊過るまで一室に籠り何か思案を凝し居る。折柄次の間より若衆三が奥おし開け手をつかへ只今急ぎ御使の御用あるよし何れへ參るやと云ふに伴五郎と今迄垂れし首をあげオヽ藤三か私に喚し之餘の儀とあらずと四邊を見廻し聲を低め兼て貴樣も知る通り那の生玉の社にて此程急場の難を救助けた高島屋おぢう親子の上あるが其後前大昨日の事よてありし高品青井の兩氏と漫歩の途次云々の事態より圖らず彼が野堂町の住家を見當り其上生活の難澁あるを看るお見兼て又もや持合せの三十両斯う〳〵して恵み遣としたを高品青井の兩氏には元予仁慈心より做たる譯とは推量らで其娘おるお秋とかに情思ありての業と思とれ最と輕忽にも初め家主に金子を取次せたるときよりして要なき口を傍くり利き物あり氣にはのゆかしつひにと浮瀬樓まで一盃酌めるそのところへ娘が謝禮に來たをばさひはひ予の妾に周旋沙汰それらのためお那の娘は恩を仇ぞと怒りを發し惡口雜言たゝみを蹴立て熏みし金を返へさんと言葉ておがら立歸へれりもとより予が本心と其の金を取戻さんとにはあらねども兩氏



の手前と云ひ娘が辞よ容赦のならぬところもあれば貴様是れより彼們の家主丹波屋作兵衛方よおもむひて隨分ともに嚴しく掛合ひ是非金子受取つて來るべしと實話麁言取り交せて吩附るをば聞果て、藤三は這裡よふかき詭策のあるぞとも毫知らねども固有のしら正面よあたまを搔き是れはさて〳〵困ッたお徒君の御先登には堀の埋草とあるもさら〳〵厭ともぬ心ながら敵手は取るにも足らぬ女們其うへ彼れより返さうと申したことゝて食ふや食とずの生活の中へ一旦金子を惠まれたらば燒石よ水屠村の猪何時まで夫れがわりませう夫れを疑非とも取ッて來よとの此命令は容易にお受が出來難きす力づくでも參らぬ業情願除人よお吩附けをと言ふを伴五郎は頭を振りコリヤ〳〵其貴様が撲性に何んぞと云へば力業といふ樣あとろが予に極めて入用イヤサ力業でも行難る容易い樣で難かしいきとめて大儀なことあがら貴樣でなければあらぬゆゑ是非とも走一走頼むぞと主のことばよ此上はと藤三は澁〻傾承ひて其場を退ちと退ちあがらも尙心のうちでは迷惑至極行かねば直ちゐ主命背く譯よして又行けばとて取れる金とも思はれず去迚取らずよ歸らば主人の咎めと必定あり這も實に困ッた事に遭遇せたと心を惱まし後髮ひからるゝあらで行かねつゝ穿く麻草履は輕けれど最脚重げに出でゝ行く跡に伴五郎は舌を出し是は又心の中に思ふやう兼て手利害

く予を弾劾しお秋の心と其の挙動とよ解し難るところの多ければ窃かに人手を廻して陶探るよ何ぞ料らん生玉にて一たび面を見た以來那の撲實あ藤三奴に深くも思ひを懸け居るとはチト受取難い次第あがら實に亦然ういふことの無いとも限られねば今日拘して彼奴をば遣ッて其實情を覆審す道具ともあし尚一ッには斯いふこと、ゑ知らずして木で鼻括ッて手荒くも彼奴めが岩永役を立廻らば萬に一つは此方に廉く好機會を此よ得る由あらんも知れず這は我ながら出かしたりと獨りほく〳〵打笑て傍よ滄し一盃の温茶をグッと飲にけり

第十回

一室の中に藤三郎其處に出されたる茶と滓も殘さず疾く飲盡し吸殼で唾壺摸むばかりに烟草藁らし烟管を弄し膝を直し又手を組み髭を撫で隣の室には何やら氣はひは做あがらに誰も出て來ぬ待遠さ幾ゑ困じ果てたれば遽獅をきらし手を拍て人を喚んとする折柄漸やく襖の外に咳壁聞ゑて主人作兵衛一揖なして入來り先刻貴君の命に因りお秋の家裡に走り行きお使命の次第逐一母女へ傳へしあ其廻を畏まり早速お秋が小生に跟て參り今日のお使藤三郎樣とは如何なるお人かと。實は不敬あがら那裡なる襖の間より窃に貴君を窺ひ參らせて是ととばかりに甚く驚き又喜びもしっ扨小生を小蔭あ呼び申し升には那方が正しく生玉あて坐ろに思を懸け初めた伊五郎君。浮瀾樓よての伊五郎君ゑ假令正眞正銘の伊五郎君でも鄙女のためよは人違ひ此に初て宿疑の解けて思へば陋巷生育の身の哀しさ武家の格式ゑ少も知らず大小させばお武士とのみ思ひ取り家隷を主よ間違へし粗忽は今更云ふも甲斐なきことあがら是も一つゑ登時に奏る神樂の聲よ紛れ那のお人の辭が熟くも解らなんだに起ッた事。左樣して見れば一旦縱絲の緒を繫ぎながらも又其處で此錯差を出來し玉ふ。神の御心測り難く最恨めしいとの詞話と一息吐で又其後を語り出さんとするを押止め藤三郎はコレ〳〵作兵衛殿拙者が今日是へ參ッた用向は只小衙内よりおぢう母女あ惠まれた金取戻しのためで御座る然ういふ喧ついた話ゑ聞も要るし疾く金子を出されよと。にべあら辭を作兵衛は尚も接續せ其金の事は最早覺悟が出來ゑした故御心配に及びませぬが今申し掛たお秋が上斯う貴君の小衙内がお腹立ち一たびお手より惠れた金子さへ返却せと仰ッしやる仕誼となッたのも非竟は皆是お秋が貴君を思ふての成行で御座ります殊にはお惠み受けた金子よ付てゑ云ゑの次第にて殘り少なあ使用減し夫をお返し申さうにも形の如きの貧しい生活終よお秋が身實する切ない工面あも追びましたが此あ僥倖とも天の與とも申すべきは不意に拾ふた金財布全体遺した人の哀を拾ふたものゝ喜びと云ふは道理よ當らぬ譯なれど理

而に納れたる賭塞三つ取るもの、有るからは切迫詰りし窮難よ見透たとても左迄罪ともおもはじと心を定め取敵てお返しヤす金の額。調ひましたが斯ばかり一時辛勞仕たと云ふも誰かためならう是も又君に認す心底ならずや且て彼が母に於ても孫て女の心を察し不鈎合は言ふに及ばぬことあがら假令側室の端にてもお仕へ申させたいと言ひ居ますれば只周旋嗜の癖でとなく眞實底から此縁故をお耳に入れる仕合ゆゑ這程を宜しくお汲取り情願女あり毋なりの望をばお聽容れ下されさせと云ふよ藤三郎は呆れ顔時辭もあかりしが忽ち形を正うしてコリヤ主人よ作兵衛殿夫と亦如何なる事ぞ拙者が使命は措閣て其方們の勝手お次第のみ喃〳〵諭〳〵言立てる其上お事正經しからぬ色戀沙汰拙者は拙者が主用濟さば夫で能い返す金かあるならば早く出せ白痴た奴ぢやと言放し更よ頓着なさゞれば流石の作兵衛も如何あさんと持餘したる時しもあれ次の間俄かに騒がしくコレお秋どの早まるまい危險い〳〵との聲に驚き作兵衛と襖おし開け飛んで出で我女房の押へ居る其手に代り。お秋が自害と覺悟の體。振り持ッたる剪紙刀扯奪ふたる騒の中庖厨の方より下婢が來て方繼お使に行た途中で托寄りましたと一通の書狀を其處に差置くを作兵衛早く表面見てナニ丹波屋作兵衛さま書置の事ぢうかと呼はす高く讀む聲にお秋は吃驚りヤ、とばかりに仰天せり。

作兵衛は封押切つておぢうの遺書打展き藤三郎樣も掛り合せ度免れ玉えとお急ぎあらんが暫く此始末をと云ひつゝ、舊の室に坐行り入り咳一咳して聽下すを近く居寄てお秋と殊お耳辭だて聞くよ哀き假名書の其文段は

「不意き事の難儀に迫られて落る涙を硯に受け筆を染して其行立と此身の懺悔取々に書置き申しよう。

「モシ〳〵母親の身の上が最も氣遣ひ前書措て後の處を」オット承知ぢや聽でナニ〳〵斯らいふ文の意ぢや

「娘秋こと兼て足下へも薄々我兒おからよ義理ある中とお話し申しました通り實は妾の生の兒にてはなく元妾們夫婦は紀州根來在の生産にて今より丈十三年の其昔良人何某と土地で親く語合ふ友達の甘言に乘せられ其情由を熟も糺さで迂濶と管係れる身の過失或大家より多くの金子を杜撰取つた同類の壹人なりと疑受け言解く術のあらぬまゝ密かに鄉里を在逃し此大江戸迄來る船路尻無川へ差掛りしは忘れもせぬ霜月十六日の曉天前漂ひ流る、壹艘の小船の中に小兒の啼聲船人們が怪で引寄せたるを月明りに歸視れば五歳ば

かりと三歳程の女の兒尋常の迷ひ兒とも思えず又棄兒かとも見分難しが倘年長ねど刈の兒と賢し氣にて解らぬながらに爺々と家裡ゑ居す母親は今此へと水を指所では凡そ容子も推測られ最も哀れに聞ゆれば同船の人々打寄て這方の船へ救援乘しゑ其中ゑ郷貫は尾張の名古屋にて母と女房の菩提のためとかに四國遍路の中野尾利吉と云ふ人が我寧と斯る身の上なれど思ふ仔細もあれば這中の妹の方を拾舉げんとの望みより妾們夫婦も其不憫さと且と又兼て兒子生育あらで老る年浪の心細ければ身の進退も定まらぬその中ながら姉の方を拾取り夫より其兒の名をもつけ當地へ漸ッと住著て生育て擧げたは今の娘秋の事定めて嚊にと覺ても居りませうが今迄改めて語り聞かしも致しませねば此ゑ大概書つけぬ扨又貞人が常々申すには俺は何分日陰の身ゆて何時世の中廣く生活るゝやも知れざれば足下も御存じの通り公邊と妾の名前にて戸籍萬端好く調へ置き其上發娘が年頃におるを待ち好婚取るか嫁にやるか夫と何れとなる迚も我々夫婦が少しは老樂に此世を過す助けともせん積りとのことなれば物足らぬ中からも引伸す樣に育て、居しに大昨年の夏足下のお家に移住み六月七月暮す間もなく偶とした事から紀州ゑて那の社驅め吟味が今ゆ曬らず貞人の踪跡穿鑿も猶緩弛でありと云ふ風說を聞きこみ其上如何やら遣地へも内々手の廻りし樣子もあれば貞人と零時影を隱さんとて藝州廣島在ゆは聊か廻邊のあるを幸ひ夫へ手寄て行かれたゑ、今日迄一度も音耗なく日夜氣懸でならぬ處より發作りたる疾勝ち夫ゆ就てと娘の苦勞孝行に做て呉ますほど薄命が傷ましく生中妾們に拾とれた故此難儀最惜い者よと思ふにつけ病の間にと生玉の神社ゑ歩を運びつゝ本社支社は云ふゑ及ばず藥師堂やら大師堂遍く詣て一來にと貞人が身體恙なく早く寃罪が雪るゝ樣二來にと娘が緣談發跡の願ひ其傍ゑと妾の疾平癒を祈る其心にと邪なけれど運旺からぬ身の上ゑは却て是より禍を惹出し昨日今日の娘が辛苦昨夕の歸りの遲延さと云ひ何時ゑ無い出歩行夫と妾にと明さねど外に思案の何であらう今朝も今朝とて那の早邊と云ふお武士ゆ返す金子調達し故安心せよと云ふたは必らず身質の心算其相談の出來しなら ん然れども早邊氏より惠れし金とても畢竟と家裡の生活の負債のため使ひ消したものゆ るゑ娘が斯迄心を碎く氣の毒さ去迎之を止めんにと外に苦向き金の出る心當りとあらず して思へば親甲斐もなき我々夫婦就てと年齒も稍長て殊に氣丈な娘もゆ寧そ今より獨身 となるならば妾の生活を助くるとか其外色ゝ脚手纏となることなく發跡の道も立つべき ゆ然れども那娘をば棄置く心はさらゝなく妾は是より道者ゑ身を俏し道すがら有難い

かりと三歳程の女の兒尋常の迷ひ兒とも思えれず又棄兒かとも見る難しが何年長ねど如
の兒と質し氣にて解らぬながらに銘々と家裡よ居ず母親は今此へと水を指所では凡
そ容子も推測られ最も哀れに聞ゆれば同船の人々打寄て這方の船へ救援乘しよ其中よ郷
貫は尾張の名古屋にて母と女房の菩提のためとかに四國遍路の中野尾利吉と云ふ人が我
等と斯る身の上あれど思ふ仔細もあれば這中の妹の方々拾擧げんとの望みより妾們夫婦
も其不憫さと且と又兼て兒子生育あらで老る年涙の心細ければ身の進退も定まらぬその
中ながら姉の方を拾取り夫より其兒の名をもつけ當地へ漸ッと住著て生育て擧げたは今
の娘秋の事定めて聽にと覺ても居りませうが今迄改めて語り聞かしも致しませねば此よ
大概書つけぬ扨又良人が常々申ますには俺は何分日陰の身あて何時世の中廣く生活るゝ
やも知れざれば足下も御存じの通り公邊と妾の名前にて戸籍萬端好く調へ置き其上發娘
が年頃にあるを待ち好婚取るか嫁にやるか夫と何れとなる迚も我々夫婦が少しは老樂に
此世を過す助けともせん積りとのことなれば物足らぬ中からも引伸す樣に育て、居しに
大昨年の夏足下のお家に移住み六月七月暮す間もなく偶とした事から紀州よて那の壯驅
の吟味が今あ隱らず良人の踪跡穿鑿も猶緩弛でありと云ふ風說を聞きこみ其上如何やら

欠

MISSING

這地へも内々手の廻りし樣子もあれば其人と零時影を隱さんとて藝州廣島在あは聊か個
遷のあるを幸ひ夫へ手寄て行かれたま、今日迄一度も音耗なく日夜氣遣でならぬ處より
發作りたる疾病ち夫ゐ就てと娘の苦勞孝行に倣て呉ますはど薄命が傷ましく生中妾們に
拾とれた故此難儀最惜い者よと思ふにつけ病の間にと生玉の神社よ歩を運びつ、本社支
社は云ふよ及ばず藥師堂やら大師堂遍く詣て一來にと其人が身體恙なく早く寃罪が霽る
、樣二來にと娘が緣談發跡の願ひ其傍よと妾の疾平癒を祈る其心にと邪なけれど運旺か
らぬ身の上よは却て是より禍を惹出し昨日今日の娘が辛苦昨夕の歸りの遲延さと云ひ何
時よ無い出歩行夫と妾にと明さねど外に思案の何であらう今朝も今朝とて那の早邊と云
ふお武士ゐ返す金子調達し故安心せよと云ふたは必らず身質の心算其相談の出來しなら
ん然れども早邊氏より惠れし金とても畢竟と家裡の生活の貧債のため使ひ消したものゐ
るよ娘が斯迄心を碎く氣の毒さ去迎之を止めんにと外に差向き金の出る心當りとあらず
して思へば親甲斐もなき我々夫婦就てと年齒も稍長て殊に氣丈な娘もゐ寧そ今より獨身
となるならば妾の生活を助くるとか其外色〻脚手纏となることなく發跡の道も立つべき
か然れども那娘をば藥置く心はさらく〻なく妾は是より道者よ身を俏し道すがら有難い

お刹之に参詣し報捨を八丈白ひつ、も尾張の國へ知る人を尋ね行き金の工面を做て見る、積り彌よ此事遂げたらば推察遊はで一旦苦界に沈むとも贖出すは易い譯次第いへ是は極らぬ事何ゐしても娘の上是迄のお世話序ゑ宜しくお頼み申し升心懇は是のみならで那娘が思ひを焦し懇慕ふ生玉の社内よてお目に掛つたお武士情願足下ゑも共〻其人を尋出し貰て之娘が心情盡しを細かゐお話し下されませ餘もや那のお人が見棄てはあさるまじと頷んで作兵衛又此處を再び三たび繰返し藤三郎の面前ゑ是見生へと差つけたり

第十二回

お秋は作兵衛が讀む母親の書置聽く事毎に深き恩義と厚き慈悲とに感涙止め敢へぬが上疾ある身の遥〻と遠い所へ獨旅心細さを想像れば氣も消ゑ胸も決裂くばかりにて正体もなく取亂し其處ゐ平伏し聲も得立ず泣入る對坐に流石の藤三郎も前程より事の情況を聞くにつけ自づと和らぐ心の中今作兵衛が差つけたる書面の末段此時已ゑ日の沒て傍に点せる行燈の火影ゑ照らし見て見ぬ振りゑ讀取れば

「去りながらどうぞやく足下より成らぬまでも娘の肩を持ち行末之必らず那のお人の仰ゑお添申す樣に願み上げる〻しと」

と一旦筆之止めながら心せくまゝ娘へは何事も宮殘し申さず隙分壯健で久後の榮達を只〻所り倹と添へて書たる渇り文字作兵衛之眼を屢たゝき伺もお秋に此由を讀聞すればお秋は嘆と一聲ひせかへり霎時は物も得言はざりしが漸ふ面を振上げ瀧なす涙を狹き袂もて拭ひつゝ斯る仕末にあるぞとは夢更知らずといひながら昨夕拾ふた金の事今迄明白ゑお話し申さゞりしは思へばく悔しい哀しい鄙女の失策這は何として好からうやら兩位もお聞下さりませ全体至らぬ鄙女の意とて若も此仔細を粗忽に打明け知らせなば物堅い母の性格より必らず現や角う案じ立萬に一つ拾ふた事が遺主へでも知れた日には縱し官府にお構の無い東西が入れてありしとも斯ういふものを持つ人なれば如何なる禍患をせられうも測れぬなど、赤も一層の苦勞を掛んと只管ゑ思ひ過して今日よりも何とか障りの無い樣にと心を碎く其中ゑ時過去りて出所を告さゞりし其爲めゑ此大變の出來た譯去りながら今となりては悔の八千度嘆くとも毫甲斐もなき業ゑれば唯是よりは兎も勘も身の落着を定めた上養父養母お兩個の跡跡を探し千萬分の其一でも御恩を返す覺悟をするが肝腎ならんかゝにつけても我身の上今母親の遺書ゑて思ひ廻せば幼齡い時何やら船で恐い目ゑ遭ひ泣て居たのに記憶有之原來は左樣いふ事なりしか斯も生産の親の離とさへ明らぬ鄙女の危急を救ひ久しい

年月の養育殊に慈愛の深い義父母のお意をば此に初て知て見れば有難いとも辱けないとも迚も口頭にと言盡されぬ尚夫のみか鄙女が久後の事までも左に右とお氣に掛けて下さるゝ其慈しみと天おそろしき迄に思とれ升と泣じやくりしつ後話言ひ難て指俯くを夫と察して作兵衛がモシ藤三郎様最早細々と申しませぬお聞の通り浮覽の通りの譯合なればお使命はお使命として情願やお秋が思ひを叶へて遣つて下されませお頼でゐ座り升と云ふに藤三は容を正し俺們とて木石の身にあらざれば前よりの次第を聞て生てからゐ未だなき物の哀を心ゐ感せぬにあらねども今日は主命帶ての使先き且は又若黨奉公する分際あれば年立後は兎も角も斯と爭でか彼女の望を叶へられん然れば成う事あら是限りに思ひ變へ知らぬ背と諦らめ貰ひたしと素氣あさ辭にお秋はいとゝ堪ぬ思に生産の親は更にも言はず心の義父母にも取離れ寄る邊あき身の亦此ゐ思ふゐ人にも見棄られて之此世に存生ふ心はあしと言ひ樣坐を立ち次の室ゐ走り行き舊に納めし硯箱ふたゝび開て那の紙剪刀を取出し已ゐ斯よと見ゐしかば作兵衛遽てゝ飛で行き力任せゐ其手を急へ紙剪刀奪あげ氣を慈ちつゝ藤三樣斯くなりては道理で道女を死さうと活さうと其分ちと貴君の胸にある事如何ゐ是でも領諾玉はずやと迫り問れて藤三郎も溜るゝ道のあちざれば如何ゐもお秋どのゝ望み通り承知した去りながら主人の深く思ひを懸られし其女を家隷の身として横取ゐ女房とするは義理に違へば拙者が決してせざる所然れば今日の處と使に立てる金子受取り主人へ納めた其上で暇請受け武家を捨て然る後ゐて夫婦とならん是で話は纏れりイザ金子交付れよと心は解ても辭は尚も折目正しく道理を責ての答振りゐ嬉しと喜ぶ心より作兵衛初めお秋は殊に感じ入り敬慕ふ念を惹起し今迄の泣顏刷粧ひ。懷ゐせし弐分金にて五十両包み引解き先三十両を數へ丁り次に生玉にて惡れし一両に利息をさへゐ若干の額として差出すを利子は元來恵まれし金あれば夫には及ばぬ譯なりとて藤三と卅一両の金子をのみ受收め。お秋が舊の金包。扯裂て出す半の紙にて押包み然らばと計り言ひ棄てゝ早立出るを作兵衛共々手燭をつけて門口まで見送つゐ秋は眼に持つ涙未だ乾かねど莞爾笑を頬ゐ溢し暫時は其處に跕立める心の中や味ふべし

第十三回

霞間よりの雨催ひ生煖き風ゐ吹れて藤三郎が今にも降出さん空合ひの暗き脚元覺束なく斯くとも知らば貸さんと言ひし提灯を借て來べきを過ちたりと獨語きつゝ尚宵あがら此頃之物騷ゐて獨斬なども多くあれば往來途絶し兎屋橋を東の方より西の袂に渡過ぎんとする前

頃の忽ち人の歩み來るにぞ藤三郎と心急くまゝ其人を誰とも見分ず避て通過るを遣遊ひ樣閃く白刃藤三郎が肩先深く斬つけて曲者は尙も一太刀左の高股背後より飢尖下りに斬りたれば藤三郎が心得たりと拔合せたる捷業も曲者が袖を掠めて空を擊ち痛手よ堪らず後に堂と打倒れしも。流石の藤三郎忽ち起直り。身搆しつゝ聲を擧け喊擊とは卑怯千萬遺恨のため盜賊か其名を名乘れ縁故を語れと詈るを聞て曲者は手を止め刀小脇ゑ罩れる手拭取棄る時しも一点二点の雨降來れど天は却て闇々に雲脚疾き間隙より三個四個漏るゝ星の影に藤三郎は瞞なから其面孔を認て咤とばかりに打驚き這は小衙内何と成れます人違ひか誤りかと云はしも果てず伴五郎は町々と打笑ひ此場よ及んで尙も老貫よ人違ひかと嘆くぞ汝の性格なるコリヤ藤三よ今日丹波屋へ使に遣ッた其後から嘗て深き思案も有る事あれば容子如何ゑと跟て行き丹波屋が横の閑地の高塀際鷺の如くに歩み寄り鴫首伸て脚襷し通風窓から客の室の話を聞ば手に取る如く割り了したと思ひの外事智嚴の嘴と齟齬ひお秋が根性の惡いが上老婆までが東や西と吐せることの胸惡く妬さ悔しさ腸も焦るばかりにありしかと初の程は尙汝が魂兀の擧動萬が一には亦物よなるべきこともあらうかと忍耐々々て聞て居れば到底の收局と先方の手管ゑ乘せられて如何にも望は承知した主人に暇請受ふて添てやるとはコリヤ、イ苦生那の面提て吐しをつた主人が思ふ女を横取すると取も直さず主の物を掠る己れこそ盜賊なれ盜賊の家隷を成敗すると主人の役目官府の手數にならずして乾淨り此に誅戮を受くるを有難い仕合せなりと心得て往生せよナニ彼が迫る心を假に諾がひ這虎曾くは氣を拔て後で綏つくり說聞かし程好く謝絶る心算とナ是は亦汝に似合ぬ利口な分跡ソンナ痴言に旨々合点する乃公と思ふか馬鹿ゑ言よと拔刃衝立て頬杖かひ痛手よ苦む藤三郎の面をジロ〳〵覗込みニタリ〳〵と打笑ふ非道の所業に藤三郎怒りの眼指し物凄ゑじく原來は初めより詐術ありて使命よ托せ彼に俺をば厭はせ置き後に廻りて叫はぬ思ひを尙も遂んづ心よて又事の情を熟く揣らで自分の腹の黑いから人の潔白ゑ胸の裏も共に黑いと思僻め終にと無殘の這虐遇好い鳥と樹を擇み名臣と主を選むと云ふ古語も今更思ひ當りたり俺迚もまんざら土民の腹から出たでもなく時の不幸で有る苗字さへ名乘らずゑ一年齟齬働いて五斗の米代にも充らぬ給金よ腰を折り頭を下げしも久後に少しの望がある也なり然るに今斯う惡人の非業の刃に罹ると云ふと無念とも遺憾とも言はゞ樣ゑき微運の極り然ども刃を俺に中てたる其時より最早主從の義は絶たり傷と負ふたれど精神は撓ますやはか怯々殺されうやと腰刀振擧げ氣を焦れど思ふ樣に立兼るを伴五郎は欠して世迷言は失迄か

言明すことも果てたればイデ成佛さして呉れんと言ひつゝ腰刀に縋り立んと跳躍く藤三郎が胸前把て刺通せば喚と魂斷る聲立てさせじと慌てゝ口を手を當てゝ斃るゝ所を又一刺全く殊れたるを見了して懷中より取出す財嚢血に染みたれば那の三十一兩の金包のみ手早く拔取り穴嚢は死骸と共に川中へ浚込みつゝ今更に人や聞く人や通過ると前後見廻し前に乗てたる手巾拾り上げ覆面して脚早に北を投してぞ立去りける

第十四回

お秋と過る日家主許にて藤三郎が番ひし鮮を最頗毋しく思ふまつけ胸安からぬ毋の事も那の人來ました其上と熟く商量して如何樣にも踪跡を尋ね去路を知る術の出來ぬにもあらざるべしと指折數へ初二日三日と遲詑て其中ごろと怨みもせしが今は十日餘りゐなりたれども戰吹く風の音耗さへ弗におければ疑ひの心坐ろに起り來て若や那見ても他に思ひを通じす人ありて我に契りし貫の薬は畢竟時の都合にて氣休め迄の根なし草ひくゐ甲斐なき仇事ありしかイヤ〳〵那の人に限り然る浮々しき業はなからん夫かあらぬか這方より容子を聞に行きたくも伴五と云ふ恐ろしき敵の側。狡の中の男へし迂濶に手を出す譯ゐも行かず窟に人を待つ身の辛氣さよと咄ちつゝ今日も一日待暮し悶ゆる胸を撫なから行燈に火を点し夕餐の箸も懶氣に取かゝ取らぬゐ門頭の鎖戸口何人ゐるか張一張き這方と萬屋金兵衛殿かと門違なる尋問に否其名前と這一間に通し御座りませぬと對しまゝに其人と立去りしが又暫らくして門頭に跫然。這回は何事か問ふて居れども判然せねば何心おくお秋は裡面より鎖戸扯開け頭顱を出して誰何んとする其胸擂て外面より四五人續て込入りつゝ忽ち發路々々四方よりお秋を取卷き赤總の十手振光して口々に御用なり神妙に致せと言樣其處に押据たりお秋と餘りに事の不意に驚き愛時は目を朦るのみ容易に辭も出でざるを捕吏の頭人と覺しきが高島屋ぢうの女秋とは全く汝なりとは聞糺して已ゐ分明本月朔日の夜松屋町呉服屋重兵衛方より紛失せる三百兩其盗賊の詮議最中料らず手掛りあつて已が仕業ありし証據が出たサア驚くにと及ばぬモー斯う曝露て了へば夫迄ぢや諄々言とずと尋常にお縄を受けよと一兼の宿賊待遇ひお秋は只管當惑の胸を懷て呆れ果てしが全體毫覺ゐき罪過なれば吃と心に思直し形容を正して頭人に向ひ何ごとかと存じますれば是は亦大きなお嫌疑身貧よ生活す鄙女ゐれども甚麼大膽た盗泥棒など致しませう必らず何かのお間違と云ふを言はさず頭人と聲荒ら、げて默れ女め官府には夫々證據と形跡押へて御詮議なるぞ今上官と御町内の會所よお出張り何れ其處にて吟味があらうが心遣りに大概言ふて聞かすべしコリヤ此間五十

兩包の其中から三十何兩と云ふ金を倉邸の士へ交付した事があらうがナ「ヘイ御座りましたが夫が又「已既々と假惚るナ其時三十何兩を包んだと舊の包を扯裂た半の故紙夫には兼て捺したる封じ目の黑印ありて確明あ上又其紙に書てある文字にも充分盜れ主の證據があるぞ何と是にと驚いたらうサア喃〳〵言とずと觀念せよソレ繩かけよと指揮の下衆捕吏が早く立掛るを霎時と留めて倘も分疏せんとする其手を取て押すくめ矢庭に固く縛めつキリ〳〵歩めと上り口鎖戸の際迄引出す機お秋の懷より東西墜て撲地と胖響くを手快く拾ひ行燈の火に照し看て論より證據コリヤ好物が手に入ッたと捕吏の頭人は頓て懷中ゑ納れにけり

第十五回

町會所の調所只看れば一對の高提灯と處の隅に立ち三四本の捻棒と壁の側に並び幾許かの防火什具は仕込押入の内外に具備ひ手錠捕繩さへも用意ありて二間の式臺六帖の室。這方より正面を眺れば白地に淺黄の綸子形大きやかに揚ける紙障を建て左右ゑ五目掛の蠟燭点列ねたる休裁最嚴かゐぞ見ゐにける斯る處へ處女のお秋嬌嫩な顔掛めの繩目緊く取詰られ身幅の狹き木綿衣脛現はなる小褄さへ掻合す手の儘あらず亂れし鳥髮振拂ひ捕役の者們に率るゝまゝ紅明の塲ゑ跪坐けば奥の室よりと今宵の出役當番の孔目谷川清六金山十郎腰刀手に堤げ徐々と式臺際なる設けの席ゑ坐下り當時下面にと町役と家主と倘も牽連の三ツを一個ゑ引受けたる丹波屋作兵衛が裾短かなる小紋の羽織引摺る迄に鞠躬て恐々蹲踞るを打見遣つゝ谷川清六コリヤ〳〵此町内丹波屋作兵衛借家當時他出高島屋ぢう娘秋とは其方か年齒は。ナニ二十七歳と申すか渡世は。別ゑ何と申してはない質裁縫あゞを致し貧しう生活して居るとか然れば其是と云ふ渡世もせぬ貧しい其方が本月三日是ある家主方より其前故ありて借れる金三十一兩を當地倉邸の或人に。故借りたまゝの金あらば仔細あきも他の金貨以て返へしたは全体何處より工面を致したかと流石は役目の緒明ゑ源を推しての吟味の節お秋と今迄只重に金包の封印が證據ありとの點ゑのみ心を寄せて其分疏を考へ居たるに斯く思ひの外な處より問掛られて少し慌張へ夫はとばかり分解く辞に行詰る氣色を見て取り谷川は大喝一聲已ぬ大盜賊め最早夫にて罪の事實は大概成案ッたぞと云様傍に在りし紙包前に拋出してお秋ゑ示し此中には二分金ゑて十九兩。包は故紙で印もあり其文字と黑印にと記臆があらう確かゑ先程迄其方が懷中して今此へ引る、時に取墮したに相違はあいか。オー然うであらう然うあくてとならぬ筈。然らば那裡ゑ控へし訴人の者是へ〳〵との

吩附聞て捕役の一人呉服屋重兵衛出ませいと喚繼ぐ聲あ應へして出來る重兵衛見返るお秋が何か言えんと口動かすを制しつゝ谷川は最沈顔たる面色みて重兵衛に打向ひ「其方が告訴。凡そ盗賊も分りしが這裡にて申あ其次第更立よとの命令ま重兵衛と白髪交りの頭を下げ「其節お訴へ申上げました通り本月朔日の夜ま三百兩の金紛失盗賊は必らず家内の者と存じたより様々お調べ願ひしも一向口が上りませず幾々當惑致して居りました處一昨日の事兼てお出入の播州某家のお倉邸ある早遊氏の御子息が奴店へ見ねまして失是のお買物是は爺々に知らさぬ自分の要用なれば節季を待ずに還算をせんと即座に代金七兩三分を戴いた折殘りの金も多くは無い様子あて其金を包んでありし反故紙を棄て置たま、立歸られしが後で偶と氣著て見れば思ひきや其包紙は正しくも前ま盗れた三百兩を包める故紙にて金は勿論同じ二分金ながら是には證跡もあらざれど紙は三年前の寶上帳屏毀して使用ふた文字あり〳〵而かも封じ目に崩し文字にて呉服屋重兵衛との店印捺した其片割が判然りあれば平生懇意ある願主とは云ひながら人の心と測られず殊ま爺々御とは性格の違ふ放蕩ある御子息とは兼々承知り做て居れば這個最も迂散あり遲緩ては相成らずと頂嶽訴申上げました次第ようてア、官府の御威光と宥難いもの夫より那の倉邸へお引會下されましたれば快くも云々斯々した事で右の金子は野堂町なる高島屋ぢうの娘あきより出たものと手蹤が著いたと何より以て仕合至極唯此上は一厘一毛でも盗れた金の減らずしてお下渡しにあることのみへイ〳〵願ひ率ると言立るを最前より傍聽せるお秋は忽ち口を出し原來と訴人は名を聞くだにも忌ましき呉服屋重兵衛。沒義道な剛慾な人非人ヨーモ〳〵此間は鄙女が留守ま病る毋をば貫督促り無理ま利足の勘定して捻奪る様な債金の取立。倘夫のみか今と今迄罪過もあき鄙女をば斯ういふ難儀な目に逢すとと宿世如何ある仇敵ぞと涙もつ眼で白眼へつめ愛時無言で居たりしが頓て谷川を打見上げ又最前お役人様と鄙女が伴五郎に返した金何處から工面を做たとのお尋ね然れども是は鄙女の身を賣り調へる積の目的が違ひ當惑をせし其折柄拾ひました金ありと未だ言切らぬに金山十郎シヤ、リ出で飛れ女め言はして置けば喋ると一休這裡を何處と思ふか拾ふたことが眞心でも其儘懐ま捻込で相濟むか白狐たこと吻く奴這賊あか〳〵剛性ま痛い目せずば吐すまい夫撲て〳〵と烈しき解もお秋と左迄恐もせず一暫らくお待下されませ其拾ひました金と一緒に三つ、の博塞も入れてあり兼て閭中の衆が金の拾ひ話に那の博塞があればお屆に及ばぬとのことあれば「ソンな事が何處の証にある縦し夫とあるにも迂ま飲渡拾ふた証據があるか「サア夫は「如何して消うぞ

「イヤ其證據と申して金の入れてあつた財布と谷の博奕が三つ、」「夫れが何の益に立つも、のか揑造たらば何時でも出來る。手綴くすれば方圖がない早く撲て〳〵と只管に急然つを谷川ヤ、と押止め重兵衛に打向ひ預置たる證據の包紙更め是へと捕役が取次ぎ差出すをば手に取上げて前に お秋に示たる包の紙と引合せど文字は四あり但印のピッタリ合ふたを。眺め入り「豫審は是で收結たと打笑たゝ

第十六回

辭塞り俯向くお秋得色顔の呉服屋重兵衛中に家主作兵衛と迷惑至極の眉を蹙てコレ〳〵お秋に此間からの切迫の難儀困つたでもあらうが利害い事を做て呉たナ官府のお手數は申すに及ばず町内の取込み俺の迷惑何分我家で那の金を返した廉がある故に是からは番所で吟味の度毎と大かた出ねばなるまいが貴てと今斯う兎れぬ證據が出たからにと早う云々と明白に申上げ可及け迷惑を省いて呉れと云れてお秋といと猶辟と共に胸塞り尋常あらぬ氣性とあれど差當りたる無實の罪其身の不幸を慨くのみ只さし俯向て口を緘めと谷川と這理の吟味は是限り我々と外に用事もあれは火事の咎人隨分ともお大切に役所へ引けと捕役に吩咐け又家主作兵衛にと吟味の章迚もあれは今晩より他參を差留る訴人と追て沙汰する。

迄引取居よと夫々に告捉て其夜の紀明は果にけり恁てお秋と五六個の捕役們に引連られ歩む道筋暗からで月の光に照添ひて胸と清潔な十寸鏡と自から心に思へども幽き獄に追立てられる、狗の啼聲更初めて玄中も近き頃ひに來かゝる土地は東堀農人橋の濱側道ほり茂り垂れたる柳の下に近づく折しも其小蔭より現出たる一個の曲者矢庭にお秋を率て居る捕役を把て抛倒し夫と聲めく者共を手皆り任せに擊倒し武者振付を蹴退け蹴倒し瞬く間に捕役們を留打散してお秋をば細つきのまゝ肩に懸け何處ともなく逃失ぬ」今宮村の傍りなる廣田の神廟は市街を距ること遠からねど夜に入ては人跡絶て最物凄き其茂林の中に對ひ坐した る男女あり女は痛む腕を撫ながら此御恩の程と何と申して宜らうやら實に神とも佛とも譬へん樣なき御救撲け有り難う御座り升と其儘其處に跪づき頭を地に下け禮を述るを男と遮て、扶起しコレ女中夫と及ばぬ恕して下され情が意はず仇となり一時大いに苦難をさせましたと云ふに女と不審顔「是は又存じも寄らぬ仰ッしやり樣郡女が危難をお救ひ下された御恩こそあれ何に貴君がお詫なさるゝ縁故の御座りませう「イヤ然うでない先頃淵まで來れば容易に逃手の掛ることもなからうから緩閑り話して遣うが全体俺と汝にと縁も由諸もないものなれど偶とした事から如何でも今度の災厄を救撲ねばならぬことゝなつた

のちや「夫と如何ある縁由合で「本月二日の黄昏頃長町の昆沙門前汝が口入森田屋から「身賃の商量整とで歸る「途筋東へ曲る「人通り無き小徑の中央「汝が拾ふた金財布「中にと大枚五十兩「其中の落し主は白波伜間で毛色の變つた男と云れ鬼門と綽名の付た此仙吉「エヽ然うとも知らず「イヤ斯ういへば驚きと道理あれど俺ゑと元來心ありて遣した金汝ゑ拾はれ登時と能も思ふ樣ゑ拾らうて呉たと喜んだか後で汝が扳差ならぬ危難に懼る種とあり樣々切あい目を見せたは心急くまゝ俺が注意の到らぬ所氣の毒あることであつた「然れば君が此鄙女に其金拾はさんとし玉ひしはと問掛られ仙吉は樹の根ゑ腰を掛直して其入譯は事長けれども言ねば汝ゑ合点が出來まいから話して聞さうが全体俺と當地の生産幼少い時から毎々の氣性が面白からねば一個歩行の出來る頃より家を飛出し俺が氣儘の泥稼ぎ十年餘りの長の年月無暗ゑ人こそ殺さね惡い事の有る丈を做盡した末近い頃偶と氣が着て是迄の所業を熟々思遣せば水際たゝぬ尋常一樣の白波連何で果るも一生あれば脚入かけた此道で古い事は知らねども水原尼庄が跡を暴ひ及ばずあから世の中の嘲慾非道な物持們が金を奪ふと正道で難澁を做て居る人々を救ふ目的で働んと基礎を立更へ其手初めに兼て眼につく新財主松屋町の呉服屋へ本月朔日の夕まれぐ婦取の騒ぎに紛れ日頃の手並首尾好くも剛慾強が眼張る中を旨々三百兩做て遣て世間並の衣食あら開店の宜名と云ふ所を日頃よりして哀ゑ思ふ貧窮人の家々に若干づゝかを抛込み廻つて祝儀を了し後に殘つた五十兩其一包をば以前に持つてた賭場通ひの財布の中へ納れ次の日の暮時前例の口入森田屋が門頭を料らず通り掛れば蹊蹺けあ汝の談話ッイ脚止めて小蔭で聞くゑ最も難儀あ事の成行母親ゑ孝ある心底に感じ歸りを待て前へ行扳け方角測つて拾ゑさんと右の財布を其儘ゑ遣し置き其傍らに潜んで居たはコリヤ前段の話にて後段に渉る物語は其又次の夜の事なるが非人姿ゑ身を俏し川端傳ひに死屋橋へ行掛ると一人の武士が人殺し故こそあらめと立隠れ容子を聽けば是も亦汝の身の上に掛ッタ事是は不思議と息を忍んで聞居れば斬れた其男は武士の家隷ゑてと云ふにお秋と發と胸ゑ中ッて吃驚りし夫から後は如何々々と急込めば仙吉は語を繼でサア其處でその武士が言ふ所では家隷を其日丹波屋とかへ遣ッたのと深く巧んで汝を如何ゑもして手に入れんとの心なりしゑ其目論外れて却て汝と家隷が緣談の約束したを腹立ちての所業を見ねしが終ゑと酷たらしうも殺して了ふたと聞てお秋と歯噛をなし拳を握り眼に涙氣絶るまで怒りつ泣きつ終には地上に平伏すを仙吉は脊撫摩り神廟の永洗水手に掬ひ來て一口飲せて樣々に言慰めサテ其時は斯る惡人何とか傷めて呉んとは思ひしが惡人だけ

で梢恐に腕も動く樣子あり又折柄俺は得物がおけれは空しく見遁したれど思へば汝が不憫故森田屋で住所を委しう尋ね外ながらにも此事を報せてやらんと思ひしゐ次の日より圖らず病ついて漸ッと昨日今日全癒ッた故日蔭の身にと夕がけて尋て往けば捕手の立向ひ金の包を證據と做て押門答の眞最中サテは俺が粗匂から此仕誼と知ッてと腕を見て居られず夫で今斯う求ひ出した次第であると語り終れば お秋は涙振拂ひ挺然と立ちつゝ これ伴五郎奴重なる此身の怨の上荷且ながらも一旦約束を結びたる良人の仇敵爭で殺さずに措うかと柳眉逆立て、怒の眼色最恐ろしく見ゐゐけり

第十七回

此に又吳服屋重兵衛と今度の賊難以來日夜其事にのみ奔走れば肝腎の家業は二着となり其上夜所通ひの出還入に失費多く掛りしかば漸々伴五郎が還算の金より少しく脚はつきかゝれるも是ゐて分りし金額はお秋が携てる十九兩と其家裡に有合せたる七兩許と伴五郎の手に渡りし三十一兩のみ夫も農人橋にてお秋を刼奪し曲者ありて吟味の纏らねば未だ下渡しのなきと勿論幾許だけが手に入るものやら其事さへ知れざれば差向てと勞力損の疲倦利益け一向帰らぬ成行に重兵衛が心の中と宛ら沸騰る藥罐頭に青筋たて日がゐ一日毎々頻々と見るもの聞くもの眉癇に觸れ肝ゐ礙りて天が下有と所有る不平をば己一人に引受け顔家内の者、嫌疑と一旦解ても兎もすれば箸の上下よもからみつき叱倒しつ扱き廻し尙夫のみか盜た金の穴埋にとて主管店管に下男下女們の口の側主人の威光で無理に抓らせ三度の食事も碌に食とさず自分は商ひの隙々にも居間ゐ籠て娘を相手に此頃流行る莫大小手袋脇目も振らずコチ、、と編居る處へ取次の下女ゐ引れて毛馬屋の新助入來りて候の塞喧丁寧に做果て、「時に重兵衛どの先日の御災難も如何やら脚が著ましたとか菊太郎の文通で一寸承知致したなれど委細の事は只今京都から下つて來ゐ店で話を聞く間もなく是へ參たれば存じませぬが何分右にて盜賊と全く外のものと取極り就てと大金にて日數もおければ大小お金も戻りませう然るからにと此中の婚禮一件成うことゐら一日も早く夫妻が間は更にも言はず萬願足下にも菊太郎を婿養子のお待遇に做されて下されませ己に儀式は了みました評なれば別に大層な手間も暇も入らぬ仕誼と云ふを皆まで聞かず倘莫大小を編みながらモシ〳〵新助君好う思ふても見なされ三百兩と云ふ金は大金で御座りますせ成程盜賊の脚も一度著と著ましたが夫も今でと斷絶て了ひ金は未だ一文迚手に入らぬ仕末合。全体足下と西陣でのお身柄世の比喩ゐも金持と唯虛とは謂る程穢いと云ひ殊には京のお人の樣でもな

い人の家裡ゑ沒財のいく樣なお話ばかりぢや一寸其處で算盤持つて見玉へ足下のお望み通りお做た日には先日も申した如く若不[illegible]ゑ兒でも出來すことあらば夫こそ大變なれ縱し夫が無いにもせよ菊太郎のは客分ながらも店の手傳做て貰へば主管店管們と朋輩同然に心得居るに愈〻娘の婿に直つたらば大かた熱腸を起して色里狂ひ揚句の果は店の帳面に大きな坎。然らば牀ゑ劍すの凶き損歩のあるのみならで斯る心配もあることあればモウ〳〵此事と止めるが利で做るが損倘立入つて考ふれば彼も損あら是も損。損の卦だらけて益あき歸妹如何して〳〵五十六十の持參金位では溜つた事ぢやゐ座らぬテ是這の莞席を見て下され盧も埃も其儘ゑ掃除をせずゑ置くといふは一つにと箒の摩損れるが助かり二つには歩行くに自然と足を爪立るから損じが少ない先萬事を此樣に做て。損した金を生出す最中如何なことでか御相談に乘れませうとの挨拶に幾と〳〵呆れ果は仕あがらも新助は寵愛深き我兒の心を汲取りて尙も辭を下げて「其處が御相談處といふもの此間も豚兒より來しました書狀には何か祿〻食事も出來ぬ迄に心配も致し居る樣ゐ見ゑますれば態〻今日下りました譯何か那兒に不束ゐ處もあれば御遠慮なく仰しやつて下さらば夫は充分に申聞かし升「何ぢや祿々食事も出來ぬと夫は其管の事ぢや何として〳〵此辛い世の中に三百兩の損金を取還うと思へば三度の食をも減すのが當然勿論我方では頃日家裡中が皆分量測ッて一盃半杯の食物をも減さして居るが夫を事〻しくも親里へ告て遣る抔とは以ての外の白痴もの然らいふ奴は一時も置くことならぬサア是から連れて歸ッしやれイヤ只今此で改めて離縁致すと無体の言條最前からお德は側邊。菊太郎は次の室ゐて此兩個の話しを聞居しが餘りの事に各自親の背後に進み寄りお德は左迄にと取さへたく菊太は爺が挨拶如何ぞと案ずる心を汲も敢ず流石の新助も勃として「ソンなら如何でも離縁とナ「ニ〻面倒な離縁ぢや〳〵縁さへ斷ればお德が身ゑ附く邪魔を拂ふて清淨したと飽迄非義ゐ重兵衛の辭に怒りて新助は菊太を引立て駈出るをお德は涙ながらにマア暫時と留る其手を又爺ゑ。取留められて鴛鴦の配偶と云ふと名のみにて未だ思ひ羽を抑交すことさへなくて今此ゑ引別らる〻哀しさを哀しと云だに儘ならぬ心と同じ菊太郎涙飲込みお德の顏ッと諦視て口の裡に然らばとばり暇乞ひ爺が引く手に力ゐく後振返り〳〵悄々として出て行く

第十八回

今朝方より降出したる卯の花くだし樽の玉滴音繁く夜ゐ入てより風さへ甚く吹添ひたれば世間の人は夕早くより鎖籠りゐよとの鐘を待ずして臥床ゐ入るも多かるべきに孤州某家倉

庫の留守居ある那の早邊兵庫と便室に在りて亥の刻近くなる迄も未だ寢もやらで其妻靜江と差向ひ何か語らふ閉戸の外覗ひ寄つたる男女兩個各〻一刀手挾みつ戸の節孔より耳を當て始終を聞居るとは少しも氣づかず兵庫仔細を知らねば卿の歎も無理あらねど伴五郎が道回の不埒は尋常一通りの事ならず若も今迄其儘に做て居らば今夜の中に手段あるか腹切らずか何の道命はないもの靜江是と亦驚入つたる淫話良人がお手づから命を召るゝと云ふ迄の事を做さしたとて全体如何いふ譯合。若や家門に疵でもつく樣な次第でと淫聞りませぬかと流石は武士の妻だけに日頃の修悟み蓋躁く氣色は見せねど恩愛の遣る方なきは涙に咳に紛らし密と拭ふ袂と共に聲濕らして尋ぬれば兵庫は屢〻太き息を吐き「イヤとよ家門にと先別條あければ是れは安心做やれぢやが俺が那奴をは如何しても生け置けぬと決心したのと靜江斯ういふ樣由ぢや熟く聞かれよ大昨日は卿も知る如く申牌下りに時あらぬ町奉行所よりの召喚狀夫さへあるに其名死は俺ならずして副役なれと這と不思議あ事よと思ひしも公命なれば躊躇と出來ず直ぐ小林を使者同道にて差出せしに夫より小二晌も經て立歸り俺が詰所に待つ所へ來て眉打顰め實は只今の喚出しと貴君の御子息伴五郎殿に係りし御用にて夫は云々斯々と細かあ語るに所取れば伴五奴が何を買おつたか同じ日呉服屋重兵衛方にて七兩三分の金を還算ふた時乘置踊りし金の封じ紙から發ッた事で全体其紙は策てより承知して居る重兵衛が盗賊に盗られた三百兩の金を包んでありしものゝ夫と證據となる文字もあり封印もある處より那の重兵衛が何の考もなく直ぐと其由奉行所へ訴へ出で吟味を願ひしより早々右の還算金幷びに企包の出所を不都合ない樣あ取調べて申出よとの談じなりしと云へば大いに打驚き取敢ず伴五をば人なき所へ喚つけて段々次第を責問へば右の金子と云々の事よりして生玉邊野堂町の高島屋ぢうの娘秋と申す者より同町丹波屋作兵衛方にて受取りしもの〻由漸々ゝ言立てをつて勿論拙手續にと甚だ言葉の濁りし点もあれど受取ッた金の事は偽りとも覺にされば翌日小林をして事の情を奉行所へ聞き上げ夫より御用の隙を見て伴五を尚も詰諸なさんと思へる折しも亦もやお代官所よりの照會狀展て見れば其支配所木津川沿の某村なる入江ゝ茂る蘆中ゝ多く日數を經しと見もる溺死人一面体おぼと分らぬも全く武家の若黨風身にと數ケ所の太刀痕あり懷中を檢ひれば一枚の印鑑を持てるが是は當家のものあれば兎角立會人を出せとの事故取敢ず當該役を出張させ例の如くに處理をせしか是にて此間より藤三が踪跡の知れあんだ譯と分りしも彼が何故斯る淺猿き死をおしたるか合点行ねば段々思案するに何分伴五郎が那の高島屋秋とかより金を

受取れると云ふ前後の挙動よ心得難き事多ければ若やと詰所を退帰り伴五が居室に居らぬを覗ふて其腰刀を検め見れば思ふよ違はず血の痕あり是にて思ひ合すれば那の三十一両の金も全体藤三を使よ遣ッて受取りしとの事あるに夫を又伴五奴が藤三より受収めたと何処でありしか判然とせず殊よ藤三が踪跡も此時より分らずなりしことなれば最早彼是の疑なく藤三を殺せしは男伴五に極ッたりと思ひながらも偖然る筋に心利いた玄關詰の長谷川に委細を含め直ぐ野堂町へ差向けて事情を探せ居る中早くも其容子を氣取つたか男が脱走。跡に残せし書置には其處等の事は記さねど夫に續いて右の長谷川が立帰りての話に據り是迄の事柄が悉皆分つたと云ひさして徐かよ座を立ち俺も大分年を老つたと見ゐる夜分は兎角小便が近いと鄙江が点せる手蠟を把り雨戸を開けんとする有様に外面よ窺ふ両個の男女は贅骨折しと舌うちしお秋どの仙吉さまソレとばかりお庭の叢竹雨よ濡れ音響かぬを幸ひに押分け入て身を潜し形ち見ずなりにける

第十九回

倘衣更着の周寒く垣根の雪は消ねどもうちひさす都に名たゝる祇園町解語花の叢園とて此處よ唱へは彼處よ彈き最り春めく其花に仇し野摸の奥二階藝者小徳が人待顔よ兎角天の

み見られつゝ茫然仕て居る折節よ隣樓で弾出す三絃の聲唱歌は調子も清元の忍び逢ふ春の雪解「冴かへる春の寒さにふる雨ゝ暮ていつしか雪とあり上野の鐘の音り氷る細き流の幾曲り末ゑ田川へ入谷村廓へ近き畔道も右か左りか白妙にゆきゝのなきを幸ひと人目を忍び イみて雪をよすがに直次郎確にこゝと見覚の門の扉へ立ちよれは風に鳴子の音高く」小徳は聞くともおしよ耳に入る歌の意につまされて坐ろに思ひを悩ましつ風の寒きも打忘れ暗予開て欄干に凭れ高塀越しに外面を見下す其後に何つの間よやら了塀のみつ江一個の手を把て小徳の側にチョイと突遣り「若旦那此上首尾ゑ如何で御坐り升夫にお疑ひで切戸を這入たりなされたお心が可笑いサア〳〵小徳さん連れて來ましたハテよろしい他の人には滅多に知らすことでは御座んせぬと年こそ行かぬ利發ものそこ〳〵よして下りて行く跡自送て小徳ゑ莞爾り今迄の胸の辛氣も何處へやら男に向ふて爽々と「モシ菊さんエ此中より積る話が夥多とあるよ頃日はそよとはかりの風の音耗も仕てお呉んのゑ氣懸りお「然れゑ俺も夜お日に逢ひたいとは思へども誰が告口を仕たものか卿のための柳巷通ひ疾も鈴々の耳に入り或日俺をは一室に喚び若い時分にゑ有る習ひとゑ云ひあがら貴様が馴染の藝妓と云ふは蔭々聞けは那の驅慾非道おと口に云るを呑込んで咳に紛らし言直さんとするを小徳が

引ッ取て「ソンなら菊さん妾が非道な那の爺、さんよ盗れた金の塡合せとて去年の秋から此柳巷へ賣れて勤をすることを「不思議な程に熟う知ッて昔から子を賣る親は多けれど家倉持ッて其娘を浮川竹に沈めるとも呆れ返ッた那の重兵衛殊に貴様と去年の夏那奴がため離縁に離縁せられたものあるぞ元から好合ふた間とはいへお徳獨りが女でもあるまいし夫に不自由たらしう彼を慕ふて若も重兵衛が聞知らば乃父が大叱より歸りがけに屹度お徳に勝ッた嫁取りて立派に別家さして見せると云ひし辭が反古とある素ッかり是から思ひ切れ萬一否をいふ時は勘當すると嚴しい教訓夫から俺と出歩行叶はぬ座敷牢。此頃聞けば近々女房を持すとて如何やらその準備もある樣子如何はせんと心配最中今日料らずも卿の方から毎も伴さす理髪匠の手より旨く文をば屆けて呉れ見ると其儘夕餐さへそこ〳〵に家裡の奴等の眼角とづして脱て來たが此よ不審あは主管友造。卿が這裡へ勤に出た時より繁々通ふて揚句の果よは情人になれとの無態の段々夫に卿が身の上の成行云ふて謝絶る話を聞てからソンあら菊太郎と云ふは生の家裡の若旦那兄御とあれども病身故御次男ながらお跡取り斯と知ッては今迄の言葉は清楚よ水よ流し一番肩を入髮て菊太郎樣を卿に逢してあげやうと手の裏かへす彼が紹介夫から斯うして一旦聞た赤繩を繋ぎ遇見ること、あつた譯其逆あ友

遇の口から漏れる道理はない苦去迚外よ此事知て爺々の耳に入れるものとなし一体卿は這裡を何う思ふか「サア今迄兩個の事を深切に庇護して下さる友造どのあ夢更然うした事とありますまいが今のお話では如何でも郎と添遂られぬ爺々御のお心夫さへあるに妾が身よも今日の書狀にある通り昨日今日親方さんが喚つけて卿と百五十両といふ大金かけて抱へた身分夫に詰らぬ蟲がつき外のお客に不勤するとは如何いふものぢや彌々思ひ切ぬとならば何處かへ仕變に出さねばあらぬが我身であつて我物ならぬ其處が勤ぢや思ひ切れと餓かに喧ましい手詰の吩咐と聞て菊太と腕を組み夫では詰る處が兩個の望は叶はぬかと溜息して此方の話迚切るれば手よ取る如く隣樓の唱歌「泣の泪に紙ぬらし枕に結ぶ夢覺ていと思ひのまま鏡見る度ごとよ面痩てどうで存命へぬられねば寧そ殺して下さんせと男に縋り歎きける」菊太は頭を擡げ最前からう〳〵外に聞て居たが那は江戸からツイ近頃に乘込んだ延壽か得意の出しもの廓文章とかを書直した三千年直次郎が成行も今は料らず我身の上如何して見ても添れぬうへからと「ソウで御座んす死ぬより外に思案はと涙ぐみつゝ萎る、折柄次の室の襖押開け「若旦那も小徳さんもソリヤ無分別ぢや這裡は何も箇も生に任せてソレ斯々と兩個に急しく囁き告るを菊太郎「ソンなら友造這の塲は小徳を引連て「

小栗栖村の生が親里「跡の處と好い樣に「其處あチッとも脱落とない疾く〳〵と手具似で知らす心の内の善か悪かとしら梅の薫りは暗に匿れねど其木の下を立廻り兩個と手拭眉深に小褄をからげ然らばとてがりよ脊の切戸を走出でけり

第二十回

軒を並べし織物屋梭打つ聲に綜綟る音賑ふ中に一際目立つ店構造茶色暖簾の文字よて這裡に老舗の毛馬屋と問でも著ふ物持の家ゐも苦勞は絶ねぬと見る主人新助か女房ふさゐと並居て主管友造を前に喚び心配顔よ膝すり寄せ主管どん菊太が成行は分つたと何より重壓三日以來家裡中の大吐嗟苦嗟いかい苦勞を那をつたシテ〳〵何處よ何して潜んで居たか如何ぢや〳〵と急込むを友造は沈著てモシ旦那さまお家さまもお聞なされませ昨晩の事で御座り升が新次郎旦那が奴をばお居室へ招かれ弟菊太が踪跡は何とか道でも著いたか全体俺と形の如きの長思ひ其上歩行も叶とぬ不自由ゐ身體迚も相續難かしければ何れ弟を世取りに直さんと心算り夫故去年那個か大阪で離縁とゐりて歸つたを卿と却て幸ひとし遠からぬ中機を見て髪を下し一生佛のお守護を做て此世を安く終らんと心に樂む甲斐もゐく遊妓風情に心を奪れ在逃するとは何事ぞや今迄家裡から人を立て、手脱漏ない詮議もあれど仕の者でと心元ゐし氣の霜ゐがら貫樣か出向て聞て來よとの仰つしやりつけ然る色里の勝手には頓と手筒な奴ゐれど倘も探つて見んものと先づ今朝早くより北野の社へお詣りして菊旦那のお踪跡知れます樣よと祈願を込め夫から祇園へ廻て彼の仇し野樓とかに尋ね行き動如何にと問ふて見れは恰ど其朝方菊旦那の敵妓小德が室の手函より兩個の名前で認めた二通の書置を見付け出し其表書と父君兄御樣と宛たのと今一通は抱主へ殘したもの夫を拔て初めて解つた無分別如何でも兩個は此世に無き人と聞て吃驚り取敢ず主公へ宛し書置と一緒よ二通とも持つて歸りました是御覽とませと懐探つて前に差置けば夫婦と苦とばかりよ仰天しつゝも新助は外に餘はなくて不孝者奴と云ひゐがら取手遲しと開いて看れば斷るに斷られぬ兩個の中思ひよ迫つて其親々へは固り不孝と知りゐからも斯と覺悟を極て這裡を立出候ま、此日を忌日と思召して一遍の回向頼み奉ると最も哀れに書綴りたる文句を讀んで新助は眼を瞬た、き。ふさ江は听て喚と聲立て悲嘆の涙。次の室よりと新次郎か樣子を聞つけ坐行出で「ソンなら菊太と死ましたか「理も非も分らぬ强慾人を一圖ゐ厭ふて飽も飽れもせぬ中を隔てし父が今更後悔「イヤ此友造も過あり此程もお爲を思ふて手切をさせんと嚴しく御異見申したが失管も今度斯ういふ事とゐる却て手傳になりましたらう「ホ

ン二主管どのと俺ゝ代ッて度々異見を做て呉たに那奴が耳ゝ止もせず斯る白痴を仕をつたと返す〳〵も不孝な奴「モシ父上 弟が此書面の端にコレ見玉へ主従友造と常々嚴しく諫立などして小悪いものと存せしか今更思へば全く家を大事と心懸け忠義眞ッ法な男あれば是迄怨んだ過りは那の世よりして謝罪申さん情願何時迄も父上兄上を稱て此上あから忠義を盡して呉かしと書て御座り升ぞや」「ナニ〳〵至らぬ奴をば左程迄に仰ッしやつて下されますは思へば〳〵勿体ないと啜りあげたる空涙。」とは知らずして新助新次郎も共々ゝ音にこそ啼かね悲嘆の涙止め敢ず別てふさ江は嘆きゝ堪へず身を抛ッて伏沈む折しも門頭に哀れ氣な聲振立て、一個の巫女が口寄せ玉はずや巫問ひ玉はずやと嗟嚬の下より店の裡をばさし覗けり

第二十一回

非業に死た我兒の去落揑造事と毫知らず新助夫婦兄の新次郎も諸共ゝ嘆きに餘り招魂ひ喚れて巫女と裾卸し一室の裡に坐を構へ燈心結水手向儀の如くゝ做し果て、頓て前なる筥に靠かゝり今問ふ口と死口で目下の男と聞定め先づ寄神の歌を小聲ゝ誦し眼を閉ぢ頤を手に朶せてサモ哀れ氣に「謹み敬つて申し上奉るゝ梵天帝釋四大天王——下は閻魔法王五道冥官——天の神地の神——家の内にゝ井の神竈の神——伊勢の國では天照皇太神宮——外宮ゝは四十末社——内宮にゝ八十末社——南の宮風の宮——月讀日讀の御神——又當國でゝ上下加茂——御社——穐て男山の八幡宮祇園で牛頭天王の宮日本六十餘州の総ての神の廣前——出雲の國の大社——神の數ゝ九萬八千餘社——佛の數ゝ一萬三千四箇の靈場——冥道を驚——此ゝ降し奉るアラ恐れありや此時に——萬の事を殘りなく——敬てたべや梓の神親族の諸精靈——弓ゝ矢のつかひの親——一郎どのより三郎どの——人もかはれ水もはかれ——かはらぬものゝ五尺の弓——一打うてば寺々の佛檀にてゝ響くめれ——と唱へ了ると見るしが忽ち鬼語にてハヤ寄つたぞや〳〵梓の弓にひかされて我亡魂の來るぞや好も尋て下された——繰れゝ此ゝ在せる父母や又兄さまの兼て嚴しいお諭しを耳に听けども心ゝ入らず如何ある宿世の因みにや日々ゝ繚る悪縁の解く由もなき兩個の中如何でも此世で深れぬならばいつそ死なうか死ませうと心を決め書遺す文の筆さへ後や先。さき立つ不孝と身の過ち面目ないやら勿体なけれど踏迷ふたる戀の道遂に兩個が手を引合ふて死出の旅路を鴨川の流に托て西の方難波入江にうたかたの哀れ果敢なく消し身の輒む所ゝ一蓮托生と望を懸けた那の世に行けば思ひきや弘誓の船ゝ來も迎はず黑暗地獄で日〳〵の苦楚只此上ゝ逆縁ながら父上母様是迄の不孝を許して回

尚怠りなく願み參らすと聞て新次郎は仙へ寄り「コレ菊太貴様は解らぬものぢやぞや何で死ぬ程の事ならば貧と云々斯々した義理合ありと一度でも俺に言ふてと呉なんだ貴様が死んでは這家を誰が相續仕て行くぞや　巫女　然れば其事弟も心に懸りしが突詰た胸の迷には然る分別の出ずして死ぬことのみを急いだは今更思かと思ひ升が情願相續は云ふ迄もなく兄上が仕て下さつて其後見をば主管友造にお定めあらは家の繁昌疑ひなし努々異議を云ひ玉ふな　新次　成程主管は忠義一圖に勤めて呉るが病身の此俺が相續と頼かしい　巫女　去りながら一旦相續なされた上は兄上のお心で此資財を友造にお讓りあるとも夫と其時次第の事尚其外よ冒ひたい話の數々盡ねど還歸を急ぐ冥土の使者繁ければ早歸るぞや名殘惜しと云ふかと思へば巫女は直ちに目を開き口皆此お果たれば最前より頭を垂れて傍聽せる主管友造眞打かみながら倘も涙に暮れて居たる新助夫婦を言慰め菊太郎小德が俗名を紙に記して佛檀ふ燈火を點しおどすれば新助夫婦は禮物多く與へて巫女を歸へしサテ佛室に入て新次郎友造の兩人を喚び何れ日を改めて儀式を仕まするが菊太が思ふ如くに我家の相續と新次郎其後見と主管どの御苦勞おながら頼み升我等夫婦は髮を下し家の脩り見た上は是迄の苦勞に引かへ氣晴しかたゞ諸國を行脚して菊太が菩提を問ふ心算と云聞け置て後は持佛に打向ひ看經稱名に餘念は更よおかりける

第二十二回

毛馬屋の主管友造が母と云ふと萬と呼て都の僻鄉小栗栖村に住居して六十路の阪を疾くに過ぎ尋常ならば起も坐るも佛の涉名法座參りには請詣で現世の勤より後世の營みに日を送るべき年齒なれど然る志は少しもなく老て益々慾深く心の鬼の角と共よ一旦脫た奥齒さへ二番生する壯健婆々男が給與で食ふ外よ良家の娘を敎唆し男狂ひより魔道に引入れ終に身の皮劍で苦海に陷し其間錢二兼酒の代とし或と又病臥す人の夜具着類を奪取る迄做て歩錢の口入料懷にする抔慘酷き所業の常なれば誰云ふとなく三途の婆々と渾名せるが今日しも朝から手酌で傾飲る壞酒一個の魔者風の女をは揚口なる柱に縛りて猿轡嚴しく猶め倘の枕屏風の裏に病臥す男を屏目に白眼つけ罵々たる聲振立て、コリヤ忘八奴いくら跳躍たとて如何するものか乃媽も人に知れた三途の婆公ぢや倘も言ふ樣に得心せずは捻殺して衣裝を剝ぎ眞箇の三途河原に放遣つて裸で道中さしてこなすぞ夫が否なら往生して病毒けを思斷り男が心に隨へよ何ぢやく頭りを振ると否と吐すのか善いは如何でも然うなら方法と倘〻澤山ある哩何ぼ親子兄弟でも金錢の上は別物ぢや己を口說落さにや勞力料を取るこ

と出來ぬサア是でもかと仮餘の酒口に含み縛りし手脚に吹掛れば着る間に繩目喰入ッて痛
楚に堪へずや身悶し面の色赤くなり亦青くなる苦しむをも頓着せず曲突の下より粗朶取出
し之を食へと連打ち幾と〳〵息の絶んとするを見て漸くに手を止め己のみでは不足あらん
ドレお接伴をさせて遣ッかいナンぢや其樣になつても口を動しをると定めて情男を怨して
呉と云ふのか是と貞女の程感心千萬然れど這方のためゐと少しも用なし全体此菊太奴は初
めから清楚に結果けて遣る筈なれども夫では收拾をするゐ女人業にと面倒なれば病づかし
て緩々と料理をするを有難いと心得て早く小德に得心する樣言ふて聞せよコレ枕ゐ喰つひ
てソリヤ何の眞似をするのぢやエ、氣の慾る腰拔奴と屁風跳のけ脚で菊太が顎をあげ又胸
の邊りを撲と蹴れば云と一聲仰さまゑ仆れて正氣を失ふを見向もやらず故の處に立歸り如
何ぢやモー心が折たかヤレ〳〵多い手數を懲をるは己れもマア顔ゑ似合ぬ根性骨の強い奴
己等が這裡へ來てから五六日手を變へ品をかへ恐喝して見ても口説ても如何な承引をせぬ
から起つて今日と據ろなく荒療治サア早う得心せい然らば病人も隨分看護ッて世間へ出す
ことと出來ぬなれど一生一室で養殺しには仕て遣ふ。と云ふも其就裡語らねばチト合点が
行まいから手休め旁〳〵云ふてやろと亂れし白髪を掻撫で、其處ゐ貼然あぐらかき壜の餘瀝
を乾しながら全体男が貴樣等を斯うして這裡に引摺り込んだのと只己を手に入れんための
みならで實は毛馬屋の總領新次郎へも菊太ゑ遣つたと同じ毒藥。一時に飼ふては露顯の原
と分量測つて少しづゝ食せた効で到底腰拔け日頃律義ゐ見せ掛た騙詐が當つて尾を見せず
老毛夫婦と佛性向ふゑ涙溢させて這方へ身代捲上る細工と流々成功は必らず近い中我兒
おからも手柄もの見揚た男ぢや好い男ぢや斯ういふ人を亭主ゐ持てば榮曜榮華は做たいま
ゝ家裡に一人二人〻腰拔を養ふ位と頓着ない生青白い面皮を做た朦瞳漢と雲泥萬里何と
是でも承知が出來ぬのかコリヤ〳〵又も身振はして跳躍と〳〵夫では如何あつても往生せ
ぬか好々モー此上は口も醋うなつたドレ命の根の斷るまで今一度傷て呉れんと立上るを小
德は夫と一生懸命手脚を張ッて身を摺動かせば口ゑ箝りし猿轡自と解け息を限りに救拔
を喚ぶ小德が聲に吃驚りしお萬は張慌てゝ手拭拾り再び口を括らんと鮮めく折しも脊戸の
生垣潜破り土足の儘に走入る武士猿手を伸べてお萬の襟元取るよと見ゐしが忽ち筋斗を打
して二三間障子を破ッて表の方へ拋出したり

第二十三回

圓山の杜康家醉花亭の園坐敷ゑ毛馬屋の主管友造が同氣相引く兩個の奉承漢隨へて正午過

よりの小酒宴初めの程は互に耳を取替し咀き合ふた秘密の話も酒が言とする微酔機嫌終ゑは座中の一個が默ッて居らず持ッた盃隣の男に廻して「周伯老今度の一件素ッかり例の佛爺を術に乗せたも畢竟云へば貴君が菊太の柳巷通ひと小徳が素性とを故とあらぬ様旨く爺の耳に入れられたが基礎とありて夫からとん〳〵拍子に斯も計畧が當つた譯誠ゐハヤかんしんが胯を潜つて漢家第一の功臣と先貴君に定つたと髮結床で看た三國志の文句交りに空褒するを眞面目ゑ受けて周伯と鼻蠢かして辭は低く、是は痛入つたる挨拶假令愚老に張良が智慧わらうとも大將か豪傑ならねば決して斯ういふ手際には參らぬ處イエナニ那の藥の事かなアレと眞の衣食身寄の微功で御座るが偖啓次との貴公が那の兩個を落した其晩直ぐに小栗栖村に遊説して身を匿了せる手立と詐りマンマと呆郎に書置かゝせ夫ゑ一寸の尙々書本文が正物故少しも纖漏を出さずに遣つて除たは流石公事師の骨長だけなかく〳〵のお手柄と云ひさして友造の方に膝押向け時に大將最前からの相談で是から後の手續もモー脱漏なく話が着た母屋ゐ遠い此坐敷も壁ゑ耳ある世の譬喩言はゝ久懸の地にあらねば談合谷と是で切りあげ早々都の街に押出して程好い處で前祝ひ奢り玉へや如何に〳〵と調子に乘ッて煽りたてたる背後の方俊寛康頼等が謀叛の段〻逐一聞たと云ふ聲ゑ友造初め周伯啓次と吃驚として後振向けば一個の老婦莞爾々々と打笑みおがら入來り何れも今の高聲は何事ぞ氣を着け玉へと云ふ面孔見て初めて各自胸撫下し是は托代のお踊どの平常に請す狐よりも化るゑ旨い僞巫女のコトリン〳〵との遣塩梅恐入ッたと申し升と酔ふた癖と友造が御捲かゝる贅語を引留めイザ御出馬ぞ然るべきと調子合せて這裡を出で落着先は祇園町皆々友造が後ゑ跟き那の仇し野櫻に赴けば槌で庭はく迎接振り奚娘們が聲清音に呼應へて東西する間に早くも酒ゑ肴ゑ並出で藝妓ゑ幇間打揃ひ彈つ唱つ雜噪めく面白づくしの興も稍闌はゑ及んでと三絃も耳に五月蠅く唱歌も聞たうない然う噪がれてと飲だ酒が頭へ昇ると友造が語を听て幇間の豆八額を叩き「是とシタリ委しい緣由は兎も角も風説で聞けば毛馬屋の御後見とと公の事叔父の彈正其處除けといふ御威光が是からお身に備る吉兆斯る愛たき期からに噪がゑや何時か噪がるべき然れども御大將の下知なれば這個從とねばあるまいが其代りにと兼て望みの吉野行必らずお供を〳〵と隙さど附込む其機に乘つて藝妓の小辨が「弱々お望叶ふた日ゑと先第一に妾の落籍小奇麗な小間物店でも「皆まで云ふな小徳が逃亡したからは承知ぢや〳〵ナニ仲居のお松が願ひの帶か。願ひの芋なれば猶易いが夫も先合点ぢや〳〵と尙手ゑ入らぬ榮花の先繰り夢中にありて華者を遣り我も樂み八

も亦歎び極まる隣には要の在るが世の習ひ次の空の襖瓦路離と開放ち白髮頭の薄汚穢き一個の婆々眼血走り息喘し氣に案内も待たで駈入つゝオ、友造這裡に居るかサア大變が發つた禍事ぢや〳〵と堂つかり坐したる光景に一座何れも是とばかりゑ膽を消す中にも友造は忽ち顏の色蒼ざめて手に持つ猪口を下に置き早くも好らぬ容子に一個退ち二個逃げして寒承家の外傍りゑ人の無くありたれば膝詰掛て其大變とは如何なる次第如何いふ緣故と問はれて婆々は其處ゑ篩すてたる盃把つてグッと乾し「サア其緣故と云ふは那の小德奴がなか〳〵云と承知を做をらぬから今日と一番手を變て荒料理ゑ料理にかゝッた眞最中口の手拭思とず解けて叫ア〳〵吐した其聲で常から氣に食はぬ隣家の涙人出る幕でも無いものを出しや張りくさつて俺を抛つけ氣を失ふてる其隙ゑ菊太も小德も引攫へ何地へ逃しか行先知れず那奴が家裡は見透く住居正氣ゑなつて搜しゑ行ても女房一個が居るのみにて這方ゑ弱氣の十分あれば推ても問とれず其儘ゑ大方這理と馳つけた迂濶々々做て居る場所でないと所て友造慌張へ出し這と變ッた事ゑ成て來たと帶引締て駈出さんとする折から亭主の丁兵衛不意ゑ樣側より飛んで入り「コレ待ッた友造どの委細は那處にて聽取ッた玉が何處かへ沒おつたらば內々約束の身の代金今這處で「エ、現金おと言ひ樣に引留る手を振拂ひ友造は母と寒承家們をも打掐て、逆歩出し西陣投て走歸りぬ

第二十四回

芦が散る浪華の辰巳名呉の浦其町稍盡處に世を過難ねてしかゞ住むなる按摩博士行唱太夫夜發賣麵夫門演劇の俳優は十郎兵衛めきし涙人と壁を隔て落語家の前坐と洗濯婆々と軒を並べ種々雜多なる業体の其中ゑ徜闊談の先生が十年以來の束ね役解りし事も分らぬくする似非裁判夫を天狗に緣由ある馬屋の裏長屋路次の角ある床辰と記した暖簾の其中に火鉢を圍み各自の順の車坐待詫て居睡るもあり語るもあり二三枚附木を足した將棋さし精神と共に故と我結ふべき番を抜すもあり人樣々な那方の一個柱に凭れて跪を拔く勿体ぶりたる男ゑ向ひ「時に八兵衛さん長屋中の重兵衛爺老那奴と元何處に居た男ぢや吝嗇一方取込むことあら死んだ犬でも遁さぬ氣性那個が世に云ふ轉んでも徒手でと起ぬ奴開て下され昨日の事ぢやが俺が月行司で塵芥錢をば長家一統へ割つけ一軒別ゑ一文づゝを集めに行くと那奴の曰くに誰が頼んでお前ゑ取らせをつたか這方は一寸とも知らぬ一文と儲おき半文でも出すことと思ひとと吐すもあ夫れでと困るといへば人の困ると三年でも辛抱すると渾で無法な餓鬼ぢやゑ「那奴に其位の事は有り中ぢや那個は其大原と熟う知らぬが一時間と松屋

町で一二を爭ふ俄か長者と名の高かつた呉服屋重兵衛の身の成果何でも去年の夏の掛りに三百兩の金を盗れたが抑も落目の初りで夫から一段爪の先ゑ火を点し春公人們の口を乾し夜晝なしゑ拵だ上胴慾よも百何十兩とかゑ娘を賣て穴塡せんと色々工夫を做た所一來ゑと世の噂しい勢でグンと呉服の下りを食ひ二來には主管番店們も飯り吃々した故に終ひゑと皆々決裂を起して取込持逃げ引繼き三來にと外國変易に手を出したとかで壬生浪土に襲れ込まれて多くの家財を毀たれお貧ゑ此正月家から火を出して家藏殘らず燒失ひ其揚句にと因果な眼病平常が平常なれば誰一人の助手おく到底這裡へ舞込んで好な酒の飲めぬと勿論古川の流れの末も長らくの坐食のためゐ今と早水粥さへも難かしい倘夫のみか斯る中にも少しは頼に做て居りし賣た娘がツイ此頃情死做たとの知らせの書狀實と俺が諭んで遣ッたが是には如何な那奴も弱り切ッて愕ッくり做をつた盃梅ぢや「イヤ〳〵決して弱りはせぬテ今朝も那の見ゐ惡い眼ながらに風呂敷擔げて出掛る容子朝から何處へと問ふて見ればナニ久しい病氣も昨日今日大分快おつたゆゑ島の内から船場邊何でも構ぬ拾ひものに行て見ますと平氣な面で換換したとの話も倘了らぬゑ袱包背負ふて呉服屋重兵衛チヨコ〳〵として歸り來て我家を投して路次を這入るゑ風説をすれば影がさすと大家恐と ず出せし舌引込十帶もあらざるゐ忽ち門頭に一個の武士年の頃二十五六と見ゐて長高く黑羽二重ゑ瀧縞袴柴鯔の大小豪傑袋最嚴めしき打扮したるがコリヤ〳〵呉服屋重兵衛と申すもの此邊ゑ住へる由居宅と何れか指示て呉リヤれと聲掛られ今結了ふて小口に居たる一個の男が幸ひ奴と其隣へ歸るものゐ道引を致しませうイザ此方へお越し成れませヤレ〳〵危險い露路の穿と獨語おがら重兵衛が住居へこそは連行ぬ

第二十五回

呉服屋重兵衛門頭に音おふ聲聞て俺を尋ねらるゝは那裡のお人ぢや又々長屋の意地惡們ゐ敎唆されて詰らぬことを言立に錢でも取りに來られたのか「イヤ拙者と決して左樣なものでは御座らぬ全く京家の武士にて少〻お身に承りたいこともあり二つには次第ゑ困つて乞聊か金子を惠んで歸らん存心と聞て重兵衛打驚き「是は〳〵貧者とお察し好うマーお出下されました唯〻檀那樣御勿体おい誠よ酬酬しう御座りますが先〻這裡へと這躋ひ手の裏かへす待遇を武士と心に笑ひながら「然らば許しやれと會釋して早上座に打通る姿ばかりは仄見もれは重兵衛平處ゐ平伏して「仰せを聞けば有難い何かと措きお惠み下さるお金と全体何程で御座り升か成うことおら次より先ゐ「イヤ然う急るゝとも拙者が渡さうと思ふ

時でなくては相叶はぬ「左樣ならばお尋のこと、と一休如何いふ次第で淫座りますか早う手短かにお濟し下さつてお金をば情願お氣の變らぬ樣よ下されたう存じます「然りとは又取ることよかけては利害い執心以前よ變らぬ剛慾な「へイ以前と仰つしやれば成程耳よ覺があるやうなお聲夫と兎も角前程も京家のお武家と承とりましたが俺も京と聞てと無益お からも氣掛りな若し祇園の小德と云ふ藝妓の事を「然れば其事「シテ〳〵小德が萬が一よも生て居ると云ふ樣な嬉しいお話では御坐りませんか「其小德が已に危き場所を我等が助けて今に存命「コヽ夫は實事で御座り升か「爭で僞りを申すべき「ヤレ〳〵嬉しや此間も祇園の親方仇し野樓の主人が外用かけて當地へ來られ一生不通の奉公人の事なれば別に委細を知らさずともの事ながら全體お前は小德お好いお客が附て根引でも做られた時にと一廉の頼とする心底でもあらうから手紙も已お寄來したなれど尙又序に荒增を話して聞さうとて其言ふ所を承まとり升お情死做た敵男と申すと西陣の織物問屋毛馬屋の次男菊太郎其證據と此書遺あり迚何か一通携ッて居て讀んで听して呉ましたが肝腎兩個の已懇は何處で見たといふでもなく段ゝ推問へば段ゝ茫漠した口擂梅萬一斯ういふもの、救拔た人でもあつて假令生存命て居ようとも是から先お前には小指一本でも指さぬから然う思ふて呉れとの事何ぢや死んだ樣でもあり死なぬ樣あも明ゐて甚だ合点の行かぬとと存じながら空恍惚に開置て腹の中でと已大大棒奴俺を程好く嘲著して娘の事を思斷せ跡で旨い仕事をする算段あらんが好々其中眼病が快なり次第篤と去落を穿鑿し若存命で居る時よは那奴が計略の裏を搔んづ我覺悟全體貴君は如何いふことでお出になりました娘を救助て下さつたとは有難い樣なれど若し誰ぞから頼まれて「イヤ別に頼れたと云譯でとない「夫でも如何やら可笑い臭がするコレ言れるな元來小德は俺が一生の食物大方前よ來た仇し野樓の主人奴とは同じ穴の狐どの其時答へた空恍惚な辭を眞に受て少許の目腐金で此老爺を敲つけて了ん心算あらんが然う旨くと立會はぬサア娘と何處に居るか小德は何れよ行たか如何ぢや〳〵ナニ默止てばかり居るはハヽア二本指たら唯々貴君の做さるゝまゝにと這老爺に言さんとの威しならんコリヤヽイ武士貴樣と俺が口の端の飯粒を落しに來たのかエヽ腹立や二本棒を極込んで這個的ッ切り强談ぢやお近處のお方來て下されと大聲あげて狂廻るを武士は騷がず四邊見廻し「オイ親爺さんイヤサ紀の國屋掛藏どの尙煎賣商の鏘出刃で正直漫平を殺した氣性が脫けぬと見ゐるあと言れて重兵衛は唖とばかりに仰天せり

第二十六回

登下武士は辭と共ゐ膝を崩し「コレサ親爺さんお前と眼が惡いから見ねばいが斯ういふ俺は兎門の仙吉此頃と浪人宮川多門と仔細らしう名告つて居れども身の皮剝けば斷るに斷れぬ親子の血統實はお前が息子のゞ吉」エ、何と」然れば其爲さと無理でもないがモー大概ゐ外た横道蹈留り異途面な人間ゐ立歸つても好さゝうな定めてお前も忘れはせまい俺が十二の年の霜月中旬那の三軒屋の若倉屋で三百兩を旨く占め其所業をば素ッかりと正直淺平に塗付けて温ッくり懷を煖めた仕形からして腹ゐ入らず畢竟親の命けと云ふ手前で進まぬゐから裡より慫ヒて漸々手引を做たことなるに後でお前が話を聞けば疾ゐ淺平を斬殺して置き剩さへ其妻子迄結果け幸ひ夫で跡を埋め誰一個にも怪まれず是より如何なる運の回り來てか家業も段々發達して生活勝手は好くなれど幼い時からお前に發育てられた丈ゐつて兎角に地路ゐ奉公などの出來ぬと勿論若倉屋より暇取つてからも窄々したお前の稼助を做て居難く殊に斯ういへば氣の毒らしいが全体お前は同じ惡い事をするゐも只貪慾の一天張り慾に掛てと人の命も塵芥と云ふ根性ゐれば我親ながら疎ましくもあり亦恐ろしい故終に見限りて家を飛出し夫から這方へと嗜ゐ博奕と歪み節思ふまゝに做歩く中三年以前の事なるが天滿の賭場より此長町の隱家投て歸へりがけ松屋町を通つた折偶と眼に著た呉服店前方から見ねなんだ立派の構家蟹骨も太さうゐれば近隣の風説を聞て見るゝ去年の冬京都より來て開いた店呉服屋重兵衛と云ふ名前にと少しも心當りゐけれども暖簾の間から窺と見ねたる主人の面孔若や夫かと人を遣つて三軒屋を聞探れば表賣屋勘藏は男が家出したより三四年の後妹娘を引連れて京都へ移轉したりとの事原來と愈々那店の主人は俺が親爺に相違ゐし然るからにと其身代の資本と云ふは取り直さず若倉屋の三百兩夫ゝ就ては三個四個の命にも係つた次第今こそ綱をば潜ッて居れ終にと遁れぬ天の罰俺も其後考へた事ゐつて好ゐ博奕も弗つり止め到底莞席の上で死ゐれぬ身ながらも少しと人の爲めになる樣にと剛慾非道な金滿家の東西を盜んで正直ゐ貧乏人を救とんと洗儀を變へた折柄ゐれば覺そお前が以前の事を思ひ出して改心する一端にもと去年の四月朔日の夕まぐれ婚禮の騷ぎに附入り三百兩の金を取ッたは外でとゐい此ゞ吉ぢやと聞て重兵衛呆果て何か言とんと焦燥る程酷は出ですして只管に眼を屢たゝき口を開き急忙し氣に落る水涕横撫するのみ事行かざるに這方は沈着て「コレ〳〵這裡で然う吃驚されてと早い〳〵倘々話さにやならぬ事が澤山ある其中にも一旦死んだといふ事になつた妹お德の死なずゐ居たはお前の喜びなれど夫ゝ引換へ太分お前にと禁物ゐものが存生でツイ鼻の先に彷徨て居るぞや是とシタリ何も左程

に跳躍にも及ばぬ幇かゝ做て聞ッしやれ其禁物と云奇妙お事もあればあるもの今で云俺が女房同然の一個の女大体斯ういへば當りが着うがイヤ天道は爭はれぬものぢやと云ひあが ら豪傑髮を搔探り煙具取出し那太豆烟管で烟草蔵らし愛時息をば續にけり

第二十七回

隱滾人の兎門の仙吉其處ゝ在る素燒火鉢ゝ吸殼はたき扨言掛た俺が女房同然の女と云お前が十四年前尻無川で淺平の妻お石を殺した時來合す船に驚て取殘した娘両人の姉の方今はお秋と言ふ名前此又女と一緒ゝあつた段取は云ゝ斯ゝと彼の身賣の辛苦を立聞して重兵衛の家で盗つた三百両の殘りの金五十両を遺して遣りしに其封じ紙から思はず重兵衛の訴人お出る事とあつてれ秋に無實の疑が懸りし次第就ては早遂伴五郎がお秋に無体の戀慕お秋が伴五郎と思ふて若藤三郎に懸想の一條伴五郎が瓦屋橋にて藤三郎を殺害せし話夫よりお秋が奉行所へ引れ行く途中農人橋で警固の役人を劫かして奪取り廣田の森にて仔細を告げ又此時お秋の素性を聞知りて扨と一旦驚さしも尻無川の一件は何分年行かぬ中なれば仇敵は誰とも知つて居ぬ故俺が身分と打明さず不思議にも斯う成行た上から云倘も恩義を懸て一つにはお前の罪の幾許かを償ひ二つには萬一仇敵を發賣風勘藏ありと知ることあらんにも陰ながらお前を庇護はんものと腹を括つて彼が一旦良人と約束した藤三郎の仇敵伴五郎を討果さんとする志を助け其屋敷に忍入しも見込を得遂げず夫からは始終お秋と共お伴五郎の行方を尋ぬ歩行く中何時ともなしゝ草枕結果つべしと云思ひぬながら綾に繚る緑の絲終ゝ妻上●よと呼び喚る、間にあつた譯シテ又其後云涙人ゝ身云俏し本年の初ゝ京都在の小栗栖村ゝ假住居昨日料らゞ隣りのお萬婆々が非道ゝ婦人を賣さいなむを聞つけて其婦人と婦人の情夫とを救出し容子を問ふて初ゝて知ッたお前の沒義道又毛馬屋の番頭友造が惡巧就ては妹の小德と菊太郎は差向き京都の知る旅籠屋に潜せ置き此一件りの結果は悉皆お秋に打任せ俺云其儘當地へ出掛て絶て久しい親子の名乘をすると云ふも段ゝに取る年と共お身の運命も傾き時モー大概で我を折らぬと如何いふ事から俄ゝ積つた罪の暴露出すかも知れず白髮首云木の空高く懸けらる、も見て吳惡し俺も前から云ふ通り到底莞席の上で死ぬれぬ身分お前さへ此で素つかり改心せば何もかも俺一人ゝ背負て仕舞ひ快く仕置を受けん覺悟あるがコレ親爺さん情願ぞ改心做て下さい倘又此に一つの頼ゝ云ふは菊太と妹の緑談あるが毛馬屋の一落濟んだ上は天下晴れての夫婦とあし俺が仕置に上つた後とてもお前の跡目の繼げる樣に做て置たい是非此事も承知を做て下さんせと恩情籠て事

を分けたる言葉にて流石の重兵衛も感じ入り最前から閉た眼を開き壁畳らせて「思へばふ〳〵我輩の程こそ恐しけれ今の話を聞て見れば今更親顔をして悴と云ふも恥しかゝ吉よ熟う此曲ッた乃公の心を直して呉れたア、眼は見えねども胸の中は渾で日本晴がした様あ其代りゑは亦是迄の悪事を思へば立ッても居ても心が濟ぬオ、好し〳〵後とも云ず是から直に公義へ名乗り出で貴様の仕て來た悪事も共ゑ我業なりと言立てん貴様は老先長く存命へて乃公が弔ひ妹の後見頼むぞやと誠面ゑ現はれて矢庭ゑ其處を立んとするを仙吉遽てゝ扯留め「イヤ〳〵其改心と言甲斐あつて嬉しけれど今お前に名乗り出さす位なら斯う心配とせぬ譯ぢや「ソレでは如何あつても心が濟ぬ「イヤ夫と詰らぬ事「イヤ乃公が「是はシタり然う喧しう云ふて近處ゑ知れては折角の苦心も水の泡「シヤと云ふて「弼〳〵然うなら俺は這裡で腹切ッて「エ、滅多あことは仕て呉れな「ソンなら俺の言ふ様にと強て重兵衛を得心させしが氣懸りあと兩隣り若し今迄の話を漏聞とせなんだかと戸外ゑ出で、窺ふゑ最前案内をした隣の男は烟管の面つけをする職人にて槌音最も喧しく又片隣と明家あれば是では先づ安心なりとて立歸り暫らく餘談を盡す中夕暮近くなりたればお秋に逢ふと會ぬは其時宜ゑ因ることながら先兎も角も京都に赴き毛馬屋の方の埒明て尚行末を相談せんとの悴が辭を尤なりと點頭つゝ重兵衛と急に仕度とゝのへ貧しい暮しの氣樂さと跡に心を置くべき物あらねど出行く途に不慮の出來事あるぞとは神ならぬ身の知る由なく親子連立ち今の夜船ゑ乘後れじと脚急がしく八軒家ゑ走行ぬ

第二十八回

此に又京都西陣ある毛尚屋の家にて前程より懸離れたる一室に通せし女客に向ふて主人新助夫婦息子の新次郎も其處に坐し辭を盡して禮取り〳〵中ゑも新次郎は膝を進めて此度の一條に就きまして貴女御夫婦のお蔭にて家の治りと申す迄もなく弟菊太郎と小德が身の禍を無事に遁れしのみならず小生ゑ取ては多病ある其上に飲された毒藥にて腳腰立ぬ不幸さへ夜前お惠下されたる兼てお配偶のゆ秘藏とか云ふ毒消の藥ゑて霎時の間ゑ効見え此通りに稍回復を致ました誠に神とも佛とも喩へ難あゝ御高恩夫に就てはお包みあさる、貴女のお名前又お配偶の御姓名何と仰つしやりますか何卒お明し下されませ「ナンの然う仰山あ御挨拶に及びませぬ良人と勿論妾とて初先より報酬を得たうて仕た譯あらねば姓名を申す心と露聊かも無いことゆゑ再びお尋ねと御無用そして今朝程宿で約束仕て置たれば斯うい ふ中ゑも菊太どのと小德の兩人が參られう又前ゑも申した通り良人と昨夜の船で下りまし

たれば呉服屋重兵衛よ道理をふくめ菊徳が縁談も多分納得することとなりませう「へイ〳〵
此新助も今ぞは實に後悔千萬彌々菊太が小徳と一所に歸りましたなら重兵衛の返辭が分り
次第早速其執計ひを致します」然らば那の人達が身の收局もつくと云ふもの夫は然うと友
造へ如何ありましたか「ハイ那奴は夜前貴女がお萬婆々の祇園へ駈つけるを行拔て私方へ
子細をお知らせ下さつたよ因り其後から拔らぬ面して温ッくり歸ッて來ましたを夫となく
一室お入れて座敷半見張りの者を附け置ましたと云ふよ女は点頭て「去らば其番頭の身の
上よ斯々して〻と囁く折柄庭の彼方お何か滅雛々々音するを逸早く新次郎が開つけて障子開
けば這と如何に母屋の納戸の連子窓押破りつゝ友造が今や半身露はして手をさし伸べ其處
に垂れたる松が枝に縋りつき家根に遁んと仕て居るよぞ皆々アハヤと走出す中にもお秋が
早速の飛道具烟草盆なる火入を把て抛つくれば狙ひ違ずず灰烟發ッと立ち友造が眞額微塵
と打中てたる痛手に何かよ堪るべき身体は元の窓の中鼻先擦ッて轉げ込む響に驚き戸口の
番人其外も大勢駈つけ取ッて押へ片息をして畏縮り居る日頃の頭高此時よ敵を取ッて遁ん
ものと店の久三が髷掴み首筋持ッて引摺出し主人の前に押据れば新助は胸よ餘る怒りの顏
色已れ番頭イヤ友造奴熟も〳〵大膽な事を仕をつたなと言ふて暫らく手を振はせ眼を瞠る

のみ後の辭を得出さぬよ友造は四邊きよろ〳〵見廻して此には見知らぬ女が一人居るの外老人夫婦と病人の新次郎店の甲乙のみなれば例に變る惡者肌頭に灰をかぶりながら平氣な面で胡坐かきコレ〳〵夫は何を云ふのぢやや全体乃公は何の罪咎あつて昨夜から瞞して一室ゐ鋼込めたと坐敷であらうが牢と名が付きや獄屋も同然良し少々の落度があらうとも何で一應の糺しもせずに此へ打込んだ實と是から出る處へ出て老耄も死狂ひの呆郎奴も共ゐ砂利を掴んで白黒分て貰さんと出掛た處を那奴が物を打ちつけたのかと喚きながらに立かゝり勢ひ見せてアハ好くは逃んと圖る心を見透し女客は冷笑ひ「コレ〳〵番頭どの不手際ながらも物を拋たは此妾ぢやが人もなげある今の臺詞痴おどしを言ふも程がある牢ゐ這入るも自業自得是迄作ッた己が罪積つて見たら言分なからう「ナニッイジ見馴ぬ女客が出しや張つて何を吐すか引込おれシテ又乃公に作ッた罪とは「何空惚けか白々しい己が親里小栗栖の三途の婆々へ預けた二品覺があらう「夫は「サア此なつてと如何してもモー叶はぬ「イヤ〳〵知らぬ覺えとあいと言ひ樣久三が捕る手を拂ひ其處等の者を撲倒し逃んと働く友造を今迄默ッて坐ッて居た新次郎が病人と思ひの外飛鳥の如くゐ走近づき腕首取つて引つ搦ぎ庭前目掛て堂と投たる柔術の精妙尙も蹈つけ動かさず「コリヤ大泥

棒我家を惑亂さすのみか此新次郎にも弟にも毒飼したる極惡人已に一命も覺束ない處を是なる女中のお惠み不思議の藥で幸ひ今は毒氣も消ゑ元氣は獨よ復らねど脚腰立つて此通り兼て中立賣の先生に習ふた手並少しは骨よ堪へたかと罵りおがら手近なる飾り井戸の釣瓶繩よて早高手小手に縛めたる折しも手代の清七がモシ〳〵檀那さま只今伏見の乘場へお供致した堺の田邊屋伴五さまが跡の縮緬の荷物を成だけ早う送つて呉れと仰つしやりましたと言ひも終らず友造が括られ居るを見て是は如何ぢやと打驚く後に丁雅が聲高く店へ二挺の駕籠が來て女子のお客樣お逢ひたいと申して居ますと云ふ聲聞て新助夫婦ソリヤ菊太郎が戻ッたと駈出す後に女客も引添て「是で此一條も差落が着きました友造は少しも早う奉行所へ差出されよ同類の奴等も必らず夫々手當とならん妾は今方聞ひた田邊屋伴五と云ふ人よ尋ねたい用事もあり全体又迂濶々々長居は出來ぬ身分イヤ長居は却て邪魔よなると未た駕籠を出ぬ兩人の男女に挨拶さへもソコ〳〵に主人夫婦新次郎等が强て留るを聞入れず袖を拂ふて出行ぬ

第二十九回

日脚之已に七ッ下り城の太鼓の六ッ頃にも近づけば八軒家より出る夜船九艘一艘棹上る天滿橋の上手より綱繰出して曳く水主て向ふ掛りに尻突出し船で揖取る船頭と閑かよ見ゑても水鳥のわがき隙おきゝ心遣ひ食ふ飯さへも立おがら此處の跳杭彼處の暗洲船路を測る忙しなき實よ世渡りの艱難は此船に乘る多くの客も亦樣々の商賣家業のためおらずば親類身據り懇意の問祝儀不祝儀を慶び吊ふ義理交際の其中を離れて己獨り立ち剛慾非道に年取ッた那の呉服屋重兵衛も今宵は世間一樣の人と合乘る船の中悴が異見染々と寒き河風雲ふきはらひ輝々と照る月涙お真如の會得はゆかずもあらんが今の我身は借蒲團頃に被れば脚が出る犯せし罪を思ひ運せば天が下廣しといへど親子買切る間仕切りの最狹くろしく窮屈なれば坐ろよ起る菩提心襟元を這ふ虱さへ佛の御名に因みあれば肩動かして辛抱し只觀念に閉た眼も何時しか眠りて何事も白河おらで淀河を半ば上つて牧方近くおりにけり」水辛にお座安本丹は宜しい。お客樣お都よ。早うお上りやす。御太郎よ——天滿へ屆ける包取つて來い。ナニ畜生め——宜しくお願のン申し升。モシ〳〵御番所ぢや名前言ッしやれと最騒がしかりし伏見の乘場も稍離れ淀の細手よ指掛れば徐〻初まる乘合の高慢話色雜談美濃と近江の廏物語に賑りして奥羽の人に長崎者其又脇に四國訛りと北國辯宗旨論やら土地自慢阿呆につける藥の效驗まで口から出任吐喋り合ふ艘にと船歌面白く櫓拍子取ッて漕ぎし八幡山崎弘

過來れば寂ッそと靜る客の間に風呂敷包を假枕眼は閉れども尙寢入らず心に何か彼是と行手の事を案じ居る一個の嫁さ婦人あり是別人あらず兒門の仙吉が妻となれる高島屋お秋にて今日西陣の毛馬屋より直ぐお伏見よ立出で、今一日と艮人も大阪に逗留ならん艮し然うでない所が田邊屋伴五とは兼て尋る仇の名前に似通ひたれば早く虛實を究留めたく又昨夜艮人と分れた時小栗栖村の住居と是ぎり止めて鳥羽の邊りの知る先へ移り變るの約束あれど番頭友造が同類詮議もあることあれば兎角今宵は京都近くに居らぬが好しと扨て斯くて此夜船に乘りしあり夫は措き此にまたお秋が傍り遠からぬ胴の間に是も眠らで苦裏に中野屋と印しの入た小田原提灯吊り下げて煙草薰らす五十餘りの男に向ひ其娘と覺しき年若き女が悄々話し「然うで侍坐り升か夫でこり日と戀しい姉さまにお會ひ申すことが出來升なら」「逢るとも〳〵併し年久しうなることあれば確か當時には阿波座よ住むと聞たれど今でも其處に居る事か何卒無事に居て呉れ、は好いが「ソンなら又如何やら手寄あい「イヤ〳〵假令住所が變つても尋ねたら分らぬ事とあい屋號は何とか云ふたなオ、高島屋ぢや大坂と廣いけれども元の居所が分つて居れば丈夫夫サア一寢入り仕ませうと提灯取て消さんとするに此方のお秋は前程より寢られぬまゝ、この話を漏聞て胸に當る辭の端々兼て養母おぢう

の書置で知つて居る中野屋とある印しといひ娘の年恰好其聲音まで何處やら自分よ似た節あれば紛ふ方なき我妹尋る姉は今這裡にと思ず跳起き言はんとせしが其處に思案を運らせば如何に成行とと云ひながら紐の林よ寄そる身の後暗きが其上に眼先きに狙ふ仇もあり迂濶に名乘らば我脚手纏とあるのみならず彼に愛目を見すると必定去迚此儘默止すも本意なしと頓て起直りて何氣なく兩人に詞を懸んとする折しもあれ鍵竿船舷りお打かけて餅食とんか汁食はんか善哉如何ぢやと罵動搖めく物賣る船よ喚醒され船中暫らく騷然たり

第三十回

噪がしかりし船の中も又暫らくして靜まりたればお秋と小壁で彼の親子に向ひ「最前から寢られぬまゝ聞くともなしよお話の次第を承まとりますれば不思議な事もあるものにて貴方がたのお尋なさるとお秋さんと云ふお人で何んでも幼さい時仔細あつて姉妹離れ〴〵よなつて妹御は名古屋のお人に養はれて侍座るのではありませんか若し其お秋さんなら兼て爰と近付きで熟う知つて居升「エ、夫ならアノ姉さんを侍存じで侍座り升お「是と誠に不思議な事成程世間は廣い樣で狹いもの只今仰しやる通り此兒の三歳許の時今尋て居升姉の方は紀州の高島屋何某と云ふ夫婦の人に拾てれて大坂に住み妹と名古屋大手町にて扇商を仕

せずる中野屋利吉と申す此小生が拾ふて箇樣に育て上た譯「然らいふ事なら確か尻無川で姉妹が流れ船に「取殘されたか捨られたか慥と容子は分らぬながら姉の兒の言ふ所では何れ其片親は家出なし亦片親は何やら川へ身投を做たと思とれ最も不便な有樣にて其時小生は母と女房に死分れた不幸續きに氣を屈し陷資とても手を着ねば漫ろに國を立出で、伊勢參宮から大和路懸け神社佛閣を巡拜し四國遍路の其末に紀州へ回つて大坂より歸國の途中ありしが家裡へ戻つたとて親類身寄も少ない身再び女房を娶ふ心となし恰ど此中の一人を拾うて我兒とせば先祖の祀も絶ねず老行く先の頼みともなること故順て其由同船の人々ゑ冒ひ聞ねしに此折彼の高島屋夫婦が乘合して居て其一人を拾はんと云はれ全体小生と獨り身なれば姉の方が都合好けれど幸ひ國では近處に乳を貰ふ先もあり高島屋夫婦と初めて大坂へ來て乳汁もなければ姉を那方ゑ讓りてお秋と名づけられ妹を小生が取りてお蝶と名付大坂の船著場で立別れる時小生の住所と云ふ又高島屋夫婦が移り住む先と阿波座なりと云ふことを互に打語り其后音耗もすべき筈なれど旅の疲で長らく病氣に取合せ就ては身代も馬手ゑなり其稼戻しをせんためゑ家業ゑ少しの隙もなければツイ今迄延々になつた所遺兒も段々年長けて其中婿をも取る積り然うあつては身儘にならねば夫までに年月戀ふ姉のお秋ゑ逢して遣らうとて大坂へ參るのでは座り升貴女が幸ひ其お秋を御存じとは神佛の御引會せ何卒何處ゑ居り升か教て下されませと聞てお秋は胸一杯ゑ湧き出る昔を懷ふ涙をば呑込で押鎮め「アーサ其お秋さんはヒョンな事から哀しい成行サ、妹御の驚きは尤もあれど去り迚亦今命ゑ如何からあるのではない妾も其處等の事は委細に知つてゑ居ませぬが大概聞た處でゑ云々是々の譯合にて養父養母に引離れ思ふた人ゑは死別れ思はぬ人の助けを受け終にゑ不思議な義理ゑ繚まれて引くに引かれず何時しか身をば白波の處定めぬ盜賊に妻と喚ばる、惡因緣今は何處ゑ如何して居らる、やら妾も話につまされて涙が溢れて來ましたと我身の上を人事に托へて語る一部始終お蝶ゑ泣入正體なく前程より頭も得上げで居たりしが漸々涙す、り上げ「段々のお話しにて妾が逢ひたいと思ふ目的の無くなつたより姉樣の淺猿い身の成行き妾しや哀しうてなりませぬ「オ、道理ぢや〳〵「然うで御座りませうとも併し今申しました次第あれゑモー〳〵早う諦めて是から大坂へお出なされても必らずお尋ねには及びませぬ若しお秋さんが身寄の者と云とが知れてゑお上からお調があつたりして如何ゑ難儀な目にお逢ひなさるかも分りませんア、今もお蝶さんとやら貴女が逢ひたいと思ふ目的がなくなつたより姉さんの淺猿い身の成行が哀しいとゑ好う仰ッしやり

ました若し此言をお秋さんが聞かれたならば定めて千杯に思ひれませうと包むにあまる涙の雨虫が知らしてかお蝶と泣じやくりしながらも提灯の火でお秋の顔をジッと看つめ「モシ貴女が然う言ふて下さると何ぢや、ら姉様の様に思はれます萬一夫から我身に難儀が掛るとも厭ひませぬ何卒妹よと一言いふて下さりませと膝よ取著き又も泣入る外の方更けたる夜風に船人が聲哀れ氣に此は牧方鍵屋浦と唱ふ棹歌俄かよ止んで其處等忽ち物騒がしければお秋は何事にやと打驚き苦とね上て向ふを見れば今しも上り來たと思ばしき三十石船へ一艘の小船を附け多くの捕手が跳入り涙人宮川多門とは假りの名鬼門の仙吉今一人と同類ならんイザ尋常に縄に掛れと口々よ呼はる聲れ秋は吃驚り氣も頓倒如何はせんとする折しも又忽ち淘然りと水に飛込む音に續きスワ逃た川へ飛んだといふ聲聞て我知らず伸上り那方を見んとする手を取つてお蝶が怖やと縋りよるよぞお秋と目前夫の身の上迫れ果るか否らぬか脇見をするではなけれど救援よ出た迚其効なからん何れ我身も遠からず天の網と免れぬ身夫に就ても妹へ心の中で暇乞ひと彼が取る手を確ッかと握り堰來る涙よ暮れ居たり

第三十一回

重兵衛は悴の仙吉と京に上らんとて今宵三十石船に乗込んで寢るとなしにッ〻昏〻と眠ろむ中に早枚方に著たりと此より上るも亦乗る客もある吐嗟口騒よ眼を覺したる間もあらせず不意に發つて多くの捕手が跳り入り鬼門の仙吉縛かゝれと舞めく聲に打驚きながらも斯うなつては彼是論ずるよ遑なし我其仙吉なりと僞つて免れるだけと悴が身を免してやらんと思案を定め見ねぬながらに人の立惑ふ中へ割つて入り名告つて縛受んとする拍子に足を蹈違へ淘然河へ落込たるよぞ這は失措ふたりと思ふ中早五六間押流され船でと又逃たぞ河へ飛だと動揺めく聲の聞ねたれば急よ思とく變て扨てと乃公をば仙吉なりと思へるならん夫から幸ひ乃公が何處までも悴の面仕て居れば萬よ一つは彼が免れることもあらん怎と兎もあれ斯うなつて見ると彌々天道の恐しい事が分つて來た年こそ變れ處こそ違へ乃公が淺平を無殘に結果た上其女房お石を殺したも河の中未だしも是で死にあば結構な往生と思とねばならぬ日頃覺た水錬で探り泳ぎに游いて行かば何處かの岸に著れもせんが夫では倘々如何ある淺猿い死様せんも測られず然うぢや〳〵と覺悟はしつゝも懲ひ水心がある故よ仍沈みもやらで盲龜の浮木の夫ならで不意なく只ある架瀬杭に流掛た折しも今下流より水押切つて上り來る三十石船の舳に觸れ勢鋭く杭に挾まれたれば何かは以て堪るべき阿ッと一聲喚ぶと比しく頭と碎け身は挫げ敢なく息と絶よけり是は措おき仙吉と初め那

ました若し此言をお秋さんが聞かれたなら定めて千杯に思されませうと包むにあまる涙の雨虫が知らしてかお蝶と泣じやくりしながらも提灯の火でお秋の顔をジッと看つめ「モシ貴女が然う言ふて下さると何ぢやゝら姉様の様に思はれます萬一夫なら我身に難儀が掛るとも厭ひませぬ何卒妹よと一言いふて下さりませと膝ゑ取著き又も泣入る外の方更けたる夜風に船人が聲哀れ氣に此は牧方鍬屋浦と唱ふ棹歌俄かゑ止んで其處等忽ち物騒がしければお秋は何事にやと打驚き苫とね上て向ふを見れば今しも上り來たと思ばしき三十石船へ一艘の小船を附け多くの捕手が跳入り涙人宮川多門とは假りの名鬼門の仙吉今一人と同類ならんイザ尋常に縄に掛れと口々ゑ呼はる聲れ秋は吃驚り氣も頓倒如何はせんとする折しも又忽ち淵然りと水に飛込む音に續きスワ逃た川へ飛んだといふ聲聞て我知らず伸上り那方を見んとする手を取つてお蝶が怖やと絶りよるゑぞお秋と目前夫の身の上遁れ果るか否らぬか脇見をするではなけれど救援ゑ出た辻其効なからん何れ我身も遠からず天ぴ網と免れぬ身夫に就てと妹へ心の中で暇乞ひと彼が取る手を確ッかと握り堰來る涙ゑ暮れ居たり

第三十一回

重兵衛は悴の仙吉と京に上らんとて今宵三十石船に乗込んで寢るとてあしにッく〳〵と眠ろむ中に早枕方に著たりと此より上るも亦乗る客もある吐嗟口騒ゑ眼を覺したる間もあらせず不意に發つて多くの捕手が跳り入り鬼門の仙吉縛かゝれと葬めく聲に打驚きながらも斯うあつては彼是論ずるゑ遑なし我其仙吉なりと僞つて免れるだけと悴が身を免してやらんと思案を定め見ねぬながらに人の立惑ふ中へ割つて入り名告つて縛受んとする拍子に足を蹈違へ淵然河へ落込たるゑぞ這は失措ふたりと思ふ中早五六間押流され船でと又逃たぞ河へ飛だと動揺めく聲の聞ねたれば急ゑ思とく變て扨てと乃公をば仙吉なりと思へるならん夫なら幸ひ乃公が何處までも悴の面仕て居れば萬ゑ一つは彼が免れることもあらん怎と兎もあれ斯うなつて見ると彌々天道の恐しい事が分つて來た年こそ變れ處こそ違へ乃公が淺平を無殘に結果た上其女房お石を殺したも河の中未だしも是で死にあば結構な往生と思とねばならぬ日頃覺た水錬で探り泳ぎに游いて行かば何處かの岸に著れもせんが夫では尚々如何ある淺猿い死様せんも測られず然うぢやくと覺悟はしつゝも悲ひ水心がある故ゑ仍沈みもやらで盲龜の浮木の夫ならで不意なく只ある架瀬杭に流掛た折しも今下流より水押切つて上り來る三十石船の舳に觸れ勢鋭く杭に挾まれたれば何かは以て堪るべき阿ッと一聲喚ぶと比しく頭と碎け身は挫げ敢なく息と絶ゑけり是は措おき仙吉と初め那

の淵然と人の陷つた音を聞しも我父なりとは氣付ざりしよ逃わ、くと云ふ聲に傍へを見れば重兵衛と何地へ行きしか影見ねず原來は過てか心ありてかと思案する間とあらざれと共處に暫らく佇立むを捕手と早く目をつけて肝腎の盗賊は逃亡なるぞと大勢一度に折重なり押へて難なく繩を掛け夫より枚方の惣年寄が許よ引て行き出張の役人より一應の吟味ありしに仙吉と今は斯うよと覺悟を極めたれば今迄の惡事を少しも匿さず父の罪迄我身よ引受け就てはお秋は女房あらで全く水炊の業よ雇ふた下女又今宵大阪より同船したと是も同類などでとなく久しう行方の知れなんだ叔父の久兵衛といふものあるが眼病にて脚元の定かならぬ故不意の騒ぎに周章て川へ陷りしものと存じますと奇麗ゐ言立たるに因り差當りての吟味は思ひの外に手間時間入らず濟みたるが元來此捕手と京都町奉行所より差向けられたるものにして全く仙吉が小栗栖村に住居せし以來に働ひた少あからぬ盗の口より手を入られ昨夕よなつて彌々夫と當りが着き彼是穿鑿ある處伏見の乘場で大坂へ逃走つたと知れ直ぐ追込みになりし所又引返して京へ上つたと道がつき陸へ上げては面倒なりと斯く途中で召捕られしことなれば役人と調了りて夜明を待ち京都に送ん今暫くは氣を着て番を致せと手先に言聞け頓て座を立ち奥ゐ入る此時土地の番人が先よ立ち五六人の百姓等が今の騒ぎに川へ陷つた男と此下流の杭よ掛り上り船に挾まれて死だぞやと云ひながら戸板に乘せた死骸を舁込み庭に据るを仙吉が吟味の席より下りがけに暫と見るよ手利家い傷よて面体あでと分らねど頭の白髮衣類の縞柄紛ふ方あき我父なれば流石の仙吉も拱と驚きはろりと落す一滴他人の千縷百縷の涙に勝りて見ねにけり

第三十二回

額に汗して汝の食をくらへてふ金言も耳に入らぬ社會よと人の勞力作つた秋の實ゑ掠めどり終よは擂る天の網敷の道を横に外れ畔道傳ひに脚踏込み様ゝくねる女郎花色のた先やら金のため作りし罪の其元を推究むれば何れも皆心の欲よ克ち難き情弱者に横道者困りもの等の掃溜場所首の落葉のはらへば亦忽ちにして集り來る刑戮見物の其中で市著狙ふ世の中には幼な立より六道穴市地よ筋拙た圏あどの話と迎も反りが合ねば本室梢の間鐵門高塀忍返しに突棒叉桿琴柱も添て威嚴密の三ツを備へた牢屋敷守る番人も爭でかと木偶の坊にて間尺に合ふべき上の威を假る虎の皮褌にこそ仕て居らぬ牛頭馬頭の那の世の鬼より貼錢を取る此世からある地獄の三の間今日と朝より降る雨ゐ食事を仕舞ふて間頭が午睡の隙に萬引小僧の甚太郎が「時に貫様等と何と思ふか此間の頭は大分違ふたものぢやゐ今朝も今

朝迎賭博で捕縛し金太の家内から入れて來をつた空豆を先づお頭へと云ふた所を其儘悉つくり下されたが滅多あおいお頭ちや「ホンに左樣とも〳〵私も掬摸の幼少ながら方々で捕つたが此處の頭の樣に慈情深い人はおい婆婆で立派にヤレ何の頭とかソレ何の親方とか言とる、人にもマア無いわい「鬼門の親方とは兼て聞て居たがイヤおか〳〵恐れ入つたものぢや是では來てから日も立ぬに頭と仰がれさつしやつた筈此丹一と按摩の枕さがし貴ては商賣冥利に朝夕肩でも挑んで恩を送ろかいと囚人共が口々に喋る聲音の高くなりてか鬼門の仙吉眼を覺し「汝等い何を喧々吐しをる斯いふ處へと二度と再び來ることぢや無いぞよ仕て來た惡事と詮方なけれど是から娑婆へ歸つたら曲れる根性を扑き廻して眞途面お人間とおつて呉れ乃公も子供の時から隨分横道に切込んで人の勸めと云ふこと知らず毎日々々懷手して遊歩行き人の物は我が物と盡鳶お宵覗き盗一まき大体はせぬことおく博昧三昧を無上樂と思ふた心を近い頃より入變へて世間で謂ふ義賊とかの流義よ做ふて仕たり顔よなつて居たが是も篤くより思案をすれば大きな間違若も世の爲めと思ふたおらは已が家業を大切に働き勵んで人の厄介とならぬ覺悟が專一なり全体盗人商賣程引合ぬものは無い其證據は家倉建て、三代相傳常服体で悠々と一生を平氣に送ると我々が物する方の仲間にあく

て一厘一毛の利萍を積んで折々我等よ物せらる、方の人お在り今斯う氣が着て見た日お乃公も後悔限りおく只仕置を受けるを待つのみなるが此に心殘りは家て汝等に話して聞したお秋が身の上其仇をと仕留めすして彼と別れることゝなつた一條然れど今とおつては甲斐おい譯おれは只汝等が娑婆へ出て萬一彼に逢ふた時お乃公が斯ういふて居たと話て呉れと語る折柄鞘の表よ牢番が五番の間頭一枚入檻るぞと喚ぶに應じて仙吉がヘイと答ゆる聲の下受取る役の一人が入來る囚人の首筋掴み受取ましたと引摺込み其手で押伏せ脊骨を一蹴り聲張上げ「コリヤ若輩是まで來たのか新面か此間の頭よ外の役々目見をさして夫から后掟の段々語つて聞かさん此方へ來せよと四に這して坊主壺に蒲團敷き之に坐したる鬼門の前に引据て是が頭の仙吉さまぢや右手が隱居の坐で買巢の久八さま左が客分强盗の幸吉さまサアお目見濟んだら貴樣が罪の次第を申立よと云とれて囚人と兩手を突き初めて來し者おれと各々方にも宜しく御願申すと低頭平身挨拶をこそ爲しけれと頓て掟の次第夫れくに語り聞せて居たりけり

第三十三回

宵の間と誰語るとなくに寫のけるも四つも疾く過ぎ夜中近くにおるに連れ皆々脚指交して

打臥しつ自由のきかぬ身ながらも夢ばかりは思ふ樣々方々を駈回り鼻雷の聲のみ高かる中に五の間の間頭仙吉は何思ひけん挺然と立上り牢屋の內外耳側立て、覗ひ濟し今日這入ッて來た早邊伴五の側近く探寄り小聲にて晝より見て置たが此ゑ居るは早邊ならん起よ〳〵と搖覺せば伴五は何事ゐやと打驚き應をしつゝ其處に畏こまるゑぞ仙吉と倘も小聲ゑて「乃公は兎門の仙吉ぢやが少し尋ねたい事があるから手短かに隱立せず言ふて仕舞へ」「言へと之何を「イヤ別の節でも無いが先年大坂の野堂町ゐ住んで居たお秋と云ふ女の事を「是は思ひも寄らぬ如何して夫を知つて居らるゝやら「オ、左樣いへば貴樣にも覺があると見ゐる然らば又死屋橋ゐて藤三を殺した一條も餘もや知らぬとは言はれまい「エ、「コリヤ鄙かにせい貴樣は全体何呆聲の高い奴ぢやシテ此藤三を殺した次第と調べの時に口を立てたかエ、何を思圖々々仕くさる白狀したかと云ふのぢや「イエ〳〵申立は致さなんだ何卒此事ばかりは頭の慈悲でお含み下されたう存じ升「イヤ成らぬぞ官へは別ゑ告口せねど如何でも此儘に做て置けぬ義理がある「夫は又如何ゐる仔細候にや「コリヤ素浪人の切口上と置て呉れ義理と云ふは頼れた高島屋のお秋に對してあるのぢや「然らば那のお秋を陰存じか「陰存じ處か今之乃公の女房に成つて居るが其又お秋が乃公に頼んだといふ筋と問拔けた貴樣ぢや解せまいから荒增し言ふてやらうが外でもない貴樣が無体の色を仕掛て樣々苦しめ抜た其揚句に戀郎の藤三をばバッサリ殺した一件其折乃公が小陰で素つかり見聞て居た故後に斯ゑした事よりしてお秋ゐ逢て委細に話した處から口の約束のみもれど一旦頁人と定めた上は其人を殺せし早邊伴五と我仇重ゐる怨もあることなれば力を添て擊して呉れオ、合點ぢやと諾ゐふて夫から以來お秋と共に日夜貴樣を尋ねて居たが處もあらうゑ今此でバッサリ出合ふとは不思議の成行古い樣ぢやが實ゐ優曇華のはゐまち得たる今日今宵イザ尋常に覚念して死了りくされと云ひも敢へず伴五郎が咽元骨も碎けよと不意に絞つけ手足を張りて悶へ跳躍くを力任せよ壓縮め兼て用意の三尺帶にて倘も咽喉縊りゐげ難なく息を止めたる折しも傍ゑ寢たる一人の囚人ムックリ起て人殺し〳〵と喚く聲音ゐ夫と察して仙吉と已れ毛馬屋の番頭友造奴黙ッて居れば好い事を左樣吐したが百年目次手に料理をセにやならぬが全體乃公と貴樣とは前生からの仇同士と云ふ譯か今迄夢にも知ろまいが貴樣の巧みの裏を掻いた小栗栖村の涙人は此に居る這の仙吉ぢやア、貴樣のためにと熟〳〵惡い兎門筋と見ゐるぞと笑ひながらに絞あげて手もなく其處に打斃し其又傍ゐ寢たる一人を忙しく呼起して貴樣の罪と最輕く其上日頃敢心の効しも充分に見られれば如何で乃公と雖い

命ソレ此處の伴五が首の帶にて乃公が手を縛れエ、愚圖ついては深切が無益になるソレ悉人が來る樣子遠慮も時よ因る如何でも言ふ通りにソウぢや〳〵斯うして置て大聲あげて貴樣が手柄とせへ早う娑婆に歸る事が出來るぞ寢ては居れども皆々頼んだと言ふ辭も未だ了らぬに牢番大勢駈來り提灯指つけ此有樣を見付出し是はと駭く此方にて鬼門の仙吉一跳高く飛あがり舌喰切つて失にけり

第三十四回

攝津と和泉と堺の市街宿院邊に店構立派に開く呉服商其傍らお荷問屋も兼て營む田邊屋の勝手の室で一人の女が主人伴五に打向ひ「貴君が伴五樣と仰ッしやる御主人で御座り升かの」「左樣ぢや主人伴五で御座る女中には此中から度々尋ねてお出の處長らく旅行を仕て居たのでお目にかゝられなんだが俺の方には一向見知らぬお人如何いふ用事ぢやな「無しつけながら彌々貴君が伴五さま「何僞りがあらうぞや「夫なら全く人違ひ「エ「イヤお名前が妾の尋ぬる人に似て居りました故若やと存じて御面倒を致しました「似たとて如何似たのか「妾の目指すイエ尋ねるは早邊と申し名は貴君と同樣にて郎の字がつくので御座り升「ハヽア早邊といふ苗字ではお武士か何れ平人でとおさゝうお「お察しの通りお武士で御座ります

「夫では汝の尋ね樣が不思議お全体お武士を尋ねるに何程好う似た名前迚商人を夫かと間違へたとて如何いふものぢや必らず是よと何か深い仔細のある事ならんお元來俺は大阪在なる三軒屋村で育つて其後斯ういふ商賣する者なればお武家には縁も由縁もない男目的が違ふてお氣の毒な併し是に就てと如何も汝の身の上が合点行ぬ聞て無益おもあらうが斯ういふ事を問糺おらぬが俺の性分大事なくば話して下さらぬか何か色戀の事から起つてナニ怨があつてと云とる〻か夫でと位更入譯聞たいハヽア言はれぬは次の間よ人の居る故かヤイ〳〵誰も皆皆らく奥へ行けと追遣りて扨女に向ひ如何に〳〵と問掛るよぞ女は此場に至つて隠すに術なく亦主人の心底も悪しかるべしと見ねざれば實は此間より申した妾の名前も僞りにて全く大坂生玉邊なる高島屋ぢうの娘秋と云ひ升ものシテ早邊伴五郎に怨のある次第は斯々した事より起つて云々の成行におつた譯なりと正り直お良人と願む仙吉の賊なることは憚かりて言とざれど其外と我身の素性さへ漏らさず細かに打語るを熟々聞て主人と手を組み霎時考へ居たりしが頓て頭を擡げて「今言とれた所では汝おは妹があり又今より十四年程前姉妹一緒よ實の親に離れ尻無と云ふ川で船の中に居たを拾とれしとの事あるが夫とお前が覺て居たのか「否養母ぢうの書置に記てありましたので其時妾が歸さんは家に

居ず母さんは今此へと川の中を指示たさうで涉座り升「フン夫あら一体汝が實の親の名は。知らぬとか成程幼い時の事なれば分らぬが尤ぢや「然う仰つしやれば妾の實の親を涉存じか「汝の段々の話で確かり夫と分つたが然して見れば汝の實の親は知つて居る段ぢや無い俺とは前に云ふた三軒屋村の大家若倉屋へ奉公した朋輩中で汝の爺さんは正直淺平と綽号を取つた老實人母さんはお石と云ひましたが數ふれば實に十四年のその昔十一月十五日は主人の誕生日とて夜更る迄酒宴ありしが其虚よ乘じて盜賊這入り三百兩の金紛失。處が斯々した事から當時他行と云へる淺平どのに疑かゝりお石どのとお前等兩人に尙一人の乳飲兒ともよ此晩盜賊に傷つけられた丁稚ゞ吉の父袁賣屋勘藏といふ男に預けとありしお女子と思ふて油斷せしにや其夜の曉方迄お石どのは子供を連て身を隱したと勘藏よりの知らせに依り所々方方へ手分けをして行方を穿鑿ありしか右の尻無川の海近い堤の裾よお石どのか平常よ持て居られし巾着か落てあり又其傍りお繋であり或る漁師が手船の繋繩斷れ沖へ流れて磯端に打揚つて居た處にてもお石と此船にて前岸へ渡り何處かへ逃たに相違ないと云ひ否身投を仕たのぢやあらうと色々の評判ありしか其中川の吐出しの瀬に兒を懷いたまゝお石どのゝ死骸かあつたで愈々身を投げた方に極つたか其姉娘二人と如何なりしか近廻りに死骸も見ゑず就ては彼の船の沖へ流れ出てあつたは全く兩人の兒を連試しに乘せて拾手あらば拾ふて貰ゑん積なりしに果して誰か拾ひしあらんと推量して居たが但淺平どのゝ行方ゑ今に皆目知れ兼るが誠に笑止の事やと云ふ辭お秋ゑ計らず生の父母の誰々ありとは分りしも母ゑ非命の死を遂げて父は何地へ行しか生死の程さへ覺束なければ此に亦一つの愛ひを添へ坐ろに涙に暮れて居る後よ思ゑず人ありて其淺平どのありお石どのゝ身の成果を細かよ語らんと云ひつゝ入來るものありけり

第三十五回

其時主人伴五は入來るものを誰なるかと打眺め貴樣ゑ京都へ奉公に遣つて置た弟の才次郎あらずや其顏色といひ風体といひ全体如何したのぢや又淺平夫婦の身の成果を貴樣が何で知つて居るかと訝り問へば才次郎は其處に手をつき兄へ挨拶お秋へも會釋して「今お話しの淺平どの夫婦が事は全く行方の知れぬでもなく亦身投げせられたよもあらで何れも人手に掛つて敢ない最後其又殺し人を誰かと云ふに袁賣屋勘藏「エゝ其勘藏と云ふゑ先程御主人のお話しあつた若倉屋の丁稚ゞ吉の父親「然うぢや〳〵併し才次郎よ今貴樣が彼の勘藏ゑ淺平どの夫婦の殺人なりと見て來た樣に言て居るか誰から聞たか合點か行かぬ「成程

是は私か過り話しの元から申さぬ故御不審の立つ筈は面目あうと御座り升が先私の身の上よりお耳に入れんに近頃偶とした事から祇園新地へ通ひ過ぎ終よは奉公先よて多分の金を使ひ込みしも幸ひ主家よてと氣取られあんだよ天道と恐しいもので年と身分よ似合ず金の使方が多いとの疑ひにて忽ち官府の手に掛り町奉行所の牢屋よ繋がれましたが其牢頭は鬼門の仙吉とて名に似合ぬ慈愛の厚い人で私が入牢以來深く後悔仕て居るを熟く知つて又其罪も一時の心得違なればとて以後の處を深切に誡められ他の者とは格別の待遇受けて居ました中或る日私お限りて頼み置くことかあるとて耳に就ての悄〻話し全くと此に居らるゝお秋さんへの言傳にて其趣は斯う〳〵ありしと仙吉か幼い時より今迄の成行親尚藏に係る事柄お秋に就て始終の心入之よ續では早邊伴五郎か京都に來て犯せる罪のため料らず同じ牢屋に入りたれば个樣々々よして兼て約束した通りお秋のためよ仇を討たん積りなれば今何處との宛途はあけれどお秋は云々の品容故御身が此を出た后と何卒隙分ともお心懇けて萬一逢見ることがあつた時よと右に云へる俺が身の素性と志の程を知らせて貰ひたいと折入つての頼みを開き原來は私の兄もお話しの若倉屋に奉公したものと言ひ出つ高々顯の筋は委細承知と返辭を仕て置いたが同じ夜の亥の刻頃果して仙吉親方か早邊伴五郎を牢内にて絞殺し其時又喧しく聲を立てれ頭陣なる毛馬屋の番頭友造と云ふ奴をも邪魔よあるとかで續て殺し夫から私を喚起して到底自分とない命なをばとて自ら手を後に回して私に縛らせ段〻外の者をも殺さうとしたのを私が取押へた振りよせば此働きにて幾等かの罪を輕めて貰ふことが出來るとの委しい意を聞く間はあらねど世にも稀なる情の程有難うと覺ゆしが亦事の恐ろしさと忍ひぬ情合もあることなれは容易く承諾もせざりしを然しては折角の深切か無になると強ての勸めよ默止がたく言とるゝ通に仕た折しも多くの牢番駆來り始末を吟味あらんとする時に仙吉親方と跳り上り舌噛切つて沒なられましたと聞てお秋と是ことばかりに仰天し餘りの事よ直と呆れ言葉も出す只茫然として居るよ才次郎と一息續で「扨其夜の騒ぎも肝腎の仙吉親方が右の次第とありしかば夫なりにて濟み定めて合牢の中よは仔細を知つたもありましたらうが何分誰も彼も歸服仕て居る頭の事なれば一人として隅ッとも云ふものなく案の如く頭を取押へたは私の手柄とあり其上奉公先の主人より手を廻して宥免を願ふて下されたに因り思ひ掛なく罪を宥されお下げになりました故取敢ず御主人へ大方ならぬ慈悲の程を悅び聞に就ては夫の使込んだ金の才覺もあり又牢内で受れた次第と奉公する身分では兎角思ふまゝに行屆かねと何れも兄御に相談するの外は

しと高き閾を攀越して勝手口より這入つて見るよ其處等に一向人は居ず如何ある事かと次の間まで參りますれは不意なくお秋さんが見られて幾平どの、行方お石どの、沒なられた事共をお話最中是と不思議な事と存じたれば我を忘れて飛んで出で大きよ無禮を致せしが併し私も是で一肩卸しましたと語り了るに主人の伴五と屢々嗟嘆して手を拱ぬきさし俯ぶくのみ未だ何とも言出でざりしがお秋と亦何思ひけん落る涙を振拂ひ挨拶そこ〳〵突と坐を立つて出行んとする有樣なるにぞ伴五と霎時と引留め「コレお秋どの何れへ行る、のか「ハイ最前から貴君のお話と云ひ弟御が良夫よりの傳言にて妾が生の父母の非命に沒くなりました事を初めとし良人の身の上は更あり親の仇と己に死し年來著け狙ふた伴五郎は良人が平生で其望を果して呉れシテ又良人と刺みし其人と矢張仇の骨肉なりしとは神あらぬ身の知る由あしと云ひながら怪しき義理に縛れて赤繩を結びしとと何事ぞ左はいへ仙吉どのが恩情は尋常一通りの事あらず强ち怨むと理よ當らず殊に天命とは云ふもの、今や墓ない最期を仕られたと聞くからには爭で嘆かで居られうや思へと〳〵世に妾程不幸あもの と有りますまい然れは今迄盜人の女房とあり自から好んだ譯ならねど犯せる罪のあるだけを名乘つて出で、身に著く垢を洗あげ後世安らかに往生なさん覺悟なれは必らず留て下さるなと强て這裡を立出で行ぬ

第三十六回

天麗かあ彌生の末殘りの花を野に尋ね日常の鬱を遣れ貝拾ふあらで路草を摘みとりてと手弄ぐり口の三味線一丁で端歌長歌流行歌淨瑠璃さへも出たら目よ合はす調子よ乘りが來て漫々歩きも捗が行き早馬場先も打過ぎつ落著く先は生玉の舞臺の床几掛卷くも畏き神を後ざまあ脚を休らう甕者交りの遊び客目み諸ろの景色を眺め口に諸ろの酒落を吐く折しも向ふに風雅坊叶八と雅あ似て非ある名うての粹間瓢簞肩あ千鳥あし生酔ながら本性と違はぬものか那方の客の一人をば早くも見つけて走り寄り大手を廣げ前よ立ちヤア――〳〵是と尋ね〳〵し仇敵本町丹後屋の旦那と見たは僻目かサア斯う附込んだ上からと最早叶とぬイザ尋常に立あがつて南へありとも北なりとも勝手な處へ召連玉へ如何にや〳〵と言ひあがら床几の上の茶椀取り持つた瓢簞傾けて餘瀝をグッと飲干したる可笑味に今一個の客と笑ひながら「德兵衛さん仇と云へば此頃私を仇と思ふて尋ねられたことがありました「ハア、貴君の事あらお年は取られても必らず女の仇「成程女と女ながら眞劍正銘の仇討「是は亦變つたお話し如何いふ次第で如何ありました「然ればサ申せば長い事あれど私を仇と取

遲へ尋ねて來たのとお秋と云ふ女よて其又間違と彼が狙ふ早邊伴五郎と申す士と私が名前の田邊屋伴五と熟く似て居たから起つた譯でありましたが全体此お秋と云ふと眞逆因も縁もないものでおく實と私が年の行ぬ新三軒屋の若倉屋お勤た時の朋輩淺平と云ふもの、娘よて簡様々々お不仕合せ思ふ男は那の伴五郎に殺され思とぬ人お義理より縋まる赤繩を結び現に此程も伏見から當地へ來る船の中で其妹に巡り會ひながらも名乘の出來ぬ身の上ありとて其儘に別れたさうですが世よは不思議な事もあればあるもので御座り升と語るを皆々耳傾けて聞居たる此方よは娘を連れて旅掛けと見もる老人が最前から隣の床儿に休みながら話の次第を漏聞いて頓て娘を引連れ伴五の側に進寄り揉手をしつ、挨拶して今お話しのお秋が妹は此お嬢と申すもので御座り升此間船でも大方夫と察しましたれど何分那兒が名乘合ふて呉れませず當地の八軒屋へ着くと直ぐ何處へ行きしか分らぬ樣にありまして本意あり限りにとありながら必らず當地よ居ること、存と心當りを夫々探して見ましても一向に見當らず去迚遥々と尋ね參りし事なれば上町よ懇意お先のあるを幸ひ此に厄介とお つて居て所々方々を歩行廻今日は知れるか翌日は分るかとツイ〳〵長逗留にありましたが今思ひがけおく貴君のお話しを仄聞いたは必らず神のお引合せお遊びの妨げとは存じますれど私共は夫がため胸を傷めて居ります故お秋が貴君の方へ參つた後は如何ありましたか何卒委しうお話し下されませと言とれて伴五は眞蹌顔實は世の中は廣い樣でも狹いもの迂濶に口は利れぬと思ひながらも親と子が離む心の不憫なれば是から先の話しにと憚かる所も多しとて別の床儿に居變りて小聲にあり先自分の名前住地を言聞ゑ穴より此程お秋が來た時の話しの頭末手短かみ告げ知らし就てと今と何處へ行て如何にせしかは知れざれど私が心當りと心と三軒屋の若倉屋一軒のみ是も、お秋どの、身の上がお身の上あれば尋ねて行かる、ことはなからうが何も心ゆかせなれば訪はんと思はゝ訪玉へ私も明日は何の道三軒屋へ立寄つてお秋の一條委しう知らせて來ん積りあるが今日は當地の取引先の接待にて遊びに來た事あれば長う話しと仕て居られぬ若し堺の方へ序もあらば立寄られよ其時又々餘談を盡すべしと言ひ樣元の床儿に立歸る跡に兩個と茫然と再び此に望を失ひ別てお蝶は悲しさの遣る方なけよ見へにけり

第三十七回

此に又三軒屋の若倉屋重右衛門と十四年前霜月十五日の夜に盜賊忍び入て彼の三百兩の金を盜られし其折柄出入の袈裟屋勘藏に預けし淺平の女房は乳飲兒懷て尻無川で果敢ない最

後を送げ遂れた二人の子供と高野詣りをせしと云ふ淺中の行方は弗に分らずなり又夫より後丁稚の〆吉は暇を取り其父の勘藏も京都の方へ引越すこと、なりしが是等は何れも若倉屋一家の上にと咄か障りを爲すべくもあらねど夫の重右衛門が引伸さん計りよ愛寵みて育て居し獨り娘が十六歳と成し頃兼て好い媚をと那是思案運す父の心を子と知らでや何時か村の良らぬ若人と野合ひて終よと何處へか身を隠したれば重右衛門は死ながら掌の珠を失ひし心地にて彼より外にと身代を譲べき兒とてはなきに斯うなる上は行末に何樂と云ふ事あければ懸駕と思ひを費やすも疎ましとて多くの奉公人と暇を遣り本宅は取崩し田地は悉く小作に宛て別に隠居所小奇麗よ建設け其處よ安々暮せしか今日あん尋ぬる人多くして朝早うから一人を歸せば午過て又兩個親子連なる客ありて一間に通し物語り「扨と其處よ連られしが淺平の遺れ片身の娘なるか今尋ねらるゝお秋よりと私の方へ少しも音沙汰なけれども實は今朝方堺の田邊屋が尋ね來ての話しにてお秋が身に就ての一部始終幷びにお前さん等の事も聞ましたが悪みても尚餘りあるは那の勘藏奴が行ひ責ては其死ぬ前よ悴が吉が意見にて先非を後悔したと云ふ丈けが取柄とも云ふべきか是に就ても彼が我家で三百兩の金を盗んでから一時に俄長者とも言はる、程に成出しも發又悴がため三百兩を盗れてより次第お運命傾きて最も驚恠き裏屋住居眠さへ思ふて盲目同然終にと五体も滿足ならで果敢なく水の中よて死したるは因果の道理天恐ろし夫よ又我が身の上と物心を覺ゑてから以來よ悪事と勿論人お悪い仕向けを仕たことは露聊かも覺えないに女房には早う死お分れ枝柱とも思ふ獨りの娘は云々して家出おし今でと全く思ひ斷ゑたとと云ふもの、兎ゐすれば胸よ浮出で片心に掛りますと云ひつゝ太き息を吐く主人が話を兩人が聞き思はず親子顔見合せて其父利吉が「已に今朝程田邊屋さんが參られた上とお秋が身の上又私等の此方へ參りし事は最早申ませぬが今しもお話しの娘御が家出なされし次第に就き少し心當りが御座り升「ヤ、夫と思ひも寄らぬ全體如何いふ仔細で「然れば貴君の娘御とヤし升は若や只今年齒と二十五六で色白く背は高からず低くからずナニ〳〵左の耳朶よ一つ黒子がありて名とお新成程然う仰つしやれば夫よ違とない「違ひないとは如何した事が「ハイ此お蝶が十才の年でありましたが私の隣へ引移りて來た一人の女今お問ひ申した品容お話の黒子もありて名も亦お新といひ器量と好し賢うもあるに如何なる譯でか孤り立ち鳴物の稽古屋開て蔭が身を助くる程の不仕合せ細き三筋の絲に憑り其日々々の活計を立て斯る生活をするものには兎角浮はゝ〳〵しき擧動あるが尋常あるお然せる事は少しもあく極めて手堅い人お

れば娘も頼んで手放解からツイ昨年まで稽古を仕て貰ひました是につけても日常及ばずながら彼是と世話も焼き親しう行交ひする中に段々素性を聞きますれば全く大阪邊の豪家の娘ありしが親の許さぬ不義淫行只夫のみかと色に溺れて其男の性質の善惡などには頓着なく終に唆かされて欠落し手に手を取りて面白可笑う仕て歩行しと里竟持出した金のある中路用の盡たが縁の斷れ目尾張の名古屋に來た折柄情けなくも男のため苦海に沈められ初めて覺つた身の過失親に對しては大不孝悔しいやら哀いやら歎きに餘りてと幾度か身を淵川へ投げんとせしも生憎人お留められ夫も得遂けず今日よ翌日よと味氣なく日を過し行く怎が中にも未しも賣られしと娼妓遊女とと唐變り座敷の勤ばかりする厭ひ女なれば時折ふゝ挑む客があるとても甚く絶謝り承認かず一旦穢れし身ながらも此上の操を亂さじと誓ひしが却て亦客の愛顧を受ける種となり思ひの外よ花走子と稱へられ手元に若干の貯蓄も出來たる故五年の年季を三年餘り勤め其跡と我と我手に身受を仕て斯は稽古屋を開くことゝなりたれば其中好い機會を求めて叶とぬ迄も親父御よお詫をして元に復らんものと言ふて居られしに去年の冬より料らず世話する人もあり且と少しでも親里に近ければ都合好しとて泉州堺の街へ移住まれました私も是非一度と尋ねる積りながら自分の用が形の如くに果てされば未た其場にと參りませぬが何分右ッすか如く今日にてと素ッかり改心と見込ますれば何卒昔の過失をお免しあつて元々に仕て上げて下されませと願み聞もる折しも表に飛脚の聲高く堺の田邊屋さんから急便りと投込んで行く其手紙をお蝶が氣早く取つて來るを主人と封押切つてナニ〳〵今朝程お話し申したお秋は昨日當地の奉行所へ到底名乘出でたるよし確かに承りました今日翌日にと何れ中野屋親子が御許へお尋ね申すべきことゝ存じまするば其節と此由同人等へもお話し下されたいとか是と好う知らせて呉たが扨も〳〵とばかりに嘆息せり

第三十八回

正面お之掛りの與力傍ら兩人の同心上樣お是は今日呼出されたる播州某藩大坂倉屋敷の留守居役早邊兵庫が扣居り自訴の犯人お秋は縄おかゝつて白洲の庭に坐し其右手には大坂野堂町丹波屋作兵衛同長町呉服屋重兵衛の娘お德同町森田屋平六おゞ引合のもの幷に其附添の町役人一同に畏りつゝ吟味を受くるは是おん堺町奉行所の大白洲にて非嚴重に見ける が掛りの與力はお秋に向ひ其方が此程自訴した罪の中無宿鬼門の仙吉事ゞ吉をば盗賊と存じながら共に所々を立廻り當地おり大阪又は京都なり其外他領に於て同人が盗を働ける折

屢々助けをなせしとの申立は早速夫々を取調べ亦問合せもあしたるが京都奉行所にてとゞ吉が死去の前已に諸方にて犯せる窃盗は全く彼一人にてゐせしといふ含味詰の口書も定つたとの返答あり然れば其方は兼て自から云々ありと言立てたれども必らず心得違にて申せるならんか又其方が良人と約束した廉ありとて藤三郎とかを斬殺せる早逐伴五郎を仇と存じ込み又重なる怨もありとて同人を討果さんためゞ吉其々武家方の屋敷に刃物を携へ忍入りしは不埒の所業ゐ似たれども目指す伴五郎のあらぬを知つて直ちに立去りたる由兼て下調の節ゐ申せしが確と左様か間違ゐきやとの尋ねゐ應じお秋は下げし頭を擡げ其答を爲さんとするを早逐兵庫は掛りに會釋して只今お尋の趣きは彼より如何ゐお答を致すかは存せねど拙者方の屋敷ゐ於ては大門小門非常口其外塀構ゐ迫るまで晝夜用心怠りなく何れも掛りの役々に申付け嚴重に守り居ますれば聊か以て彼等の忍入るべき筈ゐく現に亦彼が申立の夜に曾て左様ゐ儀ゝ御座りませねば是は何かの間違と存じます此逐然るべくお酌分けを願ひ奉ると立派の口上に掛役はハタと膝打ち這ゝ言ゝれたり然もあるべしと云ひながら向直りて夫の呉服屋重兵衛の娘ゐ徳を喚び其方は父の存命中三百兩の金を盗賊に奪ゝれし事に就き大阪奉行所にて此秋が仕業ならんとの疑掛り前年一旦召捕ゝなつた廉もあれば今日此に召寄せたが昨日京都奉行所より差廻しとなれる無宿仙吉が口書の趣では全く同人が業ゐて其中五十兩は長町にて取り落せりとの事ゐあれば秋の手より伴五郎の受取りしは全く秋が申す如く森田平六方より立歸る途中ゐて拾ひ取りしと云ふゝ實精ありと見もるが是ゐ就て其方何かゆす所もあるか「イヱ少しもゆ上る所は御座りません全体ゐ秋どのゝ決して其心から盗賊の群に從ゝれたでない様ゐ存じ升妾も深い恵みを受けましたもの何卒其罪をゐ免し下されたら願ひ升」「コリヤ〳〵其方が如何なる恵みを受たとて天下の法を枉げ秋が罪を宥すことは相成らぬが夫れは夫として其處に居る森田屋平六ゐ尋ぬるが昨年四月二日秋が其方宅へ身賣の相談ゐ參つて立歸れる刻限は日の入頃でゐつたか亦丹波屋作兵衛ゝ翌日早逐伴五郎の使藤三郎に秋が三十一兩の金子を渡せしゝ確と其方宅の事にて秋のゆ立ゝ云々なるが是も相違ないかと推問はれて兩人は異口同音に「お尋の通り聊か相違陪座りませぬと答へをしつゝも丹波屋作兵衛ゝ尚も進んで「恐れながらお上様にゆ上ますが元來此お秋ゝ私方の借家に久しう住んで居りまして殊ゐ伴五郎藤三郎とゐ係る一條でゝ初めより之に携ゝり夫の盗賊のお疑ひで召捕られた以來は長らく私も他參留を申付られ迷惑致しました次第ながら全体お秋は至て親ゐ孝心深いものでゐ伴五郎へ返す金ゐ就きまして

成行で御座り升と委曲よ言とんとするを怎は要あき申立なりとて押止め掛役は辭を改め扨引合の者共一同に申聞けるが只今迄の調べにて秋に係る事柄よ就ては各〻其申口相分つたれば最早御用あし勝手に引取れよ亦秋と自訴致せし箇條と多けれども或ひは罪ならぬ事迄罪なりと心得違へし廉も少なからず詮ずる處と途よ落ちたる金ありとて拾ひ取りたるまゝ御屆も致さず勝手に遣ひ果せしは不埒なり且大阪奉行所あて疑の節あつて召捕られ中仙吉事〆吉が獄固の役人を刼して其方を奪ひし一條は最も輕からぬ事あがら是迚牒し合せて仕たる譯あらねば此罪と〆吉よありて其方は預からざるあ似たり勿論是等の詮議は後日の事ながら何れ自訴の廉もあればお慈悲あ御裁許があると心得神妙あ致して居よソレ一同立ませいと言ひ渡し此日の吟味果てたるが此よお秋と我と吾が覺悟極めて名乘り出で苟さ吟味も受けざれど獄屋の辛苦さぞかしと思はるゝ迄容貌に現れ只悄々と差俯ぶき掻もあげざる額髮に人の見る眼を遮りつ今や押丁の引くがまに〳〵牢屋をさして歸るとて溜りの前よ來かゝれば前の丹波屋作兵衛森田屋平六お德の外に彼の若倉屋重兵衛門田邊屋伊五並よ京都の毛馬屋菊太郎を初めとして中野屋利吉がお蝶をさへに引連れ立並び居て陽はよ辭は掛けざれど何れも物言ひた氣あ我顏を見詰る中よも妹のお蝶が早涙ぐみつゝ我を忘れて近寄り來るを然はせぬものと言へば得よ言はで眼を以て夫と知らせる間だにも泣くより外に術あらで今日の吟味の樣子では慈悲な裁許よあるとは知れど見送る人も送らるゝ我身も共に悄然と涙を飲んで別れけり

第三十九回

光陰と實に梭を投るが如く又世の樣の遷りゆくと飛鳥の川の淵瀬のみならで德川の流も終ひには果敢あく絶えて王政復古の愛たき御代と變れる明治元年となりたるが此に三軒屋村ある若倉屋重右衛門は前あ尾張の中野屋利吉がお秋の身の上につき尋ね來し折料らず家出したる娘の行方を委しう聞き强ち利吉が云ふ所を疑ふとよはわらざれど尙人を堺に遣つて娘の容子を探らし見るよ誠や先非後悔の効し明らかよして其後も利吉親子とお秋が一條の何とか樣の分るまで逗留せられよとて我家あ留めあれば屢々師參の事を取持つを好き機として去年の夏に娘の謝罪を容れ愛たく元の如くよ親子一家よ暮すこと、あり恰ど其頃お秋も堺の奉行所にて段〻詮議の末情を酌み罪を減せられ其上自訴の廉に因り格別の譯を以て罪狀赦免の裁斷を受け又毛馬屋菊太郎と一旦呉服屋重兵衛の婿養子となる約束もあり全体其妻たるべきお德と親に似ぬ貞實の性質あて已に女夫の交りをもなし且お秋が〆吉と共

に毛馬屋の番頭友造が悪計較を計いて同家の惑乱を救ひし折に新助へ勸めし辭もあれば主人新助と祇園の仇し野樓に掛合元來筋道を云ふとき之前より亭主が慾に迷ふて番頭友造に語らとれ小德のお德を欺いて其身を小栗栖村より隱させたる事に就て之共に欠落して情死仕た如くよ言立て居たる抔の不都合ありて夫の友造の惡を助けし其母お萬僞巫女のお勘并に醫師の周伯公事師の啓次などが何れも京都奉行所にて夫々仕置せられしとき同じく相當の罪を受け此時より小德と思えずも自由の身となりたれども夫等よ係らず身の代の表示しとて幾等かの金を與へて奇麗よ手許よ引取り呉服屋重兵衛と形の如き惡人あれば其跡目といふにあらねど何れ菊太郎は分家させることあるべとて白金屋といふ家号にて大坂の松屋町に呉服店を開かせお德と表向きの夫婦となしお秋を此よ寄留らせ尙中野屋利吉も久しく大阪ゑ滯留中其營業の上ゑも便利ありとて終に大阪に引移り白金屋の最寄りに店を出すこと、なり是にて何れも一片付とあれるに就ては抑も此一條は其源若倉屋より事起りたるものあれば重右衛門と兼ての性として淺平よお石に其嬰兒に又若藤の藤三郎と吉の仙吉勘藏の重兵衛に至るまで凡そ是迄に非業の死を遂げたるものは邪正善惡有緣無緣の差別なく自他平等に其冥福を修せんものとの心掛ありしも世の變亂よ妨げられ其志を果さゝりしよ今は

稍世の人心も落着きされば此年の彌生某の日大坂中寺町淨蓮寺の本堂にて施餓鬼供養を執行ふこと、ありしが白金屋菊太郎夫婦は之を聞て其脇施主とあり又此席に參り集ふものとゑ秋を初めとし毛馬屋新助夫婦并びよ新次郎中野屋利吉親子田邊屋伊五丹波屋作兵衛森田屋平六等よして供養と其日の正午より初まり施餓鬼の壇には香華燈燭莊嚴を極め供物堆かく並べ備へ門前には夥多の米錢を積置て乞食共に施し讀經の聲音樂の響と唱く人の心耳を澄まし此功德に依ては如何なる冤鬼も得脫すべく見ゆける折しも年尙若き尼法師が姿やつれし道者めきたる一人の老女を伴ひつゝ法莚ゑ入來るを皆々何者よやと熟く視るに這は如何に最前より暫らく座を立ちたるお秋が俄かに斯る樣となれるなれば是はく、とばかりに打驚くゑゑ秋と靜かに其處に坐りて一座の人々に打向ひ此に伴へるは其養母高島屋おぢうにして一昨年野堂町の家を出し以來書置よいひしとは裏うへに西國の神社佛閣を巡拜し頃日より尙東國を巡らんとて大坂に立寄り今日料らず門前を通り掛りて米錢の施しを受け就て之此供養の緣故などを問尋ねてお秋の事を聞知り流石おつかしくもあり又その身の上も以前の有樣と之全く變りたれば終に裡面よ立入りて面會したる由を陳べ續て其身は年行かぬ頃より重なる不幸に辛苦を嘗めて其父母同胞の非業に身を果せるのみならず初め思をか

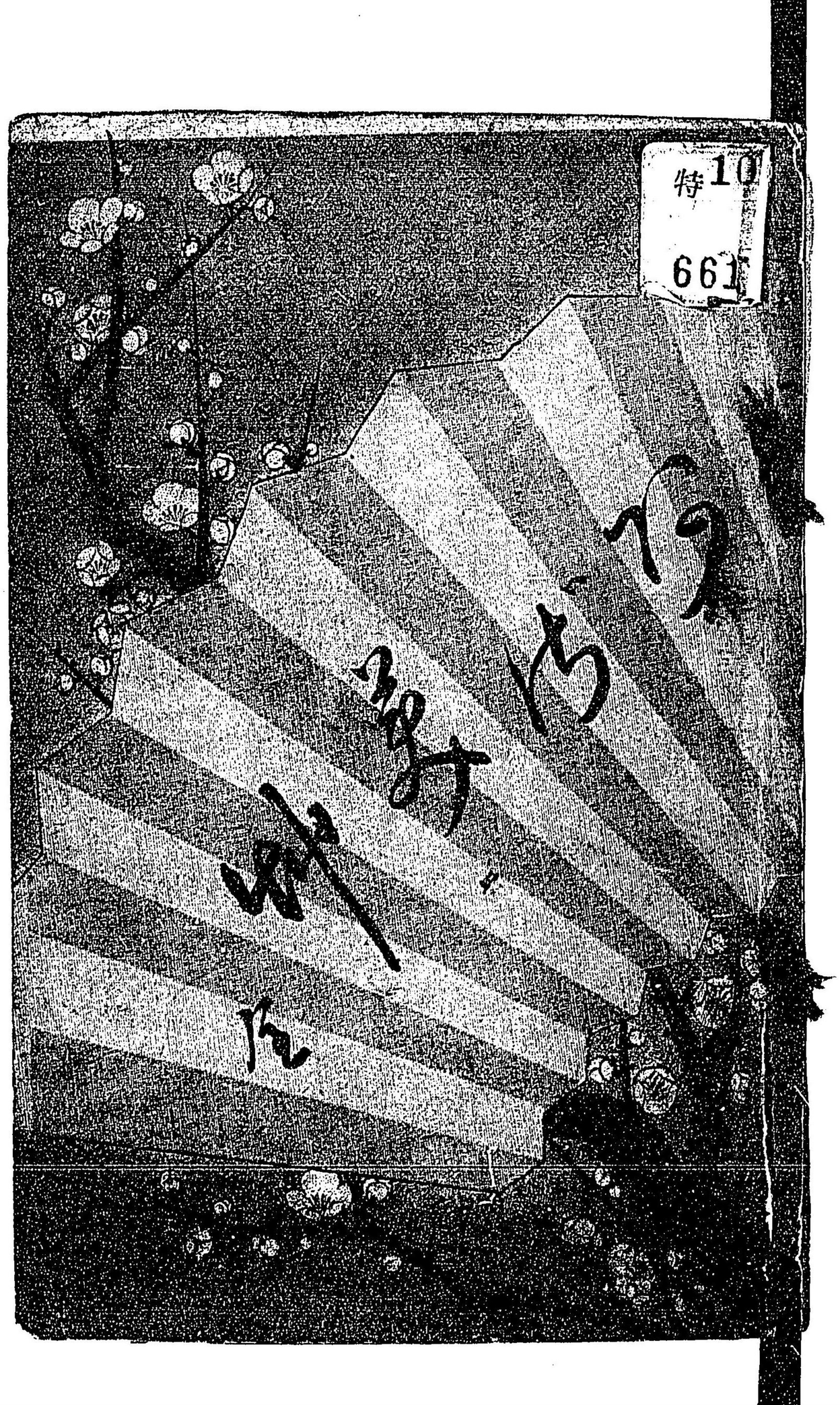
け夫婦の約束せし藤三郎と非命に死し後には不思議な義理より良人と定めし仙吉と俠氣あるものながら盗賊の名と免がれず双仇の片われにして是も果敢なき最後を遂げ我身と幸ひ其罪を赦免されたるも尚後世の程恐ろしければ一つには父母同胞より藤三郎仙吉等の菩提を弔ひ二つには我身の罪障消滅を圖らんとて今朝より密かに此寺の住持に志の程を告げ斯くは受戒法休とあり智信といふ法名授かりしと事の元を告るを聞き何れも殊勝なりと感涙に膝を濡しつゝ其中供養も全く果て方丈にて齋の膳に付き各々過來し方を語らふ折に毛馬尾新助が進み出でゝお秋お向ひ前よりのお話しにてはおぢうどのにとお配偶貴女のために養父御なる何某どのを廣島在に尋ねられしに笑止にも四年前に沒くおられ今は何處とも寄る邊なきお身なれば怎を幸ひと申すにてあらねど菊太郎夫婦と尚年若にて家事の統御が如何にやと兼て心に懸り居る事なれば彼等の方に何時迄も後見旁々お住居下されたい然うあります様すれば友造の一條にて貴女に受けた大恩の幾等かをお報ひ申す心も濟む事なれば何卒此議を承引れよと辭するを聽かず再三強て止まざればお秋おぢうも最早術なく其厚意を謝して漸やく言受けをせしに亦若倉屋重右衛門はお秋が法休となりしに就てと我村に一庵を設け其處に住とせんと云ふをお秋は頭打ふりお志は有難けれども重き罪障負ふた身なれば尚走れより縁のため諸國の霊場を遍歴する志あれば後・見も角今は命セに從難しと頓て辭をみ皆々此を退散るとき兼て其の計畫ありしと見い手早く旅支度とゝのへ養母妹はいふまでもなく其餘の人々にもねんごろに暇を告げお蝶が尚ほも今暫しと引く袖を振拂ひ門前より飄然として立去りしが其後道心堅固に戒を持し諸國行脚に年を重ね今年の夏大坂へ立歸り知音の先々の安否を尋ねしに何れも變ることなくお新お蝶は共に好い婿養子を迎へ子共多く生み菊太郎お德の間にも男女兩人の子を擧げ毛馬屋新助夫婦は新次郎に婦を娶らせて世を譲り若倉屋の重右衛門は已に古稀の齢をから身體最健かにして更に浮世の事に拘牽はず念佛三昧に日を暮らせしに今お秋の智眞尼が老年といふにもあらねど斯く行の功勝なるに幾と〳〵感心し兼て懇意にする大和吉野郡某村なる家が一建立の庵寺は近頃無住とあり法嗣の人を撰び折柄なれば此に住とすてと、はなりしとぞ

あさみ草終

明治廿五年五月二十八日印刷
仝　年五月三十一日出版

發行者　大阪市南區末吉橋通二丁目八十九番屋敷
中村芳松

印刷者　大阪市東區高麗橋五丁目四十五番屋敷
大垣彌太郎



特10
661

089772-000-9

特10-661

あざみ草

竹葉　散人／著

M25
DBN-0038